（表紙）

忠昌公　自長享元年
忠治公　至文龜四年

前編　舊記雜錄　卷四十一

修理亮忠廉京師に至り、將軍義尚に謁し、士太夫に會して交を厚す、忠廉平素倭歌を嗜む、宗祇法師（按に、宗祇性ハ飯尾氏、紀州の人也、少して寺に入り、薙髪して自然齋と稱す、又種玉庵と號す、性和歌を嗜む、連歌に長す、京師に至り勝區名山を遊歷し、関東に至り東の常縁に就て古今集の奥旨を得、古今傳、蓋祇々始る、世人祇を稱して連歌の宗師とし、或ハ花の本と云ふ、祇常に遊歷を好て定れる地なし、西九州に至り、東は奥州を究む、越後國に止る事二年、祇翼を愛し以薫す、人是を問ふ、對て曰、吾翼を愛するに非す、香を愛す、文龜三年、八十二、著する處、竹林鈔、新菟玖波集あり、世に行なはる、新に見へて、古今和歌集・伊勢物語の奥旨を傳へて歸る、按に、延德三年八月六日、忠廉攝州天王寺に卒ス、）

明應元年壬子、長享三年七月廿五日、延德と改元、四年七月十九日、明應と改元、

十月十一日、伊作河内守久逸、師を帥て別府（即加世田なり、）を侵し、尾守ヶ城を襲ふ、別府の軍出て牟田の原に戰ふ、久逸の軍利あらす、久逸過て馬を田中に陷る、園田新右衞門（別府園田氏の子孫今に藏む、久逸の甲冑、久逸の墓別府田中にあり、）人、走進て久逸を擊つ、

三年甲寅

嶋津豊後守忠朝（修理亮忠廉の子、日州飫肥福島ノ主、）新納近江守忠武（新納氏七世、日州志布志ノ主、）と善からす、兵を構ふ、（其事詳ならす、）四月十八日、伊作氏の奴、故あつて其主又四郎善久（忠良公の父、）を弑す、

四年乙卯

前將軍義材（將軍義政の弟大納言義視の子也、義政位を我子義尚に讓る、義尚二十五歲にして薨す、子なし、故に義材を立つ、二年にして河州に到り、畠山義豊を討す、細川政元俄に叛して義材を捕ふ、義材潛に遁て防州に至る、大内義興是を接待す、於是、政元等前將軍義政の弟左兵衞督政知の子義澄を義政の子とし、立て將軍とす、義材名を義尹と改、西州の諸侯を催して京師を襲ひ、再ひ將軍に任す、又義稙と改む、大永元年、襲て淡州に走る、三年、周防國に在り、一色にして阿州に薨す、於是義澄の子義晴立つ、）

兵部少輔を薩州に遣し、忠昌公の援兵を求む、公隅州曽於郡に在て是に見ゆ、一色命を傳て歸る、此時平田右馬介兼宗隅州串良城（按に、串良ハ忠久公の時北原氏領す、後に眞幸に移る、正平中、代宗次郎領す、又平田右馬介重宗領す、兼宗に至て四世、爰に主たり、）に據て叛す、嶋津豊後守忠朝、忠昌公の命を奉し、師を帥て是を討す、兼宗力究て降る、

按に、平田氏其先平相國清盛の子、内大臣宗盛の第三子宗正に出つ、其裔薩州に臣とし仕へ平田を以氏とす、新左衞門尉親宗、氏久公仕へて老中に仕す、其子右馬介重宗、元久公に老中たり、其子美濃守氏宗、忠國に仕て又老中に任す、其子兼宗也、亦老中たり、其孫美濃守昌宗、其子美濃守光宗、其子左近將監歲宗、其子太郎左衞門增宗、四世相繼て老中に任す、增宗罪アッテ誅に伏す、事ハ家久公の傳にあり、至て嫡流断つ、

忠昌公功を賞し、串良を忠朝に給ふ、忠朝平山越後守忠

康忠朝ノ叔父、をして是を守らしむ、

五年丙辰

先是、四年六月二十八日ノ夜、加治木大和守加治木ノ主、隅州帖佐城を襲取る、傳云、加治木の軍夜に乘して南城に乱入し、士人の第宅五十餘を奪ふ、川上筑前守忠直、高尾城に有て防禦す、三日にして、忠昌公大軍を卒して帖佐を救ふ、忠直を賞して帖佐の地頭とす、忠昌公大に怒り、軍を卒し加治木城を襲ふ、大和守力盡て降る、更に薩州阿多に封す、阿多ハ初相州友久の封内たり、故に永正九年三月廿四日、友久阿多城を襲ひ取る、是ゟ加治木氏衰ふ、○加治木氏、其先後漢靈帝の孫阿智、初て本朝に來る、其家傳云、寛弘中、小野関白の諸罪あつて諸州流さる、其中に經平大隅國に配せらる、加治木にあり、加治木主大藏大夫良長死て子なし、經平其妻を悅て男子を生む、藤大夫經顕と稱し、良長か後となつて加治木を領す、七世にして加治木八郎親平、忠久公の時にあたる、十六世左衛門尉忠平、元久公に從て將軍に謁し、能登守に任す、二十餘世にして除せらる、傳云、經平加治木に有て春日大明神を立て祭る、今尚存す、

六年丁巳

十月七日、忠昌公、嚴考忠國公の廟を府下に立て神とし、小城權現と號す、按に、善聚院を以別當寺とす、善聚院ハ大岳山垂護寺と云、眞言宗大乘院の末寺なり、

1665

「國史　巻十二　圓室公」

長享元年丁未、是年七月改元長享、自六月以前猶是文明十九年、長享或作長亨非也、續本朝通鑑、長享取文選長享其福語、文章博士菅在數撰、春二月晦日、送還竹田法印昭慶、據圓室公舊譜、公送昭慶應有贈賄、而不見舊譜及文明記等書、蓋洩之、宮城家臣本田與市右衛門由緒書、載桂菴禪師送竹田法印詩二首、其一、方術如神來活國、榮旋赫赫照江東、天機巧織楓人錦、蠻菓新蓋荔子紅、祖席題詩雖待月、官船解纜欲呼風、愧吾塞外無名草、難入良医藥錄中、其二、海外三州都大守、東誅元惡固吾城、心清藥石山川氣、夢穩轅門風雨聲、医國医人又医病、論天論命却論兵、朝廷若問安邊策、功在皇華誰敢爭、東誅元惡、蓋謂公伐櫛間、秋七月二十日改元、據續本朝通鑑、

二年戊申、事缺不書、

延德元年己酉、是年八月改元延德、自七月以前猶是長享三年、春三月二十六日、征夷大將軍足利義熙初名義尚、薨、號常德院、據將軍家譜、秋七月、足利義材後改義尹、又改義稙、任征夷大將軍、同上、八月二十一日改元、據和事始、冬十一月、公如飫肥講犬追物三日、據圓室公舊譜、

二年庚戌春正月七日、故幕府足利義政薨、號慈照院、據將軍家譜、公講犬追物、於櫛間於飫肥凡數日、夏四月、如志布志講犬追物、據圓室公舊譜、

1666

「忠昌公御譜中」

「正文在本田作左衛門宣親」

（本文書ハ一六五九号文書ト同文ニツキ省略ス）

1667

一長享元年丁未二月晦日、竹田法印昭慶解纜、歸京師矣、

「忠昌公御譜中也」

1668

「御系圖」

忠治

安房丸　又三郎

延徳元年己酉正月十七日誕生、御母大友親政（異本作豊前守政親）、女也、嫁娶之時、供奉人之内有稱堀某者、直爲當家之家臣云々、（「文亀三年ニ当レリ」）十五歳元服、

1669

『正文在宮内社司澤氏』

契約

土用鍋殿之事、三郎丸之妹と契約あひちかふましく候上者、縱雖有他妨、任　神慮、三郎丸と土用鍋殿無二とりたて可申候、仍俊道・俊久兩代覺悟之所領之事、土用鍋殿計不可有相違候、如此申定候上者、正宮も御照覧候へ、あひかハるましく候、土用鍋殿としても、三郎丸と無二心諸事談合、可目出候、仍契約之狀如件、

文明十九年菊月九日　　永觀在判

1670

「島陰雜著」

奉再興八幡大菩薩靈祠一宇

夫以、日州島津庄者、我高祖豊後守忠久領刺史於薩隅日三州權輿之地也、然則當社亦基于我高祖者乎、文明乙巳夏、與薩摩守國久赴飫肥戰場之日、肅詣于祠下、積年不修大敗難起、竊念我軍速獲凱旋、本祠豈不修復、於是神威所施敵陣忽亡、可敬信哉、依是茲歳與國久胥謀、新建一宇之廟貌、以抽還願之丹誠、伏希上棟之後、柱礎堅固、梁棟安全、神德增光、一門共熙、武功之弘大、仁政歸厚、三州長致民業之康寧者也、長亨（享）三年己酉、願主薩摩守藤原國久・修理亮藤原忠廉、司役助工權大僧都寶壽坊快扶、

1671

『正文在新納楚弓』

一太刀一腰（御所より下候）　長光

一太刀一腰　山内藤源次かたしのき

一文書箱一

一あへのさたたうの繪一なかれ

一弓一張　大友政親より給候、

一征（「矢カ」）一腰　同

一腹巻一りやう　毛はしそめ同

一甲一はね（『酉』）同毛同

長享三年十二月廿七日

嶋津新納近江守忠續（花押）

新納越前守（忠明）殿（花押）

嶋津新納

『上書』
嶋津新納越前守殿　近江守忠續

「此書、新納越前守忠明譜中ニ在リ」

1672

「忠昌公御譜中」

「正文在之」

犬追物手組　延徳元年十一月廿六日

殿忠昌　廿一疋

嶋津刑部少輔　十疋
嶋津攝津守頼久　十疋
伊地知周防守　七疋
嶋津八郎次郎　四疋
加治木又八郎　五疋
村田太郎次郎　五疋
五代助五郎　四疋
嶋津三郎次郎　五疋
伊地知又七　三疋
蒲生十郎　七疋
嶋津八郎三郎　五疋
嶋津上野介　七疋
吉田治部太輔　七疋

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　「正文ニ無之」

1673

「正文在之」

犬追物手組　延徳元年十一月廿七日

殿忠昌　廿一疋

嶋津上野介　四疋
吉田治部大輔　十一疋
嶋津八郎次郎　五疋
五代助五郎　三疋
加治木又八郎　八疋
蒲生十郎　七疋
嶋津攝津守頼久　六疋

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　「正文ニ無之」

伊地知周防守　九疋
嶋津三郎次郎　二疋
村田太郎次郎　三疋
伊地知又七　三疋
嶋津八郎三郎　六疋
嶋津刑部少輔

1674

「正文在之」

犬追物手組　延徳元年十一月廿八日

殿忠昌　十五疋

嶋津攝津守頼久　七疋
蒲生十郎　七疋
嶋津八郎三郎　六疋
嶋津八郎次郎　六疋
嶋津三郎次郎　八疋
村田太郎次郎　五疋
五代助五郎　五疋
長野新右衛門尉　六疋
加治木又八郎　十一疋
吉田治部太輔　八疋
伊地知周防守　十疋
嶋津刑部少輔　七疋
嶋津上野介　五疋

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　「正文無之」

1675

「忠昌公御譜中」

「正文在之」

犬追物手組　延徳二年正月十八日

殿忠昌　嶋津刑部少輔

嶋津攝津守頼久　蒲生十郎

嶋津八郎三郎　伊地知又七

嶋津三郎次郎　加治木又八郎

吉田治部太輔　桑波田右馬助

嶋津上野介　蒲生刑部少輔

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　「正文ニ無之」

1676

「正文有之」

犬追物手組之事　延徳二年正月三十日

殿忠昌　嶋津攝津守頼久

吉田治部太輔　嶋津掃部助

伊地知周防守　桑波田右馬助

蒲生十郎　平田右馬助

嶋津助六　嶋津八郎三郎

澁谷又五郎　蒲生刑部少輔

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　長野新右衛門尉

1677

「正文在之」

犬追物手組事　延徳二

殿忠昌　廿一疋　嶋津三郎左衛門尉　六疋

嶋津又四郎　五疋　蒲生刑部少輔　九疋

伊地知周防守　七疋　平田又九郎　三疋

税所善左衛門尉　三疋　伊地知又七　五疋

長野新右衛門尉　一疋　和泉孫太郎　二疋

嶋津攝津守頼久　十四疋　嶋津八郎三郎　五疋

嶋津式部太輔　廿一疋　澁谷又五郎　三疋

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　嶋津新左衛門尉

1678

「正文在之」

犬追物手組　延徳二二六日

殿忠昌　十二疋　嶋津攝津守頼久　九疋

伊地知周防介　六疋　嶋津三郎次郎　五疋

平田又九郎　四疋　和泉孫太郎　二疋

税所善左衛門尉　三疋　五代助五郎　四疋
伊地知又七　五疋　村田太郎次郎　四疋
嶋津八郎次郎　四疋　加治木又八郎　六疋
嶋津次郎三郎　十疋　嶋津次郎四郎　九疋
検見　喚次
「正文ニ無之」　「正文ニ無之」

1679

「正文在之」

犬追物手組　延徳二二十三

殿忠昌　廿一疋　嶋津次郎三郎　十疋
嶋津刑部少輔　八疋　伊地知周防守　八疋
嶋津三郎次郎　五疋　平田又九郎　三疋
伊地知又七　四疋　和泉孫太郎　一疋
加治木又八郎　三疋　五代助五郎　三疋
嶋津次郎四郎　十疋　嶋津八郎次郎　一疋
嶋津三郎太郎　九疋　嶋津摂津守頼久　九疋
検見　喚次
嶋津十郎左衛門尉　「正文ニ無之」

1680

「正文在之」

犬追物手組　延徳二二十四

殿忠昌　十八疋　嶋津三郎太郎　十七疋
嶋津八郎次郎　一疋　加治木又八郎　六疋
嶋津三郎次郎　五疋　五代助五郎　三疋
村田太郎次郎　一疋　和泉孫太郎　一疋
税所善左衛門尉　一疋　伊地知又七　九疋
伊地知周防守　九疋　平田又九郎　三疋
嶋津次郎三郎　十一疋　嶋津刑部少輔　十四疋
検見　喚次
嶋津十郎左衛門尉　「正文ニ無之」

1681

「正文在之」

犬追物手組　延徳二年二月廿日

殿忠昌　十三疋　嶋津摂津守頼久　十二疋
蒲生刑部少輔　八疋　嶋津三郎四郎　三疋
加治木又八郎　七疋　伊地知又七　四疋
和泉孫太郎　四疋　五代助五郎　三疋
村田太郎次郎　五疋　平田又九郎　三疋
伊地知周防守　九疋　嶋津三郎太郎　十一疋
嶋津薩摩守　十五疋　「正文ニ無之」

検見　　喚次

嶋津十郎左衛門尉　　嶋津八郎次郎

1682

「正文在之」

犬追物手組　延徳二年二廿一

殿忠昌　十一疋　　嶋津攝津守頼久　十五疋

蒲生刑部少輔　十四疋　　嶋津三郎四郎　五疋

加治木又八郎　三疋　　伊地知又七　十疋

和泉孫太郎　二疋　　五代助五郎　四疋

村田太郎次郎　五疋　　嶋津八郎次郎　二疋

伊地知周防守　八疋　　嶋津三郎太郎　九疋

嶋津薩摩守　八疋　　「正文ニ無之」

検見　　喚次

嶋津十郎左衛門尉　　平田又九郎

1683

『上原氏文書』

於飫肥二度目ノ

犬追物手組　延徳貳年三月廿日

一殿　廿三疋　　三嶋津次郎三郎　四疋

嶋津安藝守　三疋　　嶋津次郎四郎　十一疋

伊地知周坊守(ママ)　九疋　　加治木又八郎　四疋

平田又九郎　四疋　　『ィ三』上原次郎右衛門尉　貳疋

平田右馬助　三疋　　長井初五郎　二疋

嶋津大和守　五疋　　嶋津徳三郎　三疋

嶋津攝津守　十三疋　　四嶋津左衛門尉　五疋

検見　　喚次

餅原駿河守　　平瀬三郎四郎

1684

一島津修理亮忠廉張行於犬追物、吾不遠數十里、而經海陸往以射焉者也、

「忠昌公御譜中也」

1685

「在新納久四郎入道宗心久知」

延徳二年三月廿二日

犬追物手組之事

殿忠昌　十三疋

嶋津刑部少輔　五疋　　嶋津左衛門尉　六疋

伊地知周防介　五疋　　嶋津兵部少輔　五疋

嶋津源次郎　三疋　　平田右馬助　六疋

鹿屋周防介　二疋　　餅原彦九郎　四疋

嶋津二郎四郎　十一疋
嶋津二郎三郎　七疋
嶋津攝津介　七疋
検見
嶋津十郎左衛門尉
於飫肥二度目之手組

嶋津三郎四郎　四疋
嶋津又次郎　三疋
嶋津安藝守　三疋
喚次
羽嶋新三郎

1686

「正文在新納宗心」

犬追物手組之事　延徳二年三月廿三日

殿　十五疋
嶋津安藝守　七疋
伊地知周防介　六疋
五代助五郎　三疋
嶋津源六　七疋
嶋津兵部少輔　四疋
嶋津左衛門尉　八疋
検見
嶋津十郎左衛門尉
於飫肥三度目之手組

嶋津二郎三郎　七疋
嶋津二郎四郎　十二疋
平田又九郎　五疋
柏原助七郎　四疋
嶋津源七　五疋
嶋津藏人進　四疋
嶋津刑部少輔　五疋
喚次
嶋津孫左衛門尉

1687

「在新納宗心」

犬追物手組之事　延徳二年三月廿六日

殿　十八疋
吉田治部少輔　二疋
飫肥又八　三疋
嶋津助七　四疋
嶋津左衛門尉　三疋
嶋津安藝守　八疋
検見
嶋津十郎左衛門尉
於福島手組

嶋津攝津介　九疋
嶋津刑部少輔　九疋
嶋津四郎左衛門尉　八疋
羽島新左衛門尉　五疋
嶋津三郎四郎　四疋
嶋津次郎四郎　九疋
喚次
餅原縫殿助

1688

「在新納宗心」

犬追物手組之事　延徳二年三月卅日

殿　廿三疋
嶋津安藝守　三疋
伊地知周防介　九疋
平田又九郎　四疋
平田右馬助　三疋
嶋津大和守　五疋

嶋津次郎三郎　四疋
嶋津次郎四郎　十一疋
加治木又八郎　四疋
上原次郎右衛門尉　二疋
長井助五郎　二疋
嶋津徳三郎丸　三疋

嶋津攝津介　十三疋　　嶋津左衞門尉　五疋

検見　　喚次

餅原駿河守　　平瀬三郎四郎

於福嶋　延徳二

1689

『加治木鹿屋仁右衞門文書』

犬追物手組之事　延徳二年四月朔日　於福嶋

一殿　十九疋　廿壹疋　　三嶋津大和守　四疋　八疋

五嶋津安藝守　四疋　七疋　　七嶋津次郎三郎　十六疋

九飫肥又八　五疋　　十一平田又九郎　八　三疋

十三梁瀬源五　二疋　　十四牧彦四郎　二　壹疋

十嶋津三郎四郎　二疋　五疋　　十三五代助五郎　四疋　六疋

六伊地知周防守　十五疋　　八鹿屋周防守介　十疋　壹疋

二吉田治部太輔　九　四疋　　四嶋津左衞門尉　十一疋　七疋

検見　　喚次

嶋津十郎左衞門尉　　平瀬三郎四郎

「上書有之」

鹿兒嶋屋形様日州櫛間御光降之時

検見　　喚次

1690

「忠昌公御譜中」

犬追物手組事　延徳二年四月四日　於志布志

殿忠昌　十九疋　　嶋津次郎三郎　七疋

嶋津安藝守　三疋　　吉田治部太輔　七疋

鹿屋周防介　五疋　　五代助五郎　五疋

平田右馬助　十一疋　　加治木又八郎　六疋

嶋津大和守　十二疋　　伊地知周防介　十疋

嶋津四郎　二疋　　嶋津左衞門尉　十一疋

検見　　喚次

嶋津十郎左衞門尉　　限江刑部少輔

1691

「忠昌公御譜中」

「在山田七郎右衞門久通」

犬追物手組事　延徳二年四月六日

殿忠昌　十六疋　　嶋津安藝守　八疋

嶋津左衞門尉　六疋　　嶋津四郎　二疋

鹿屋周防介　一疋　　伊地知周防守　十二疋

飫肥又八　三疋　　賀治木又八郎（ママ）　五疋

五代助五郎　四疋　　嶋津三郎四郎　三疋

吉田治部大輔　五疋　　嶋津次郎四郎　十二疋
嶋津四郎三郎　十疋　　嶋津大和守　八疋
検見　　喚次
嶋津十郎左衛門尉　　嶋津式部少輔

「此手組二通、新納越前守忠明譜中ニ在リ、寫在新納久四郎入道宗心トアリ」

1692

「新納越前守忠明譜中」
「寫在新納久四郎入道宗心」

犬追物手組之事　延徳二年四月十八日

殿忠昌　八疋　　嶋津四郎　一疋
嶋津大和守　七疋　　肝付三郎四郎　一疋
嶋津新四郎　一疋　　嶋津三郎四郎　二疋
嶋津次郎四郎　七疋　　飫肥又八　七疋
加治木又八郎　三疋　　五代助五郎　五疋
嶋津左衛門尉　七疋　　嶋津安藝守　四疋
嶋津次郎三郎　二疋　　吉田治部少輔　二疋
検見　　喚次
嶋津十郎左衛門尉　　限江刑部太輔

於志布志ニ　延徳二

1693

「豊州家二代忠廉譜中」

延徳二年庚戌八月廿日、於攝州天王寺卒也、法號雲溪忠好、

1694

『入來院氏文書』

譲与

所　子息又五郎重聰

薩摩國入來院内村在家田畠至山野、一所も不殘譲与所也、先々ハ京都直依有公促(役)、親類中ニモ依其忠、爲私領有閣(格)護之所、當代ハ守護促(役)、院内之田數不殘かゝり候上ハ、前々私領も不可入、各給分可同、然者雖子多之有、又者親類内之者、雖有条々忠節、爲私領不可有遣事、若背此旨、雖有譲者、任彼證文、惣領可知行、

一所薩摩郡之内永利名山田村
一所同草原名
一所同田崎村
一所同天辰村
一所羽嶋村
一所大隅蒲生之内　平松村
一所同餅田之内　森山之門　前原門

右、各地頭職田畠一所も不殘譲与所也、
并任先例、
一所筑前國柏原水田屋敷
一所筑後國永淵屋敷、同國みな木屋敷
一所甲斐國西嶋内葦入在家田畠
一美作國河(所脱カ)(会)庄内下森上山大足
一所相模國澁谷曽司郷ふちこゝろの屋敷立野等之事
右、於所領等者、重豊重代相傳之所也、仍重聰仁相副
次第調渡手継證文等、限永代所譲与也、於御公事者、
任先例、可致支配者也、次、重豊以後所領之事、雖有
數輩兄弟、守其器用、惣領一人ニ一所ヲモ不殘可譲与
也、若背此之旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重
豊子孫云云、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分譲、
任此狀之旨、爲惣領一人計、押而可知行者也、且爲後
證所書載置文之趣也、仍譲狀如件、
【延徳二年也】永傳元年八月廿一日　【入来院氏十代家審也】下野守重豊(花押)

1695

『入来院氏文書』

一上原西之門
一みな原之門
一上調田西薗之門
一倉野田中之門
一中村下坂本之門
一くすもと上江河之門
一山田諏訪薗門夫足ハカリ、年貢ハ神物ニ仕候、
一草原田中門
一田崎うへの薗門
一天辰東門

御自作

二反廿　【延徳二年也】永傳元年カノヘ(イヌ)之年ノイ子カス
みなを田つふき　中間十郎二郎与次郎百貳十参は也、
五反　くら野つゝミ田
五反　倉野ゝつる
一反廿卩　倉野さこ田
四反廿　中村山本
四反　中村かわら田
四反十　同まへ田
二反　くすもとのつく田
三反卅　くすもとの三反田
卅　同一せまち

一反廿口　同くわはた
一反廿　同てらさこ
二反　上副田原田
一反　同桑の木丸
六反　山田鳥越
一町二反　同ちか田
四反　同みたら井
三反廿　同山した
五反　同ときてん
一反　同うちわさ田
一町一反「三町一反廿」　天辰こなてしま
「本ノマヽ」

畠地自作分

五反　中村いけつる
廿　同山本のうち
廿　同なかれより
卅　倉野山下
二反　同又山下
一反廿　同宮のわき
五反　同大その

二反卅　同あせち
廿　同田のうへ
一反　同つる
一反　同田しま
一ヶ所　同こきたの屋敷
一ヶ所　下久住（もとハ上屋殿被持候也）
四反　中村上つる
三反十　同ふなかハら
卅　くすもと堂のまへ
一反卅　同くほその
二反　天辰みたちその
茶薗　たうの原しまゑん
茶薗　くめかた
大茶薗　くら野

屋敷者

三郎右衛門（くら野ゝ）　田一反口一ヶ所一反卅
同八郎次郎　田二反卅一ヶ所畠地一反卅
同太郎四郎　田一反卅一ヶ所畠地三反廿
同九郎太郎　田一反十一ヶ所畠地一反

同助九郎　田一反卩一ケ所畠地一反卅
同勢三郎　田二反卅一ケ所畠地卅
くすの本助四郎　田三反廿卩一ケ所畠地二反十
同助六　田一反廿一ケ所畠地二反卅
同四郎五郎　一ケ所畠地二反
同三郎四郎　一ケ所畠地一反十
同孫平次　一ケ所ハカリ
副田孫太郎　田一反卅一ケ所畠地廿
同五郎四郎　田卅卩一ケ所畠地卅
同六郎四郎　田一反卅一ケ所畠地一反
同平五郎　田一反一ケ所
同二郎右衛門　一ケ所茶園畠二反
山田作子彦九郎　田二反一ケ所畠地六反
同彦三郎　一ケ所畠地五反
同彦五郎　一ケ所畠地二反

畠地自作分副田

一反　同原口
二反　同森木の本
一反　同つふき田のうへ

廿　同井なりの前
茶園　上副田之分如何之、

『入來院彈正少弼重豊入道以心之傳ニ入、重豊ハ文龜元年辛酉閏六月二日卒』

1696

「山田河内守譜中　初式部少輔」
「正文在山田七郎右衛門久通」

犬追物手組事

參河守殿　二疋　子〻法師殿　七疋
黒法師殿　四疋　與次郎殿　九疋
兵庫助殿　七疋　竹井宗左衛門尉　一疋
刑部少輔殿　四疋　竹井才次郎　四疋
式部少輔殿　十疋　中河宮法師　二疋
検見　喚次
幸阿弥

延徳貳年九月十八日

1697

「友久一流譜中」

友久・同忠幸同心、田布施諏方大明神之造立新宇矣、其棟札記左、

封

聖主天中天　大檀那　大梵天王　右奉爲金輪聖皇天長地久紹隆佛法化度衆生

當住持

迦陵頻伽聲

遷宮師

△

奉造立諏防（マヽ）上下大明神宮兩社

權律師秀範　國土豊饒諸人快樂故也　仍造立志趣如件　延徳貳年庚戌

哀愍衆生者

封

我等令敬礼　大願主　帝釋天王　殊者信心大檀主并結縁諸衆御息災安全子孫繁昌

号慶覺房

律師継範　當代官坂本彦左衞門尉正治

小工十人

大工武本氏定

十二月廿四日

鍛冶次郎太郎

當地頭伊地知次郎左衞門尉重頼

大檀主　嶋津相模守友久

嶋津三郎左衞門忠幸

封

法

水　災

意

金

佛

蓮

風

火

災

災

應

報

身

口

筆者圓房　庚戌ヨリ乙丑マテ七六年

三年辛亥春二月二十日、　公講犬追物、（據圓室公舊譜、）三月、講犬追物凡三日、（同上、）

明應元年壬子、（是年七月改元明應、自六月以前猶是延德四年、）秋七月十九日改元、（據和事始、）

二年癸丑夏四月、細川政元廢足利義材、立義澄（初名義遐、又改義高、）爲主、（據將軍家譜、）

三年甲寅秋九月二十九日、島津豊後守忠朝（次郎三郎忠賴更名忠朝、稱豊後守、）與志布志領主新納近江守忠武合戰、（據圓室公舊譜、）忠武、忠續弟忠明之子也、忠續無男、以忠明爲嗣、而忠武嗣父職領志布志、（據島津支流系圖、）冬十二月二十七日、足利義澄任征夷大將軍、（據將軍家譜、）

四年乙卯春閏二月、　公賜蒲生刑部太輔（十郎三郎改稱刑部太輔、）宣清蒲生、其舊邑也、（據蒲生兵衛系圖、十郎、）夏四月十五日、　公使島津忠朝攻串良城、忠朝襲而取之、以賜忠朝、忠朝使其叔父平山越後守忠康守之、忠康、忠廉之弟、嘗居帖佐平山城、因以爲氏、（據圓室公舊譜、島津内膳家譜、串良城遺墟在串良郷岡崎村、今稱鶴亀城、地頭館在其中、按是時執政平田兼宗領串良城、而公使忠朝取之、豈其有罪乎、抑亦有他故乎、）十七日、　公使吉田孝清領谷山山田村三十町及道祖脇五瀬、（據圓室公舊譜、吉田納右衛門系圖、）六月二十一日、公賜樺山長久日向島津莊郡本四十町・山田三十町・薄壇五町、以賞有功、（據島津支流系圖、郡村高辻帳、莊内中郷有郡本村、都城今有山田村、即郡村高辻帳、上中原村・梶原村之地、）二十九日、加治木大和守久平叛、引兵取帖佐城、秋七月朔日、　公將兵攻之、久平逃歸、日置美作守等攻加治木城、燒夷村落、（據圓室公舊譜、七月三日與肝付次郎左衛門尉書、帖佐郷餅田村有古城墟、今稱瓜生山建員、在地頭館西南十八町許、）久平、忠敏之子也、（據伊集院人加治木新四郎系圖、）五日、公殺執政村田經安、與肝付二郎左衛門尉書曰、村田肥前守無禮於我、故殺之、（據圓室公舊譜、舊譜無年、村田五郎左衛門系圖、經安違圓室公命、明應四年七月五日為公所殺、今從之、肝付典膳系圖、越前守兼光子、兼固、始稱次郎左衛門尉、此云肝付二郎左衛門尉、豈此人歟、兼光見下、）故幕府義材、在越中、是歲使一色兵部大夫於我、　公見上使於曾於郡、（同上、續本朝通鑑、明應二年、細川政元拘幽將軍義材於物部氏、義材竊逃之越中、依畠山修理大夫義元、七年、義材引越中・能登・加賀等兵、至叡山坂本、將攻京師、由是觀之、此年使一色兵部大夫於我者、豈來乞師歟、）是歲邊川筑前守忠直爲帖佐地頭、忠直者川上氏之庶子也、（據島津支流系圖、島津上野守家□第三子曰因幡守忠村、忠直、忠村之孫、此年徙帖佐邊川村、因以為氏、守忠村子孫復為川上氏、家□見第七巻至德二年注、）

「山田河内守忠豊（後安芸守、譜中初式部少輔、）」

「正文在山田七郎右衛門久通」

犬追物手組事

參河守殿　七疋　　子ゝ法師殿　廿一疋

式部少輔殿　九疋　　与次郎殿　五疋

黒法師殿　十疋　　四郎次郎殿　八疋

刑部少輔殿　十疋　兵庫助殿　七疋
七郎殿　十四疋　竹井宗左衛門尉　七疋
検見　喚次
幸阿弥

延徳三年正月廿一日

1700

「神社佛閣調」
「鶴田大願寺文書」

薩摩國大願寺住持職事、任先例、可執務之状如件、
延徳參年二月廿二日　（義材）（花押）
利珪首座

1701

「忠昌公御譜中」
「寫在田中後藤兵衛入道龍淵」

犬追物手組事　延徳三年二月廿日

殿忠昌　十七疋　嶋津上野介　四疋
嶋津助六　二疋　嶋津八郎三郎　五疋
桑波田右馬助　六疋　飫肥又八　五疋
嶋津八郎左衛門尉　三疋　加治木又八郎　十疋
嶋津掃部助　三疋　伊地知又七　十四疋
嶋津攝津守　十七疋　嶋津又太郎　三疋
検見　喚次
嶋津拾郎左衛門尉　野田源五郎

1702

犬追物手組之事　延徳三年三月二日

殿忠昌　十四疋　嶋津左衛門尉　九疋
嶋津上野守　五疋　澁谷左衛門次郎　四疋
嶋津三郎四郎　三疋　平田又九郎　五疋
加治木又四郎　十一疋　村田太郎次郎　三疋
伊地知又七　三疋　和泉孫太郎　五疋
嶋津攝津守　十四疋　嶋津四郎左衛門尉　二疋
嶋津次郎三郎　十疋　澁谷又五郎　四疋
検見　喚次
嶋津十郎左衛門尉　五代助五郎

1703

「正文在之」

犬追物手組事　延徳三年三月三日

嶋津次郎三郎　七疋　嶋津攝津守頼久　十一疋
嶋津左衛門佐　十疋　村田左衛門尉　五疋
伊地知又七　九疋　飫肥又八　四疋

和泉孫太郎　八疋　　五代助五郎　六疋
澁谷又五郎　六疋　　加治木又八郎　十八疋
嶋津上野守　二疋　　嶋津安藝守　四疋

検見　　喚次

嶋津陸奥守殿忠昌　　嶋津八郎左衛門尉
「上カキ」こうこくしとの

1704

「寫在田中後藤兵衛入道龍淵」

於鹿兒嶋

犬追物手組之事　延徳三年三月十一日

嶋津攝津守　十四疋　　嶋津左衛門尉　六疋
嶋津彦三郎　五疋　　嶋津八郎三郎　四疋
伊地知又七　三疋　　五代助五郎　八疋
村田太郎次郎　三疋　　加治木又八郎　九疋
和泉孫太郎　十疋　　嶋津八郎左衛門尉　一疋
蒲生十郎　十疋　　嶋津三郎四郎　七疋
嶋津次郎三郎　四疋　　嶋津安藝守　七疋

検見　　喚次

興国寺殿嶋津陸奥守殿　　平田又九郎

1705

『福昌寺文書』

恕翁御判六通

一山之置文　一通
一寺山禁制条々　一通
一於福昌寺定条々　一通
一造營用木之置文　一通
一禁制「本まゝ」　一通
一仕鷹殺生条々　一通
一貯之置文　一通
一福昌寺侍者御申狀　一通
以上七通「本のまゝ」
一式部常陸寄進狀　一通
此外鍋倉狀　一通
福崎北原狀　一通
一久豊續目判　一通
一旦過寄進狀　三通
總以上十五通

延徳三年七夕日　　當住守琮誌之

1706

謹白　起請文事

右、當流弓矢之御弟子ニ罷成候上者、給置候ハんする御日記以下、家を相續候へき子一人之外ハ、相傳之儀有へからす候、其外細ゝ之御口傳等御免候ハてハ、かりそめニも口外仕事有へからす候、惣別親子之儀たるへく候之間、聊疎略緩怠之儀あるましく候、若此条ゝ僞申候者、日本國中大小神祇、殊者伊勢大神宮　八幡大菩薩　諏訪上下大明神、各可罷蒙御罸候、仍起請文如件、

延徳三年十二月廿五日　　椛山安藝守

長久（花押）

1707 「在阿久根郷」

奉上棟高津宮大明神宮御寶殿一宇、專祈大檀越國久宮安泰壽綿延、子孫繁榮而已（マヽ）、先願海晏河清、万民和合樂、次冀當代官齋藤實元福壽海元量子孫繁昌、吉祥如意、

延徳四年壬子正月廿八日　　願主敬白

大工　大中次郎左衞門家國

同小工十人

1708 「眞本在勅定院」

船頭町木

延徳四年二月十日　　忠昌（花押）（朱印）

1709 『感應寺文書　光明院買地狀』

依爲有殁後之用段、光明院之中一斗五舛地、四貫文買取候事実也、以後於于彼在處、不可有違乱候、四壁之竹木等買取内也、

于時延徳四年壬子彼岸吉日

『感応寺十世ノ住持、自寛正六至明応八住山三十五年云ゝ』

徹堂判

1710 『入來院氏文書』

たきのうちのしさく六反卅にて候を、なかむらにいまたてかへ候ふん、

四反下もちさこ　二反卅かハち田

以上六反卅

みや田のかとに、むかいなかむらのかとかへ候、

一ねんくおなし　くうしおなし

一なしもの（みや田）　壹貫五百文　五百文ハたいくわんふん

一なしもの（むかいなかむら）　壹貫百五十　「本ノマヽ」百五十文ハたいくハんふんか

一かとをなし（らカ）　一きぬくたおなし
一わたおなし　一かとみのおなし（らカ）
又みや田よりはあかり候、なかむらよりハあけす
候もの、
一いも壹斗五舛　一かとあい（ウカ）一斗
一からを百五十め　一むきのねんく五斗
此ふんにうきめんのはたけあひそへ候ふん、
一一反　いけつる
又みや田よりあけ候もの
一あまつらのしろ百文
一あかねのしろ五十文
一ゑりこのまゆ三舛　錢なれハ六百文
一ないけんのふん五百文　このふん、むかいなかむらニハなく候ほとに、二百文そへ候田の事、
二反　まへ田
又あたらめて、たきのうちへまいらせ候分、
二反十　まへ田　二反　いけつる
しさくものゝしろ以上に
二反
水田壹町卌
畠地四反
延徳四年三月一日　『入来院弾正少弼重聡』重とし（花押）
みつのえね

1711
蹴鞠道之事、爲御門弟上者、奉成親昵之思、於心中不可有疎略之儀候、
一請御口傳之条々無御免之間、雖爲一言一事、口外々見之儀不可有之候、万一僞申者、可有　日本國大小神祇祖神兩神之照覧候也、仍請文如件、
延徳四年三月　日　——
今村左京亮殿

1712
村田肥前守經房——
—肥前守經安
—女子
太守立久公簾中
明應元年壬子五月十三日卒、道號椿庭性壽宣徳院、

1713
『上原氏藏書』
就肝付之時儀、前日上原藤左衞門尉、重而伊地知周防守進候、定而委細可申候哉、爰本之時宜爲可申、相良方江遣狀候、周防守旨趣申候通、自其細碎可被仰候、兩度申候間不能重言候、恐々謹言、

「延徳四年」十一月十三日　　忠昌（花押）

「朱ニテ」「右、上原休兵衛家ニアリ、是ハ菱刈孫兵衛家文書ナラン、上原氏ヘ請求シテ書寫置也」

1714

就肝付之事進使者候之處、丁寧之御心底之通申候、喜悦候、重而以伊地知周防守爰本之時宜、相良方間之事申候、可有傳達候、故実憑入候、軈而可有出陣之由承候、期面謁候、恐々謹言、

十一月廿日　　忠昌（花押）

菱刈殿

1715

「日新公御譜中」

一明應元年壬子九月廿三日誕生、母新納駿河守是久女也、忠幸無實子之可續家統、故爲猶子連續當家、實伊作又四郎善久子也、

1716

「仝」「日新記ニ有之」

一實父善久患男子之未産、喟然歎曰、我父河内守久逸天性強剛、而殺伐多仁愛鮮、好絶生物之命、其悪業報今歸于予之身、如何可乎、不如積陰徳於冥々之中、以爲子孫繁茂之計、或禱爾于上下神祇、或塗有餓莩則發倉廩、以與之、而況於飢饉之時乎、且復爲捨身之重行者、不可勝言、其中有難比類者、詣于田布施之靈社金峯山之寶前、謹祈誓敬啓白、毎月丑時從伊作宜山上、敢無怠慢、比及三年、祈願成就之夜神拜既畢、而退出之山中、白衣裝束之祝子六人忽來圍遶前後相告曰、汝當産文武達道之男子、言畢忽焉化去不知其所、實是所得神託敢謂非所疑、欣々然歸入私宅、翌夜妻室有靈夢曰、俯仰於金峯山、漸漸近前、則變白飯入懐中、睡夢即覺、無幾程有懐孕、月往日來、而産男子、即忠良也、擇吉日良辰、稱字於菊三郎丸矣、

1717

「日新公御譜中」

一嚴親善久不計爲僮僕忽所弑、實二十有七歳也、是以二姉與菊三郎丸共三子爲孤、唯爲寡母見撫育、而經春秋而已、爰亡父從弟忠幸、請娶母堂於室中者、非一朝一夕之故、雖然守貞女之志宛如鐵石、且歎息引古今例吟古歌曰、

憂フシニ沈ミモヤラテ川竹ノ世ニタメシナキ名ヲヤ流ント云テ

敢不承諾、然而忠幸強請敢不止、深思厚誓曰、吾未有實子之可續當家者、庶幾欲應予之求、然則汝之所育欲兒童爲猶子、以當自佗兩家之爲棟梁、如此、則可不亦盛乎、素愛子之情高於岱山、深於蒼海、故不顧自身是非、偏恃愛子富貴、堅後來約、而漸改金石之心、再嫁于忠幸矣、其後産兩女姉妹盛〻焉、忠幸不變兼約、兩家之地伊作・田布施・阿多・高橋共四ヶ所無寸土之所漏、所以忠良之爲領地也、不亦説乎、

1718

「日新記有之」

一菊三郎丸漸成長異于衆人、其容貌美麗、四體長大眼晴掛明鏡、鬚鬚散樓葉、温而厲、威而不猛、嗜修己治人之道、以継養父之官途、任三郎左衞門尉、娶島津薩摩守重久女、而産三男四女男女二人他腹、者也、

1719

「忠良公御譜中」

「此書在伊作西福寺」

日新様以來御當家繁榮之事付伊作道場事

抑梅窓様と申は、新納殿之息女日新様御袋たり、其始ハ越山之御簾中ト而、儲君始に日新様を生給ひ候、越山と申ハ伊作殿にて、只一城之御主たり、日新は其御子にてましませハ、御成長之時にも伊作一所之御主たるへきを、爰に越山は若主人にて御早世之儀にて、梅窓ハ後家ニ御成、伊作之内城ニ日新ヲ嬰兒にて御格護なされ、御住宅候、然所ニ田布施之一瓢様より御縁弁之儀ヲ被仰候て、數ヶ度御使者候へ共、梅窓様無御承引候處ニ、遮而御理之意趣御使者候へハ、梅窓様之仰ニ、さらは某一身ニハさのミ由なく候、願ハ此嬰兒ヲ一瓢様之被成御猶子候て、向後ニハ御世を被相讓候ハヽ、其一儀御意ニ任せんと、御返事にて候、時ニ一瓢様御納得にて、御祝儀御企之時、又梅窓様之仰ニ、一瓢之御奉行衆諸役人中之存分いかゝ、無別儀此嬰兒ヲ御主人とかしつき可仰哉否と被召問候時、上中下一統ニ無吳儀、同心堅固之僉儀にて、既誓文狀ヲ梅窓ハ御取なされて、田布施へ御越候、如此御契約無相違、一瓢之御遺跡ト而、阿多・田布施・高橋此三ヶ処ヲ伊作ニ合テ四ヶ所之主と日新成給事、御袋梅窓之善巧たり、此御報恩として西福寺ヲ建立なされ候、既ニ相州様本堂客殿之葺萱ヲ、御自身運給ひしと申傳候也、又相州様御弓箭伊作ヨリ始まり候事ハ、勝久屋形ヨリ虎壽様ヲ御猶子ト被成候てヨリ、伊作ヲ勝久様之御隠居所と

て、相州へ御乞なされて、鹿兒嶋より伊作の往來常恒なる中ニ、御猶子之事相違變改して、虎壽様鹿兒嶋ヲ捨て、田布施へ御退之時節ゟ事起り候、是も強相州之御分別不遮候へ共、梅窓様之餘命まし〳〵て仰を被給候ハ、守護之御猶子たる事ハ、異變しッ、世聞實儀ヲ失上ニ、伊作ヲ敵ニ任せ置事ほいなし、諸臣下衆いかゝ〳〵と稠敷被仰ゟ尤之御意趣とて、御弓箭始まりしゟ于今、御武運長強ニ御繁昌也、

高祖忠久以來六代齡岳様迄は、道場方御菩提所たり、此六代之内之何れより欤、新納殿本連枝たり、其御息女くしま一所ニ御持之内ニ御誕生候て、長給ひて伊作へ御越候ニ付、くしまの昌福寺ヲ例にて伊作ニ道場ヲ建、御菩提所と被成候と承傳也、

1720

『入來院重聰譜中』

明應二年癸丑十二月晦日

前將軍義材公防州山口に下りて、大内介義興を賴給ふ、義興嚴命に應し、近國の軍兵を催す、時に君し『重聰』バ〳〵義興の使札を得るといへとも、頃年當國の爭亂によりて、彼催促に應することあたわず、

1721

「伊作家譜中」

伊作九代
善久

初忠眞　又四郎

應仁二年戊子誕生、

死生存亡雖曰有命、忽然有不意之會災矣、維時明應三年甲寅四月十八日、爲奴僕所弑也、享年二十七、

法號越山超公大禪定門多寶寺殿、

女子

吉田次郎四郎位清室

女子

島津下野守昌久室

忠良

菊三郎丸

島津三郎左衞門尉忠幸依無世子、爲猶子、

1722

『入來院氏文書』

雖未申承候、以事次企一行候、仍爲續『相良』事、年來別而當家申通候之處、無御等閑之由承及候、尤祝着候、弥御一味無餘儀候者、可爲本意候、爲路次態不及巨細候、恐〻謹

言、

（明応九年カ）三月十三日　『大内従三位左京太夫』義興（花押）

入木院（重聡）殿

『包紙』入木院殿　義興

1723

『入來院氏文書』

求麻之儀、無御等閑之由承及候、彼方之事、別而申通候之間、弥無二被仰合候者、可爲喜悦候、於巳後、猶一味可申談候、遠路之事候之間、令省略候、何様連〻可申承候、恐〻謹言、

（明応九年カ）九月三日　義興（花押）

入木院殿

『包紙』『加賀守重聡』入木院殿

『大内左京太夫』義興『周防長門等七州ノ守護』

1724

『入來院氏文書』

先日進狀候処、御懇承候通祝着候、於巳後者、弥連〻可申通候、抑　公方様、舊冬十二月晦日至當國、被移御座候、面目之至候、任　上意、爲天下可然之様、可抽勲功之心中候、御忠節尤可爲此時候、爲續無御等閑之由候、祝着候、毎事可申談候之条、併期後信候、恐〻謹言、

正月十一日　『大内左京太夫』義興（花押）

入來院（重聡）加賀守殿

『包紙』入來院加賀守殿　義興

1725

『入來院氏文書』

其以後者、路次不輙候て不申通候、心外候、今度八代所〻捨候事、御心底恥入存候、但古今弓矢習候欤、今者隠居分候之間、諸事不存候、過半當國無爲之様共申合候而候、彼客僧薩摩一見之由、被申候間、好便之条一筆令啓候、當時三ヶ國何事共候哉、吴不審之時者、可承候、恐〻謹言、

七月十八日　『相良』爲續（花押）

『加賀守重聡』入來院殿　進之候

相良　爲續

『包紙』入來院殿　進之候

1726

明應三年甲寅

六月十二日、新納刑部少輔忠親伊東尹祐と志和地の野頸に戰て死之、

1727

「忠昌公譜中」

一明應三年甲寅九月廿九日、福島與志布志爲水火之隔、
已及合戰者也、

1728

「仝」

一此年六月十二日、新納刑部少輔忠親戰死於志和地野久
尾、

1729

「正文在村田太右衞門尉」

是より可申付時儀共、連々申越されへく候、
其境之時儀、被申越候之条得其心候、并伊東書狀披見候、
実候ハヽ、三俣・飫肥之用心可入存候、今程之事候之間、
敵方之計略も可有覺候、仍桂樹院攝津守方くしまへ通候
由、可然候、尋常之儀にてハ難被聞分候、彼方之返事を
被聞合候て、以後爰元相定候て可然候、桂も其分被仰候
つる、隨而廣濟寺之事者、可依一左右候、先々しつまり
候様、故実第一候、又爲國へ進狀候、可有心得候、恐々
謹言、

「旧譜載文明十六年恐非」
十月十五日　　忠昌（花押）
（益安）
村田殿

1730

閑暇吟　自明應三到四
軍記

明應三年甲寅、自上陽始日薩隅州大乱之根源者、嶋津忠
昌公任雅意、凶悪過法、失苦言、用甘語、國之面々代々
被到忠勤功無其甲斐、剰引卒西國之軍衆、而推寄肝付高
山城、其勢如雲如霞云々、而肝付兼久雖爲小臣若冠身云
々、一家郎從云々、晝夜用心云々、祢寢茂清召具一千餘騎、
如高山馳來拵要街云々、伊東方代々同心云々、稻津因幡守
引卒処々軍衆、押寄庄内云々、斯刻新納忠武・北郷數久
・澁谷重度・祢寢茂清・肝付兼久・北原兼藏相共議曰云
々、一同ニ可敵守護也、然依爲兼藏与兼久一姓、且与力、
且贔屓、卒院内之軍兵、發向横川山大道、先以如栗野引
黜、即新納忠武・北郷數久、推寄梅北之城、神社佛寺僧
房民屋不殘一宇燒拂、少休汗馬甘氣、然間爲伊東越前守
大將、被責志和知城云々、欲決雌雄処、北原兼藏後ニ懸
寄云、及日既ニ晩云々、如山田引却、爰救嶋津播磨守、
爲見諸軍勢莖（ハタラキ）、新納越後守・橋口召具軍兵、如志和知馳
來、兼藏院郎（山ノ口）從五百餘人馳向、彼衆、終討取越後守・宮
丸・福永其外究竟侍數十人、或如山田、或如高原引退云
々、志和地譜云、島津播磨守忠常雖領志和地、北原氏卒大軍攻之、防
戰力盡、遂下城退森田、參向鹿児島仕勝久公、后如庄内仕忠相、法名圓
也継嗣、

茲に肝付中務丞兼清爲避麝暑、戯城下之流水云々、懸処男一人出來云、此城者野々見谷ト申候欤、志和知之城ト申候欤、有者答云、是者桧山城也、男嬉而文箱取出、自嶋津殿旁々被遣候音書數通在此函、肝付中務丞、是者不輙御事也、正八幡大菩薩　霧嶋六所大權現之御計也、開函見數通書狀、紙面条々中々無申限候云々、

同仲秋之比、祁答院重度進官軍、押寄蒲生城討取十有餘人、在々處々燒拂云々、

同乙卯歳條幸上旬之比、新納忠武責落藻引城、同中旬三五日、於夏井城而召具嶋津豊後守飫肥南郷・櫛間之諸勢被向彼城、隈井伊勢守康成運智略、如所存豊州膝下之一人當千之兵、端間周防守・矢那瀬・竹下其外究竟之侍三十餘人討取、其餘手負死人敗北逃走擧不足數、康成軍衆云々、此刻押寄梅北之城一車車者、不可有落居幾程候云々、被致京城・山田・眞幸ニ注進、北郷金吾・北原戸部相共ニ召具處々甲士、如梅北之可馳向由云々、

茲于從伊東爲使者、佐土原金吾・野村越州謁如山田、北原兼藏對面之時、先相話云、近日可被攻梅北之城也、越後守答曰、近比境節爲使官到越山事、於一身滿足此事也、薩隅軍兵打合、欲見合戰謀略、他年念願在此時、一方攻口之事承、打破責入不可有餘儀候、兼藏喜悦之餘、不移時尅如末吉被打出也、伊東使者向士卒云々、決勝負戰場、欲揚名於後代計也、新納忠武・北郷數久相共被寄梅北之城打向云々、責上、爰嶋津出羽守出使者云、今者此一城不可叶存、不可有甲斐候、可降參也、野村越後守進出云々、一日裏攻落城云々、奇勲也、嶋津出羽守家子郎從悉敗北逃走云々、

爰山東之官軍未咸越山旨、御方中不審云々、引卒山東之猛勢、鬼山・篠原・紙屋口自方々同時打出、押寄和田・高木之城、追落不可有疑云々、如件、

閑暇之餘、号鐘以忘夏日長、傍人莫罪之、

廼日本明應四白乙卯林鐘之日　　安樂之二甘子

1731

「事載軍記」

明應三年甲寅上陽、　忠昌公將兵伐肝付兼久於高山城、兼久聞之預爲備焉、禰寢茂清率兵千餘來援城兵、伊東祐□乃遣稻津因幡守、會新納忠武・北郷數久・澁谷重度・禰寢茂清・肝付兼久・北原兼藏於莊内、同謀寇公、兼藏家故與兼久同其祖、故將部兵、此年夏先入横川、退陣栗

野、是時新納忠武・北郷數久合師、進伐島津出羽守忠明於梅北城、燒夷城下、神社佛寺悉蕩燼焉、於是伊東越前守乃帥兵、伐島津播磨守忠常於志和池城、時北原兼藏進兵陣于山田、爲之聲援、高城城主新納越後守忠□及橋口某等、帥兵來援忠常、兼藏遂進兵五百、擊殺越後守及宮丸某・福永某等數十人、引兵退于山田或高原、肝付中務丞兼清乃避暑浴水於城下、時公所遣使者往問城名、兼清部下詐答曰樺山城、使者乘欺授以飛檄、兼清等歡、秋八月、澁谷重度伐蒲生氏於蒲生城、斬十餘人、燒夷民舍、四年乙卯條幸上旬、新納忠武攻陷百引城、十五日、島津豊後守忠朝帥飫肥南郷・櫛間兵、攻隈江伊勢康成於夏井城、康成發兵防戰却之、斬羽島周防守友康・築瀨某・竹下某等三十餘人、遂進攻梅北城、乞援於都城・山田・眞幸、於是北郷金吾・北原戸部將兵來于梅北援隈江氏、時伊東尹祐遣佐土原金吾及野村越後守、會兼藏於山田、謀攻梅北、俱入末吉、於是新納忠武・北郷數久亦合師進攻梅北城、城主島津出羽守忠明委城敗走、是時伊東尹祐乃將兵、從鬼山・篠原・紙屋口入、攻和田・高木於其居城、

右、自明應三年至四年軍記、題閑暇吟、四年六月、安樂二甘子所記之抜要、匆卒如右、便乎與他書考證耳、

丙辰五月十八日漫艸

1732 一明應四年乙卯、自越中國將軍、爲上使一色兵部太夫下、忠昌於隅州曽於郡遂對面給、

1733 「正文在肝付伴兵衛兼屋」

横河へ敵出張候之處、早〻依被馳向候、得勝利候之通注進候、毎度之儀神妙之至候、於弥彼堺之事、憑入候之外無他候、恐〻謹言、

三月十三日　忠昌（花押）

肝付「兼固也」次郎左衛門尉殿

1734 「忠昌公譜中」

一明應四年乙卯四月十五日、豊後守忠朝修理亮忠廉一男、取串良、於陣尾有合戰矣、

1735 「忠昌公御譜中」

「正文在吉田次郎兵衛為清」

薩摩國谷山院之内山田之村三拾町・同院道祖脇之内五瀨之事

爲忠節之賞所宛行也、早任先例、可被知行之狀如件、

明應四年四月十七日　　忠昌(花押)

(孝清)
吉田殿

1736

「正文在椛山源三郎久清」

日向國嶋津庄郡本四拾町・同山田三拾町・同薄壇五町

合七拾五町

爲忠節之賞宛行所也、早任先例、可有知行之狀如件、

明應四年六月廿一日　　忠昌(花押)

(長久)
樺山安藝守殿

「上包」
樺山安藝守殿　　忠昌

「此書、樺山氏六代長久譜中ニ在リ」

1737

「忠昌公譜中」

一明應四年乙卯六月廿九日、加治木大和守反、掠取於帖佐城、七月朔日引退、翌日責加治木城、

1738

「正文在肝付伴兵衛兼屋」「此御書御譜中ニ無シ」

今朝辰刻帖佐城へ從加治木切乘候之由聞候、無是非次第候、然者此番手仕可入候、社家之衆中本田・日置美作守被相談、一途了簡憑入候之外無他、恐々謹言、

「明応四年」
六月廿九日　　忠昌(花押)

(兼固)
肝付次郎左衛門尉殿

「上封」
肝付次郎左衛門尉殿　　忠昌

1739

「仝」

就當城之時宜、別而用狀候、就其一昨日朔當所取向候旱、合戰候て敵七人討執候、仍敵退散本望候、然處宮内衆日置美作守至加治木、同日遣勢候、町村里燒拂候て合戰候、得勝利敵數輩討執候、翌日從此方又加治木へ勢遣候、本安國寺破候て、城之坂口迄責入候、是も太刀打候、得敵數輩討候、物深所之間頸三執候、身方も三四人討死候、爰本如此破候旱、殊近所之事候、丁寧之由承候、喜悦無申計候、於弥憑入候、委細者美作守へ申候、可被申候、恐々謹言、

「明応四年加治木氏攻帖佐時也」
七月三日　　忠昌御判

(兼固)
肝付次郎左衛門尉殿

1740

「喜入氏忠弘譜中」

明應四年乙卯六月、加治木大和守久平以邑叛、二十九日、

帥兵襲帖佐城、乃「円室公」公命肝屬兼固・宮内社徒本田某・日置美作守等拒之、七月朔日、美作等拒戰却之、斬敵七人、久平乃還、美作等追至加治木、斬敵數級、燒夷村舍市店、二日、　公亦別遣兵、破至城門獲首三級、　公兵亦三四人死之、時忠弘於　公爲叔父、故及　公謀議、使市成城主山田河内守忠豊等各戍坂上、以兵備之、由是忠昌得保諸郡、十九日、　公賜忠豊書、

1741

「正文在山田氏」

今度之弓箭、從最前被成御志候、依其寄郡從坂上于今相拘候、忠節之至無比類候、於子〻孫〻不可有忘却候、弥憑入候、此度之弓箭執抜候者、可致其礼候、委細者若狭「忠弘」守方可被申候、恐〻謹言、

七月十九日　　忠昌（花押）

山田河内守「忠豊」殿

1742

「忠昌公御譜中」

「正文在宮内澤永賢」

大隅國帖佐郷中餅田町五、雖爲　正八幡宮之永代御供田、頃日據爲相論中絶云〻、忠昌加思案中分、以定預所於兩人彼水田二町餘、「坪付在別紙」、冀感冥助於丹悃之深、令得國家安全、萬民豊樂、子孫繁榮、壽福康寧之誠、仍爲後證寄進狀如件、

明應四年九月十三日　薩隅日三州〻牧藤原忠昌（花押）

澤殿

1743

『入來家臣田中氏藏』

坪付

伊集院清藤名之内

四反　　はし口

以上

明應四年

十一月廿五日

義阿

『伊地知周防守』重貞

『本田因幡守』兼親

萩野又二郎殿

1744

「入來院氏臣田中氏藏」

（本文書ハ一七四三号文書ト同文ニツキ省略ス）

1745 「島津國史　巻之十二補注」

明應四年乙卯春閏二月、公賜蒲生刑部太輔宣清蒲生、右據蒲生十郎兵衛系圖、今據明時館長曆法、明應五年丙辰二月有閏、系圖誤也、

1746 「國史　巻十　二　圓室公」

五年丙辰春二月、加治木久平降、去加治木徙阿多城、圓據室公舊譜、阿多城遺墟在阿多鄉地頭館南一町許、係花瀬村、按阿多・田布施・高橋、為相州家采邑、而相模守運久方居阿多城、久平不容居此城也、但、其所徙、今莫得而考焉耳、

是歳　公建興國寺、同上、興國寺在府城東北十町餘、

六年丁巳、追尊　大岳公為小城權現、冬十月二十七日、

以某田為社領、使安養院領祠事、據圓室公舊譜、小城權現在府城東北十七町許、

七年戊午、八年己未、凡二年、事缺不書、

1747 「忠昌公譜中」

一明應五年丙辰二月、加治木大和守落城、而移于阿多城、

1748 「仝」

一同年、建立興國寺、開山泰雲和尚、檀那忠昌朝臣也、

「御譜文略同、左ノ如シ」

同年、建立興國寺、令泰雲和尚為開山矣、

1749 「見于本田信濃守重親傳」

一加治木一本作帖佐、萩之嶺城主有礼部之老臣野本藤内者、氏久主圍之、當此時隅州之社家合心於守護方、故重親社領據溝邊城拒凶徒、礼部之殘黨却攻重親於溝邊城、如斯則進退失度、兩城相共迫難儀、故互解圍去、不經幾程而加治木亦陷、是則賞重親之忠節、宮内神講之賜塚之門、得伊地知周防守重貞之狀、

1750 今度加治木萩嶺之軍、已及御難儀候處、御手人數被動「加治木久平也」敵退散、然者無幾程加治木之事被入御手裏候条、偏ニ貴所御揚名之由被思召候、仍雖少分之儀候、為彼御忠節之賞、宮内神講之内塚之門之事、被宛行之由候、早々御知行可目出候、賀事、恐々謹言、

「明応五年也」二月廿八日　重貞（花押）

本田殿（重親）御宿所

伊地知周防守

「上ヲ」本田殿御宿所　重貞

1751 「見于本田信濃守重親傳」

一太守　氏久公有故、没収留主之所領、留主之所領法樂

寺田并修理田有加治木郷、闕所者自古守護代雖計之、
重貞應乞、赦兩之地於重貞、得謝礼之狀、

1752 就今度留主殿所領没収之儀、加治木郷法樂寺田并修理田之事、已爲彼領地之上者、自守護代可有御闕所之条勿論候、雖然當時加治木地頭職之事、依我等承候、其間之事、可被閣之由申候處、預御領掌候、祝着此事候、然者彼申合候辻、於以後不可有忘却候、仍心中之趣爲御存知、令啓一筆候、心緒尚期來信候、恐々謹言、

十一月十五日　重貞（花押）「忠昌公ノ代也」

本殿御宿所

伊地知周防守
重貞

「上ヲ」本殿御宿所

1753 『感應寺文書』

薩摩國感應寺住持職事、任先例、可令執務給之由、所被仰下也、仍而執達如件、

明應五年十月廿九日　細川右京太夫政元判

從龜首座【自明応元壬子至大永八年戊子三十七年、感応寺住、天文二寂ス】

1754 「正文在喜入氏」

去五月十三日尊書謹拜見仕候、先以御珎敷忝存候、抑從御屋形様預御書候、不存寄御音信畏入存候、仍段子二端・繻子一端拜領仕候、何も上品与見候間、過分之至ニ候、併御意得奉憑候、將又去年屋形様之御發向、大磯殿被致合點之由承候間、乍斟酌應命心中ニて付墨申候キ、今度も定而御句被下候而、御尋之事も哉と存候處ニ無其儀候、残多存候、但當年者特老耄仕候而、被下候共分別難申候間、せめての事候、雖然御句殊勝候つる間、弥拜見仕度存候、如此申候へハ、御句ニて候程ニ、褒美申様ニ思召候ハん哉、兩神も照覧候へ、心中之無偽候、加様ニ申ニも、只御敷寄も増長候様ニと存心中候、主人之御敷寄候へハ、道ハ必繁昌する事候間申事ニて候、次雖憚千萬候、扇十本・筆百管・蘇香円七兩令進覧候、此扇之歌ハ三條悪相（亜）・姉小路宰相殿被遊候、又美濃紙三束・狸毛筆廿管長老様江進上申候折節、人々志候間、昆布百切、是ハ長老様之御茶子ニ成候へかしと存候、心中候、加様ニ馴々敷事、其恐千万候、去春之狀にも如申入候、はや隠居仕候而心安候、何となき御志なとをも、已後ハ思召寄間敷候、老後之事者心安さま候、衣鉢も照覧候へ、此申狀を被聞召

入候者、畏入可存候、返〻去年拜領之内三兩余之沈、于今難忘畏存候、心中大概成書記へ令申候、返〻屋形様への御礼憑存候、恐惶敬白、

八月十八日　　宗祇

拜進

福昌寺衣鉢禪師

1755

「正文在山田氏」

先年弓矢之時、敵同心候事、至于今者改其心中、於自今以後不可有二心之旨、加神名被遣證文候、恐悦候、如此之辻、於無相違者、聊も不可存等閑之儀候、恐〻謹言、

十月十三日　　忠昌（花押）

山田河内守（忠豊）殿

1756

「戴新納譜」

態進愚札候、就其ハ　屋形爲御藥蜜此方雖尋候、一向候ハす候、御所持候者、少にて候え共御まいらせ有へく候、隨而匠作・江州・讃州其外方〻御同道候て御越候間、寄尋無音無事罷成候、公私目出度候、兼又一昨日皆〻如限城御急候、　屋形様今日如市來入御候、　山北動事來廿六たるへく候、此方の事にて候之間、定而三俣邊敵可相動事も有へく候、堅固之御料簡肝要候、恐〻謹言、

霜月廿四日　　兼宗（平田）（花押）

經安（村田）（花押）

新納越前守（忠武）殿　御宿所

1757

『池端文書カ』

讓与

大隅國祢寢院佐多村之内田等之事

一松坂之薗壹ケ所

一濱田七段内山口薗壹ケ所

右、件之於田薗等、善從重代相傳之私領也、然間孫嫡子又十郎清年仁、本證文相副永代讓渡處実也、四至境之事者、本證文明白也、仍爲後日讓狀如件、

明應六年丁巳七月廿四日　　沙弥善從（略押）

（本文書ハ池端文書中ニ現存セリ）

1758

「御譜中」

十四代
忠隆

百房丸　又六郎

明應六年丁巳八月十四日誕生、御母忠治一腹也、「大友親政女トアリ」

1759

「忠昌公御譜中ニ在リ　正文在善泉院ト記セリ」

奉新造立

小城殿一宇之事

右、旨趣者、薩隅日三州之節度使藤原忠昌、累年之所勞未得快氣、於于爰偏非奉憑先祖之擁護者、爭頓得平喻乎、由是忠昌抽信心之丹悃、令新造一宇之社壇、以眞勝院殿大岳譽公居士、奉崇小城殿之神處也、爲彼燈明田奉寄進、坪付在別紙、於所願成就者、此燈明田之事、永代不可有退轉、蓋彼宮之事者、安養院連續之院主可被執務者也、仍爲後證寄進狀如件、

明應六年十月廿七日　　忠昌（花押）

1760

『入來家臣東郷善兵衛藏』

明應七年戊午七月二十八日

本村諏方座敷定日記

（入来院重聰）岡本　加賀守殿　伊与守　東郷　美作守　入來院　左京亮　村尾　讃岐守　市來　新二郎　山口　勘解由助　二階堂　山城守

寺尾　大和守　岩出　刑部少輔　白男川　孫左衛門尉　西牟田　与次郎　村尾　將監　原ノ　新兵衛尉　谷津　助八郎　成枝　源左衛門尉　堀之内　平衛門尉　遠矢　助左衛門尉

飯保　孫太郎　横大路　土佐守　田代　大炊助　山口　平左衛門尉　勝田　對馬守　今村　尾張守　種田　圖書助　樗木　孫左衛門尉　長野　彦衛門尉

宮里　左馬助　柳田　三郎衛門尉　嶋田　左京亮　部麦　右京亮　水平（手カ）　三郎左衛門尉　水地　出雲守　萩　源三郎　有川　兵庫頭　向井　助五郎

村尾　河内守　樋脇　因幡守　木場　丹後守　原口　太郎衛門尉　赤坂　大學助　嫌枝（杖カ）　三郎二郎　芳賀　兵部左衛門尉　野本　孫十郎　山之口　平三郎

左　上

加賀守殿　村尾　讃岐守　岩出　刑部少輔　白男川　孫左衛門尉　原ノ　新兵衛尉　村尾　河内守　ハラロ　大郎衛門　種田　圖書助　長野　彦衛門尉

右

岡本伊与守　寺尾　大和守　横大嶋（路）　土佐守　宮里　左馬助　今村　尾張守　成枝　源左衛門尉　山口　平左衛門尉　勝田　對馬守　有川　兵庫頭

萩源三郎
樗木孫左衛門尉
田口善左衛門尉

左　下

東郷美作守
二階堂山城守
山口勘解由助
村尾將監
柳田三郎右衛門尉
嶋田左京亮
部麦右京亮
赤坂大學助
岡原助七郎
芳賀兵部左衛門尉
野本孫三郎

向井助五郎
遠矢助左衛門尉
九郎左衛門尉

右

入來左京亮
市來新二郎
飯保孫太郎
樋脇因幡守
田代五郎二郎
水平三郎左衛門尉
嫌枝三郎二郎
水地出雲守
谷津助八
堀内平右衛門尉
山口平三郎
藤田藤衛門尉

1761

「薩州家國久譜中」

明應七年戊午七月廿九日[ハイ]卒、年五十八、法號桂林國久號保泉寺、

1762

「山田忠尚譜中」

福島院中土人、往々會不測菑害怪異、則曰、是前大覺寺尊靈之所爲也、因茲故有司美作守藤原直久相攸於城外、高築壇新建社、以崇其靈、會忌日之運、則致敬畏以爲祭神之禮矣、其後島津豊後守忠朝、恐祀其神敬之不足、差使節於京師、依神祇長從二位上大中臣卜部兼俱、謹請神號、兼俱應諾以達　天聽、明應七年九月廿五日、賜福島大明神嘉號、其冊翌年到于當院、是故撰于夏五吉日良辰、齊明盛服以設非常祭祀、無貴無賤群集濟々焉、於茲發揚宣旨神號、則洋々乎如在其上與左右矣、委曲有緣起也、

1763

「國分宮内澤氏藏」

又二貫文□

何時そへまちをうけ申候ハんする＝、此分をくハへてうけ申候、文龜三年八月廿六日＝參候、

依用之候、本物返しのしちけん＝入置申候水田之□

右、水田ハ、そへまち田のうち二段、六貫文上おちミ田之内二たん、以上水田四段を代のようとう十一貫文＝定而、つちのとのひつしのとしの作より、とりのとし作三ヶ年をさして、香乘坊之方へしちけん＝入をき申候事実也、さ

候間、就此下地候て、いらんわつらいの儀有へからす候、若いらんわつらひ候ハんする時ハ、任此狀、御沙汰有へく候、酉年之さく過候ハヽ、何れも有よりにうけ申へく候、其時ハ兩所一度にもうけ申へく候、たひ〳〵にもうけ□□さ候ハヽ、そへまちハ去年戌霜月代分之程、霜月中ニ返し申へく候、おちミたハ當年二月中有ほと、二月中ニ返し申へく候、錢ハ十一貫之内ふるせに二貫五百、其外□ゑひらくきうくハうの清錢ちゝこらふの小錢ましハて、如其ニゑらひ候てうけ申へく候、仍爲後日之狀如件、

明應八年己未三月廿八日

つかい　土屋次郎左衞門尉

澤永觀(花押)

1764

御供所職事、就被成御教書候、施行申候了、如仰其後うちつゝき物忿之事等之間、於申承候處、如此承候条悦入候、兼又八木一石給候了、思食寄候之条、難有存候、然事期面謁之時候、恐ゝ謹言、

五月十日　　忠貞(花押)

1765

なを〳〵、やかて〳〵まかりくたるへく候、せいこんにて申候うへハ、いつわりあるましく候、狀のてい御めんあるへく候、

一日めんにて申候、われらものまいりつかまつり候、おそくまかりくたり候するやうニ、とのゝおほしめされて候、なにニより候てさやうニ候ハんニ、いぬせういまたちのねをしくわへたる事にて候、又おんなこもいまたありつけす候、かた〳〵御心もとなく存候へとも、五十日百日の事ハ、とのゝ心さしほとに御たのもしくこゝろやすく候、そのゝちハやかてまかりくたり、こともものかくこ申へく候、せいこんおもつてすこしも御とうかんニなく候、又内のものニはしあての一りやうもとらせ候事ハ存のことく、このはるハ大かしにて候、内のものゝ中にもはやせう〳〵うへしにするへきものとも之候、さやうなるものはかりくれ候へハ、かたうしやミにて候つるミね(ミなカ)ニくれ候、はしあて一りやうにてせんとをとつけ候するにてハなく候へ□、一日のうへおもやすめへく候也、かやうなるしさいにより候て、おそくまかりくたる事ハすこしもあるましく候、せいこんにてかし、やかて〳〵まかりくたるへく候、よく〳〵御心へあるへく候、恐ゝ謹言、

正月卅日　　俊道（花押）

こしまとのへ

「上宛」　　さいせうし

こしまとのへ　　俊道

1766

尚以御代參之人を定、公家衆達可被仰付かと存候、

是又爲御納得候、以上、

正□（月カ）小節供之儀、御辛勞之段從是令察候、就其日取之儀、

此十八日可然由候、御代參之衆追而御意可被成候、將又

爲入具、青銅壹貫二百文、中紙一束三貼、只今持せ令進

之候、猶諸慶期後面之辰候、恐惶謹言、

霜月八日　　重房（花押）

伊地知少左衞門尉

謹上　澤永澄老　　重房

まいる人々御中

「右ノ三通年間無之、此ニ載テ考ヲ俟」

1767

「越前島津氏十三代四郎忠勝譜中」

播磨國布施郷地頭職下司公文兩職等事

爲貞和以來勲功賞之處、至祖父代被召放之、雖被充行富

永弥六、先祖者文明三年被成還附　御判之旨、捧請文申

之上者、被返付訖、早如先々可被全領知之由、所被仰下

也、仍執達如件、

明應八年六月廿七日　　散位（花押）

前若狭守（花押）

嶋津四（忠勝）郎殿

1768

「仝譜中」

明應八年己未十一月二日、戰死於叡山坂本、歳三十八、

法名正菊矣、

1769

「殉國名藪中」

明應八年己未

十一月廿二日、島津四郎忠勝叡山坂本にて戰死といふ、

1770

「國史　巻十二　圓室公」

九年庚申、

後土御門天皇崩、冬十月二十五日、

後柏原天皇立、據日本王代一覽、島津薩摩守忠興攻島津新三郎忠

福於加世田城、十一月十一日、伊作久逸引兵救之、軍

敗、久逸爲園田新右衞門所殺、（據島津系圖、島津支流系圖大田氏譜・伊作家譜、廟堂要覽、伊作久逸孫女適忠福兄下野守昌久、忠福為久逸孫女之叔、）忠興、成久之子、忠福、薩摩守用久次子下野守延久之子也、延久爲大田氏祖、（據島津支流系圖、島津成久始名重久、見上文明十七年、島津用久見第九巻應永三十二年、島津支流系圖、用久生國久、國久生成久、成久生忠興、而國久弟曰延久、延久二子、長曰昌久、少曰忠福、則是忠福為忠興從祖父、島津伊織系圖、忠興、成久之子、文明十八年生、舊跡見分帳、明應六年高尾野諏方大明神棟札、書大檀那成久及嫡子初千代磨呂、初千代磨呂即忠興、此年十五、）

文龜元年辛酉、（是年二月改元文龜、正月尚是明應十年、）春二月二十九日改元、（據續本朝通鑑、）

二年壬戌、事缺不書、

三年癸亥、是年世子又三郎加元服、（據蘭窓公舊譜、）

永正元年甲子、（是年二月改元永正、正月猶是文龜四年、）春二月晦日改元、（據續本朝通鑑、）

1771

「殉國名藪中」

明應九年庚申

十一月十一日、伊作河内守久逸（大岳公の三男にて伊作犬安丸の後ヲ嗣く、島津忠福の加世田城を攻るを拒き久逸と同しく戰ひ、深戰て死之、年六十一歳、創を蒙り三日にして死す、）丸田下野守久國、井尻孫右衞門祐能（久逸に從軍して同時戰死、）松元左近將監久賢（久逸と同しく戰死す、）

1772

「霧島山西生寺藏」

奉修造西生寺大曼荼羅院

奉爲金輪聖皇天長地久、別者當旦那藤原朝臣忠武官祿增進、武運長久、領内泰平、萬民豊樂、殊者當城軍代藤原久友御息災延命、（中文略之、）抑當寺者、扇天台之教風、而湛比叡之法水、（亦中文略、）兼又見先修之銘記、草創者、尋譽上人之開基、伴朝臣兼高、仁安貳季丁亥、第二再興者、舜應聖人之勸進、且那伴之兼郷、弘安元稔戊寅云々、

皆明應九歳庚申三月　日　大勸進衆徒中

大檀那藤原朝臣忠武（新紙）　本願田中坊沙弥秀珎

奉行大藏朝臣匡成　大工藤原武典

小工藤原勝正

1773

「忠昌公御譜中」

「正文在護摩所」

大隨求陀羅尼

「此経文用紙廿七枚略ス、末文左ノ如シ」

予幸

奉値遇秘密最上之陀羅尼、是非少縁、仰信至深、崇重无極、仍自染金泥於筆端、捧紺紙於掌中、奉書寫儀軌之文

畢、

冀垂三寶照鑒滿二世諸願而已、

明應九年庚申八月廿八日

嶋津陸奥守藤原朝臣忠昌（花押）

梵字權大僧都法印頼政（花押）

1774

「載伊作善久譜中」「正文巻本ニアリ」

於加世田河州（久逸）様御討死事、言語道断、迷惑千万無申計候、心中同前之由、推量申候、さ候之間、此刻菊三郎殿身上、已後迄之校量、如何に共候哉、乍若輩、愚存にハ弓矢事ハ無本候、屋形（忠昌）様ニ弥御隔候てハ、無勿躰存候、其様旧友候之間、心中分承候て、涯分可致故実候、但屋形様之事、無申事候、老名敷面々、宛概はかりかたく候、仍能々御思案候て、知音之方々御談合肝要候、自然近所之衆、ことに越前方なとのくりかへ被移候てハ、後々六借敷事、可有多々候、於于今、御年來と申、人の下にハ如何あるへく候哉、堅御思案候て、鎌田出雲なとに返狀かゝせ候て給へく候、其様數ヶ所之手さつし存候、急便候之間、そと申入候、恐々謹言、

「明応九年」十月十七日　「喜入元祖也」忠弘（花押）

「ウラ」若狭守　忠弘

「上書」三原殿　進覧

1775

「伊作久逸譜中」

島津薩摩守忠興與同新三郎忠福、忽有爲不快之事、漸及合戰、忠興責於忠福之居城加世田、忠福之兄下野守昌久者、久逸之爲孫壻、是以合力於忠福、明應九年庚申十一月十一日、遂戰死於加世田、享年六十一、法號德瑤輝公善勝寺殿、

1776

「大田氏系圖」

元祖延久二男

忠福

新三郎

加世田城主而居于當城之際、與薩摩守忠興忽相爲冰炭、是以明應九年庚申十一月十一日、忠興率師旅來攻我之城者甚急、丁此之時、伊作河内守久逸率騎歩來、欲增其勢忠福之援危急、于時忠興之兵對之而挑戰、久逸不幸而遂戰死矣、是亦兄昌久者久逸之孫壻、故不忍忠福

之聞窮困、所以援來也、

「昌久ノ妻ハ伊作又四郎善久第二女トアリ、日新公ノ御兄弟也」

1777

「正文在楞嚴寺」

「ウラ」「寄進状」

奉寄進田畠之事

隅州曽小河村楞嚴寺

右、彼水田者、川窊七段之内一段、畠地者、脇園三段之内二段、奉寄進處、爲後生菩提也、於子〻孫〻不可有違乱候、仍寄進狀如件、

明應十年辛酉六月七日　　酒井宗房（花押）

「川窊同畠脇園　酒井宗房」

1778

薩摩國河邊郡

野崎名之内木場

一ヶ所　　下田代

廿　水田屋敷付在之、

文亀元年十二月廿日

（伊地知）重貞

（本田）兼親

「川辺郷」

寶福寺

1779

『調所氏譜恒房傳』

文亀二年壬戌正月、留守所下政令三章於諸郷院、令以沙汰之、蓋恒房預焉、先例也、

1780

『仝文書』

留守所下　　諸郷院

仰下　　參箇條

一可任例行佛神事等事

右、治國之法、神事爲先致礼具、可勤行、

一可修固池溝築堤事

右、初春要池溝堤爲宗、尤可修固、

一曳殖苧桑柒等事

右、治務之道、苧桑柒爲要、尤可曳殖、

以前參箇條、任下知之旨、可致沙汰狀如件、

文亀二年ミつのへいぬのとし　　目大中臣

權大拯

昌近（花押）

1781

『一乘院文書』

寄進申塩屋之事

右、薩摩國南郷之内塩屋一間、限永代、坊津龍嚴寺一乘院ニ寄進申候事実也、仍爲備末代之亀鏡、證文狀如件、

文亀二季壬戌卯月十六日　　嶋津新三郎藤原朝臣忠福（花押）

「此文書、大田氏系圖忠福ノ譜中ニ在リ」

1782

「鶴田大願寺文書」

聖福寺住持職事、任先例、可執務之狀如件、

文亀貳年十一月廿日　　参議左中將（義澄）（花押）

利珪西堂

1783

「仝上」

建仁寺住持職之事、任先例、可執務之狀如件、

文亀貳年十二月廿一日　　参議左中將（義澄）（花押）

利珪西堂

1784

「忠昌公御譜中」

「正文在坊津一乘院」

般若心經

「經文用紙二葉略ス、末紙左ノ如シ」

文亀三年癸亥夏五十六日書之

嶋津陸奥守藤原朝臣忠昌（花押）

1785

「鹿屋氏文書」

犬追物手組事

十一　嶋津豊後守殿　十疋
十二　嶋津次郎五郎殿　十疋
十三　嶋津源右衞門尉　三疋
十一　嶋津四郎左衞門尉　五疋
十二　嶋津治部少輔　十六疋
十三　田北藤右衞門尉殿　十二疋

嶋津備前守殿　三疋
嶋津右近將監　八疋
羽嶋新左衞門尉　三疋
嶋津助七　九疋
柏原助七郎　八疋
嶋津左馬助殿　十三疋

検見

大内左近大輔殿

嶋津淡路守殿

喚次

文亀三年七月廿四日

1786

「在御文書中」

一殿中へ琉人參上之時之事

一御元ふくの事

「文亀三癸亥十一月廿一日忠治十五歳也」

一新納殿ゑほし親ニ御參候事

「忠武」

一忠幸様御ひたいめされ候御祝之事

「上下省之」

1787

勝久

初忠兼　又改勝久　爲義忠云々　宮房丸　又八郎

八郎左衛門尉　修理大夫　陸奥守

文亀三年癸亥八月十八日誕生、母忠治一腹、

頴娃氏依無世子爲猶子、雖然兄二人早世、故去頴娃氏

爲守護職也、

1788

「正文伊地知越右衛門藏」「忠昌公御譜中　寫在伊地知弥吉郎トアリ」

「此書ハ應永十七年六月三日、御上洛ノ古書ニ參考スヘシ」

正八幡宮始而　御屋形様御社參之事、文亀四年二月十

四日ニ鹿兒嶋御立候、同十五日御社參御下向、同十六

日御先うち、

河上筑前守殿「忠直」

くつをハ中間ニ被持候、返しもゝたちとられ候、もゝ

ぬききやはんゆかけ有、すわう小はかまうつほふち、

しんとう三、弓同はりかへおひかへ引そへ、同くらお

ゝひ有、殿原五人、中間十五人之内ニやり四本、中太

刀一、大太刀一、弓うつほ四人、しめ四、はんひき二、

しんとう六、小者うち刀、房長太刀、とうはう長太刀、

松本新左衛門尉　弓うつほ

同名五郎兵衛尉　同前

小玉九郎衛門尉　同前

野弘新六　同前

久保田三郎四郎　同前

與十郎　同前

松本二郎四郎　同前

小玉十郎兵衛尉　同前

大山清左衛門尉　同前

松本藤七　同前

川口七郎衛門尉　同前

鉾立吉衛門尉　同前

長田助次郎　同前

彦八　同前

二郎兵衛尉
筭坂二郎五郎「美カ」　御うち刀
鍋太郎
塩二郎　御はき物
松本藤左衛門尉　御はかせ「永正比ノ文書ニ御剣持トアリ」
若殿様御すわう、御小はかま、はしり衆御はかせ、
給黎助六殿
すわう小はかま、ふちはかりもゝぬきやはん、くつはかれ候、同指かけ有、殿原六人、中間七人之内ニやり二本、中太刀一、弓うつほ二人、小者うち刀、房長太刀、
誘同前
本田又五郎方「親貞カ」
殿原五人、中間十人之内やり二本、弓うつほ六人、中間太刀一、小者うちかたな、房長刀、小者しんとう、
同
敷祢三郎五郎方
殿原三人、中間八人之内ニやり二本、弓うつほ一、中太刀一、小者うち刀、しめしんとう、
同
比志嶋源左衛門尉「義信カ」
殿原四人、中間十人之内やり三本、中太刀一、弓うつほ一、小者うち刀、房長太刀、

同
川田十郎方「義近カ」
殿原四人、中間十人之内やり三本、うち刀一、弓うつほ二人、小者うち刀、
同
大寺九郎方
殿原四人、中間十二人、此内小者うち刀、弓うつほ二人、やり二人、かま一、半太刀一、
同
梶原新衛門尉方「元純カ」
殿原四人、中間九人之内やり三本、中太刀一、弓うつほ一、小者うち刀、
同
枝次又八郎方
殿原四人、中間七人之内やり二本、弓うつほ一、太刀長太刀一、しめ二、小者二人、此内一人ハうちかたな、
同
河俣弥次郎方
殿原三人、中間九人之内やり三本、弓うつほ一、中太刀一、しめ二、半引め一、小者うちかたな、太刀長太刀、
同
大寺彦十郎方
殿原三人、中間九人之内やり三本、中太刀一、弓うつほ一、小者うち刀、殿原中間いつれもきほつけんのかたきぬ、

同
野田源左衛門尉方
殿原五人、中間八人之内やり二本、弓うつほ一、中太
刀一、小者打刀、
同
大井方「本まゝ上井欤」
殿原四人、中間八人之内やり二本、弓うつほ二、中太
刀一、小者うち刀、
同
重久方
殿原四人、中間七人之内やり二本、弓うつほ二、中太
刀、小者うち刀、
同
梁瀬方
殿原四人、中間八人之内やり二本、弓うつほ二、中太
刀一、小者うちかたな、
同
池袋方
殿原四人、中間十人之内やり二本、弓うつほ一、中太
刀一、小者うち刀引そへ、同くらおゝひ有、
同
恒吉方
殿原五人、中間十人之内やり三本、弓うつほ二、中太
刀一、小者うち刀、房長太刀引そへ、同くらおゝひ有、
くらハ金ふくりん、
同
取鳥方
殿原五人、中間十人之内やり二本、弓うつほ一、中太
刀一、小者二人、此内一人ハうち刀、房長太刀、
同
平田八郎四郎方「宗頼カ」
殿原五人、中間十三人之内やり二本、弓うつほ二、中
太刀一、小者二人、一人ハうち刀、房長太刀引そへ有、
同
石谷助太郎方
殿原五人、中間八人之内やり二本、弓うつほ一、小者
うちかたな、
同
本田三郎四郎方
殿原五人、中間十人之内やり二本、中太刀一、小者う
ち刀、弓うつほ二、房長太刀、
同
河上次郎左衛門尉方「家政」
殿原四人、中間八人之内やり三本、弓うつほ二、中太
刀一、小者うち刀引そへ有、馬ハいつれもかけなりく
らおひ有、
同
肝付越前守方「兼固」
殿原六人、中間十三人之内やり四本、弓うつほ二、中
太刀一、小者打刀、房長太刀引そへ有、
同
伊集院刑部少輔方「久盈カ」
殿原六人、中間十人之内やり二本、弓うつほ二、小者

打刀、房長太刀、中太刀一、
伊地知周防守方「重貞カ」
引そへ一疋、やり十本、うつほ十本、中半太刀一、打刀一、以上小者四人、房長太刀一、殿原十人、
惣以上三百七十一人
伊地知越後守重實

1789

『上原氏家藏』

犬追物手組　文亀四年三月廿二日

一嶋津備前守　九疋　三　澁谷藤次郎　五疋
豊後守殿　十四疋　梁瀬源五　十一疋
嶋津治部少輔　十疋　村田与次郎　九疋
柏原助七郎　十壹疋　羽嶋新三郎　三疋
羽嶋越前守　三疋　上原又七　六疋
二嶋津左馬助　十八疋　四　嶋津次郎四郎　五疋
検見　喚次
餅原駿河守　吉田六郎三郎

1790

「新納文書」

（本文書ハ一七九二号文書ト同文ニツキ省略ス）

1791

「酒勾家文書」

忠治様御代御寄合座躰
御屋形様　新納殿　佐多　蒲生　吉田老中
相州
豊州　霜臺　北郷　椛山　若州　河上　北原
御屋形様　入來院　秋月老中
東郷　椛山　祁答院　珠全
一新納江州對　御屋形様ニ出仕被停止、經年月處、一家之儀絶口惜次第候とて、豊州以吳見江州鹿兒嶋出頭候、
同椛山・祢寢・肝付・本田被罷出候、
一新納江州當所へ御着候、宿本へ御使と而、大寺被進候、
其後　御屋形様へ爲御返礼ト、新納次郎四郎進上被申候、平田右馬助取成申上候、
一椛山・本田・同名又五郎同前ニ祗候候、
一新納江州出仕、奏者二階堂左馬助、今一人ハ本田治部左衞門尉、紀伊守（豊）・次（新）郎四郎兩人も被懸御目候、
一御酒御三獻角土器にて候、并廿二日之御寄合之案内、以桑波田申候、主居之上より二間めの柱ノ本ニ、
御屋形様　攝州　池袋
新納江州　河上　椛山　平田

一御酒三返の御酌ハ本田治部左衞門尉、二返めハ新納次郎四郎・隈江被召出御酒給候、三返めの酌ハ二階堂・新納江州、盃を末弘ニ御さし候、末弘攝州へさし申候、攝州本田治部左衞門尉へ御さし候、治部左衞門尉椛山藝州へさし申候、於其座ニ　御屋形様へ新納江州より鷹御進上候、

一新納江州受領御申候、二階堂老中へ上申候、御肴出來候へ者、江州御内へ出仕候、奏者則二階堂、爲御祝ト太刀一腰・馬一疋・鳥目千疋御進上候、大寺美作守被渡候、請取二階堂也、於面之座ニ下より二間めニ新納江州御座候、其次之間にて被渡候、軈而老中被指出、受領之祝之式三獻也、

一朔日、於新藏、旁〻御對面候、其より御寄合、

御屋形様　備中守　池袋

豊州　新納江州　平田右馬助

一七日之朝、御内へ出仕候、奏者野邊右衞門尉、先豊州・新納江州・祢寢・肝付被懸御目候、

一十一日、旁〻へ御寄合之案内、以平田内藏助被申候、

御座敷之次第

御屋形様　新納江州　攝州　祢寢孫次郎　平田右馬助

豊州　祢寢堯重　肝付　珠全　本田紀伊守

十七日之夜座敷之次第

御屋形様　祢寢孫次郎　豊紀伊守　伊地知

新納江州　肝付　本田治部左衞門尉

一同廿三日、從新納江州、老者中御寄合座之次第、

新納江州　伊地知　大寺治部少輔　日置周防介

平田右馬助　本田治部左衞門尉　池袋筑前守

二階堂　隈江

一同廿四日ニ、一瓢様當所へ御出頭、中途まて打迎、御屋形様より河上兵部少輔、豊州より本田名字の方、新納江州より恒吉名字方、小野まて此人數被參候、

一同廿五日之夜ニ入候て、一瓢様御内へ御出仕候、豊州・江州案内者被召候へと　御屋形様より被仰出候、先豊州御對面、其後一瓢様御對面候、江州も指出候、御肴者角土器にて候、

一同廿八日、諏訪之御祭礼ニ、豊州ハ宮丸方へ、江州ハ平田美濃守所へちかより候て、　御屋形様を待御申候、椛山・祢寢・肝付御同道候、

一棧敷之御三獻之間、此旁〻取居の本ニ、敷皮にてやすらひ候といへとも、餘久敷候之間、奏者にて安養院へ

御入候而、三獻過候へ者、棧敷へ御まいり候、

一座敷の次第

御屋形様　新納江州　河上　祢寢

豊次郎五郎　平田右馬助

豊州　祢寢入道　椛山　肝付　廻

一御屋形様すわう御ぬき候、二階堂御そはに被參候、其より豊州座を立候て、下座にてすわうぬき候、江州・椛山・祢寢・肝付何もぬかれ候、日置周防介・隈江すわうぬき候、御内衆の事ハ不及申候、

一御屋形様御馬ニめし候、沓之役人本田治部左衞門尉、さきニかさ袋に花氈の鞍覆かけ候、引替之御馬、房御長刀、御中間・小者半太刀、打刀、上さしの袋御前ニ被持候、

一御屋形様へ八朔の御祝、いつものことくあかり候次第、

先一瓢之御太刀、薩州　豊州　江州

一上様へ祝物あわせ一色紺　扇子壹本

一伊地知方旁ゝへ會尺被申候座敷之次第、

豊州　祢寢　珠全　池袋　伊地知

一瓢様　江州　豊二郎五郎　平田　梶原

「右、年間詳カナラス、此ニ載テ考ヲ俟ツ」

（表紙）

忠昌公
忠治公　自永正元年
忠隆公　至同十八年
勝久公

前編　舊記雜錄　巻四十二

1792

「新納近江守忠武譜中」
「寫在新納三河忠徳入道楚弓」

就祝詞申通候令啓候、抑於自今以後者、弥自他之滿足益可申加候、仍太刀貞次一腰・馬鹿毛一疋進之候、誠表佳例候、恐々謹言、

十二月十三日　又三郎忠治

謹上　新納近江守殿（忠武）

「朱カキ」
「永正元年十二月十六日、従　蘭窓様初而忠武江被下候御書之寫状ニて候」

1793

「仝上」

誠今春之吉慶千喜萬悦、雖事舊候、猶以不可有其期候、弥重々々、幸甚々々、抑就此等之祝儀、預御賀札候、快悦如仰、從今年者諸事滿足候、御同意之条祝着候、賀事猶期面謁候、恐々謹言、

「朱カキ」
「永正年間欠」正月十一日　陸奥守忠昌（花押）

謹上　新納近江守殿（忠武）

1794

「薩州家四代忠興譜中」
「在清敷衆山崎助左衛門」

永正三年七月十一日、寄田於土川与申在所合戰候、比志嶋殿討取候而、頸を和泉へ致持參候、　薩州忠興様上意之趣者、無比類之通蒙御感候、今時分高名之人、大略民部左衛門と被成官途之條、如其被仰付候由思食候、如何被存候哉与老者中へ御尋之上意候ヰ、尤可然之由、阿多彈州被申候、然者民部左衛門尉ニ被任候而、塗籠之御多羅枝給候、此官途之事、於子孫代々如此候由、可致覺悟候条、書付候了、此御弓箭之事、從始種々雖御申候、無御承引、自　屋形様被召懸候而、其後三年ニ成候時、薩州さま御理運無紛候事ニ候とて、福昌寺天雄東堂様和泉

へ御越、被入御手色〻御意候て、六月かこしまへ「末切ル、欠」

1795

「國史 巻十二 圓室公」

二年乙丑、事缺不書、

三年丙寅、肝付河内守兼久以高山城叛、據圓室公舊譜、島津系圖、兼久、兼連之子也、先是兼連據邑拒命、其弟越前守兼光諫之、弗聽、至是兼久復叛、據肝付典膳系圖、肝付兼連見上文明十六年、高山城遺城在高山郷地頭館東南一里許、係新留村、秋八月六日、公自將伐兼久、新納忠武率志布志兵救之、我師不利、冬十月十二日、公班師、據圓室公舊譜、島津系圖、

四年丁卯、是歲琉球王使天王寺來聘、據福昌寺年代記、

五年戊辰、春二月十五日、公薨、年四十六、葬於興國寺、據島津系圖、廟堂要覽、當是之時國勢不振、強臣跋扈、公志在靖難、迄無成功、還自高山、以爲我不獲志肝付氏也、則新納忠武使然、居常邑邑不樂、歎曰、人生若此、不如死也、是日吟西行和歌曰、禰賀和久和、波奈乃毛止仁天、波留之奈牟、曽乃幾左良幾乃、毛知津幾乃己呂、憤懣而死、據圓室公舊譜、島津系圖、興國寺二世住持宗津筆記云、二月十五日夜公自殺、奈良原助八滿從死、同上、宗津筆記云、奈良原助八者其先山城賀茂人、姓藤氏、助八為人勇悍、仕圓室公有軍功、永正五年二月十五日圓室公薨、二十日、助八到福昌寺門前、自殺而死、年二十五、奈良原喜左衞門系圖云、奈良原帶刀周始居加茂、後仕薩摩、周生大膳正覚、助八者覚之次子也、公

婆大友豊後守政親之女、生三子、長爲蘭窓公、次爲興岳公、次爲大翁公、蘭窓公生於延徳元年己酉、是歲年二十襲封、據島津系圖、大友政親、親世六世孫也、據諸家大系圖、大友親世見第七卷永和元年、三月十二日、蘭窓公遣琉球王書曰、王無恙、前遣天王寺東堂、來修舊好甚善、寡人是歲嗣位、爰遣安國寺住持雪庭西堂告示、因諭、自今以後、此方商船至王國者、務要査點明白、儻有不帶寡人印證者、収其貨物、暮春和煦順時保重、據蘭窓公舊譜、福昌寺年代記、秋七月、將軍足利義澄罷、義尹復任征夷大將軍、據續本朝通鑑、義尹即義材、

1796

【伊作】一觀音　　大手口

右伊作久逸建立、又ハ　日新公御造立共舊記ニ相見得申候、　日新公十五歳之正月十一日之曉天、御夢相ニ【当永正三年】觀音枕之上ニ立寄給ひ、花咲たる枝と掌刀【本マヽ】と三ッ是を菊三郎ニ附與すと、夢覺給ふ、依而日ニ増文武之兩道ニ超給ひ、　日新公以來　龍伯公迄被遊御信仰、就中義久公伊作城へ被遊御座候時ハ御自參、別而被遊御信仰候由、其後豊後入之節も被爲成御誓願、岩屋城及落城候与、是亦舊記ニ相見得申候、

1797

『福昌寺文書』

藤原忠治ヨリ

牌錢卅貫文

馬一疋代物

五百疋

永正三年丙寅八月廿日請取

侍衣

建盈（花押）

1798

『河邊平山村六町觀音堂木像後光板ノ銘』

奉再興彩色

當君國主藤原朝臣忠昌并忠治御息災延命、國家御治世、武運長久、別而大願主上津浦入道永安、地頭河上掃部助榮久、同又八郎義久并顕娃兵部少輔兼心、否笠佐渡守章政、同「多字不知」中条備前守資政、「字不知」町田「字不知」貴嶋彈正、同源左衛門尉、飛彈源右衛門、「亦字多不知」山下與八方、知覧又七郎方、深見方、同太郎次郎、梶原「多字不知」其外三四十人「文字知レス」

永正參季丙寅　當住持可休叟

作者青木多樂院「文字多不知」

1799

「見于兼親傳」

一永正三年丙寅、　忠昌主欲建鐘樓於霧島山華林寺、有有司之命、八月廿六日、賜兼親書、二十七日、獻書拜命、霜月十五日功成、勒銘置華鯨、蓋霧島人皇六十二代村上天皇天暦三年、橘善根之子性空上人奉勅命、於當山來祈誓、于時現六觀音、自尓日月昌及三千餘坊、歷二百八十六年、文暦元年十二月廿八日、炎燒於神火、又歷二百五十一年、文明十六年申辰、蜜宗兼慶法師依國家命再興之、永正三年丙寅、太守忠昌公別尊崇之、霜月十五日、寄進華鯨一口矣、考之國家二字不知所訓、或曰人之實名、或曰指太守有義、何尚文明十六年、則當忠昌主二十二歳、考之於兼親、自文明十三年至同十七年間陷于忠廉之輩、故無有公命之理、其間二十三年、忠昌主知兼親勞於造營、賜書勞之、不詳果在何年、後人正之幸甚、

「右ノ堂、古ハ雲皎庵ト云、玉泉寺ノ末寺、開山ハ玉泉二世威芳ノ建タル寺内ノ由、久シク寺廃壊シ、寺地七畦御免地ニテ、今玉泉寺ヨリ支配スト云々」

1800

就造營等辛勞共候之由、村田申遣候、悦入候、此方之依時儀、肥前守可召寄候、造營等之事、能々被申合候而可被置候、委細平田可申候、恐々謹言、

八月廿六日　　忠昌御判

（兼親）
本田殿

1801

「御書御報之案」

畏言上、

抑就御造營、忝御書謹以頂戴、誠目出奉存候、隨而修造之事村田方申合、弥以可致奔走候、御次之時者、以此旨、可預御披露候、慶事、恐惶謹言、

八月廿七日　　兼親（本田）

進上　平田殿

1802

「新納近江守忠武譜中」

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

先度如申候、移小原へ給黎候、平所候間、城執候、爲其村田・本田指遣候、定而毎々請御意候哉、仍從最前可預奔走之由承候、喜悦御近所之事候、弥憑入候、心事期後音候、恐々謹言、

「朱カキ」

「永正三之間欠」十月十九日　　忠昌（花押）

新納近江守（忠武）殿

1803

「國分宮内澤氏文書」

正八幡末社大平良八幡大宮司職并万善村之沙汰人職事

采女正賢弘

右——

永正四年十月廿八日

御前法橋上人位永觀

1804

「在新納譜」

又宝木給候、賞翫此事候、

其後可申通之處、無指事条閣筆候、就中先度鐙之角并鈴之事申候之處、早々調候而給候、喜悦候、何様以面御礼可申候間、省略候、恐々謹言、

十一月廿一日　　忠昌御判

新納近江守（忠武）殿

「近江守忠武譜中ニ在リ」

1805

『島津氏譜中』

一隅州之住人肝付某之徒黨構居處於高山本城、敵于當家者及于度々矣、爲攻平於彼凶徒、引率軍衆、忠昌自將而發向於彼地矣、（按永正三年八月六日肝付退治ニ出馬、）當此時不計新納近江守忠武企叛逆、自日州志布志率大軍來而攻吾者甚急也、故不得止而所以退陣也、（同年十二月十二日イ十月トモ）爾來朝思暮想者、只有所以未國家之袋弓矢庶民之居佚樂而已、雖然天命未到、勢亦

不乘於茲、欲化生入黄泉報恨於凶徒成子孫長久之計云々、群臣驚動而曳裾執裳加諫言曰、合戰之敗立者依時運者也、何以一敗爲終不立乎、古昔楚之項羽與漢之高祖有大戰、項羽勝七十四度、及七十五度之戰、則既敗走而自殺于烏江矣、其後詩人題之曰、勝敗兵家不可期、包羞忍恥、是男兒江東弟子多才俊、卷土重來、未可知、以異國本朝之舊例、強雖諫、敢不可者也、

1806

「西藩野史」

永正三年丙寅（明應十年二月二十九日改元して文亀と号す、四年二月晦日又改元して永正とす、）八月六日、

忠昌公肝付河内守兼久（世隅州肝付の主、高山本城にあり、）か叛するを征す、

兼久援を新納近江守忠武（志布志）に求む、忠武大軍を卒し來て、公を襲ふ、兼久亦擊出し夾攻む、公の軍大に破る、公軍を収て鹿兒嶋に歸る、

四年丁卯

琉球國（忠國公封を受る事ハ嘉吉元年に有り、）怠て貢税を納れす、忠昌公大に是を怒る、琉球王恐怖して使（天王寺の僧使たり、天王寺は琉球國寺の名、）を遣して罪を謝す、（使日州志布志に來るといふ、）公又使を（安國寺僧使たり、安國寺ハ隅州加治木にあり、）康永中足利尊氏立つ、遣して是に答ふ、

五年戊辰

時に國中賊徒大に蜂起して郡縣を剽掠す、忠昌公憤激して曰、徳是を懐る事あたわす、刀征する事あたはす、生て時に益なし、若し泉下の鬼と成て賊を滅せんと、二月十五夜清水城中月前に嘯き西行か歌（願くハ花の下にて春死なん其きさらきの望月の空）を高吟し、剣を取て自殺す、享年四十六、圓室源鑒と諡す、爲に建て太平山興國寺と号す、（或云、明應五年立つ、或云、明應六年立つ、初今ノ大興寺の地にあり、其比上山城邊に移す、又城北に移す、今寺禄三百石を寄す、）先是山城國加茂の士奈良原助八來て、忠國公に事ふ、公非命の薨を悲ミ自刃して殉死す、（傳云、福昌寺楠樹下に死す、）年二十五、

1807

「西藩野史」

忠治公

忠昌公の長子、母は大友豊前守政親（豊後太守、）の女なり、（天眞妙幸と諡す、神主興國寺にあり、）延徳元年己酉正月十七日生る、安房丸と稱す、

文亀三年（年十五）元服して又三郎忠治と稱す、

永正五年戊辰、忠昌公に継て立つ、此時賊徒猶國中に滿つ、公討罪して須臾も安居せす、（事詳かならす、）

十二年乙亥

八月、忠治公蓐に臥して起す、終に清水城に薨す、（十二五日、享年廿七、蘭窓津友と諡す、津友寺（薩州吉田にあり、佛智山と号す、應永二

十年吉田氏立つ、了心寺と号す、開山ハ石屋ノ弟子竹居なり、傳云、公の母ハ大友氏也、故に津友二字を摘て津友寺と改む、に葬る、

「西藩野史」

忠隆公

忠昌公第二の子也、母は忠治公に同し、幼字百房丸、後に又六郎と稱す、

永正十二年乙亥

忠治公薨す、嗣子無きに因て封を襲ふて立つ、

十三年丙子

備中國蓮嶋の主三宅和泉守國秀琉球國を取らんと欲し、艨艟十二艘を艤し、薩州坊津に來り順風を待つ、　忠隆公大に怒て曰、夫琉球ハ我屬國として五世服從す、國秀恣に人の土地を貪る、誅せすんハあるへからすと、將軍義稙公に告て軍を發し、蒙衝鬪艦に燥荻枯葉を積て風に從ひ、火を發て國秀か船を燒く、國秀前後顧る事あたハす、燒溺して一人も遁るゝ者なし、

十四年丁丑

二月、薩州吉田城主吉田若狭守位清城に據て謀反す、

忠隆公親ら軍を領し、吉田に至て圍ミ攻む、二月十日、位清力盡て降り城を獻し、同十四日、山門院に至て嶋津三郎太郎忠興に寓せんとす、按に、位清ハ相模守忠良公姉の夫なり、忠興ハ忠良公夫人兄なり、故に忠興を頼む欤、嶋津善左衞門尉忠興の一族也、半途野田・阿久根の境松原、に兵を伏せて位清を殺す、傳云、位清を神に崇め、若宮と号し、今にそんすといふ、　忠隆公守兵を吉田に残して軍を班す、　按に、吉田往古三位大藏ノ行忠數世領す、天仁三年執印行賢是を領す、源為重に讓る、為重ハ鎮西八郎為朝の次子なり、為重吉田を外孫長太夫清道に讓る、清道ハ其先日本武尊の子息長王子に出つ、故に息長を以姓とす、清道か子吉清頼朝公に仕ふ、其子太郎守清、其子太郎清弘、其子次郎清高、其子彦二郎清和、其子二郎太夫清持、其子伊豆守氏清、其子伊豆守清元、其子若狭守清正、元久公に從ひ京に到り能登守に任す、元久公逝去の時、久豊公に忠あり、鹿児嶋下田六町を加賜ふ、其子二郎四郎兼清、其子尾張守泰清、其子三河守孝清、其子次郎四郎惟清、後に若狭守と稱す、位清横死して吉田除せらる、

十六年己卯

忠隆公痘疹を病ひ、四月四日薨す、享年二十三、鹿兒府龍盛院に葬り、龍盛興岳と謚す、　按に、西峯山隆盛院ハ曹洞宗福昌寺の末寺なり、永正十六年創立、忠隆公逝去に由て建立ある欤、又伊作興焉寺に、伊作家より忠隆公の神主を立て祭る、

「西藩野史」

勝久公

忠昌公第三子なり、母ハ忠治公と同し、文亀三年癸亥八月十八日誕生す、幼字宮房丸、元服して又八郎忠兼と稱し、顯娃氏の後嗣と成り、後に八郎左衞門尉と改む、

永正十六年己卯

忠隆公薨して嗣子なし、故に継て立つ、

十七年庚辰

「七月廿四日、宮里孫太郎正豊新納衆ト隅州比目木石跡ニ戦テ功アリ」

八月、　忠兼公隅州曽於郡城を攻む、　永正十六年、伊十院尾張守曽於郡城に在て謀叛す、（按に、曽於郡ハ上古より税所氏領す、文明十五年島津修理亮忠廉是を陥る、爰に至て三十八年何人の領する哉未考、）新納近江守忠武（新納家七代、）志布志の軍を卒し來て是を援ふ、　忠兼公清水に至り軍を整へ、進んて曽於郡を攻む、二十二日、尾張守力盡て降る、十一月廿七日、　公守兵を爰に置て鹿兒嶋に歸る、　忠兼公桂樹院の僧玄章を使として京師に至る、於是修理太夫に任す、

1810

永正五年戊辰

二月十八日、奈良原助八満（此月十五日圓室公薨し給ひしを慕ひ追て殉死す、公室殉死の始なりとぃふ、）

1811

「御譜中」

一永正五年戊辰二月十五日、忠昌在薩摩州麑島清水私宅、而丁俟夜暗欲遂臆念之時、當初西行法師豫擇末後之時節、深冀終焉之不違、以詠一首之和歌、經幾春秋之後、得所以志願之佳期隔幽明矣、想夫非託其根於心地、發其花於詞林、動天地通神明者豈能如此乎哉、今也吟其古歌曰、

おなしくハ花のもとにて春しなん
そのきさらきのもち月のころ

と感詠再三、爲臨終之詠、而忽自殺畢、享年四十六、法名源鑒、號圓室興國寺殿、奈良原助八追跡殉死矣、一自文明六年甲午至永正五年戊辰、三十五ヶ年治國也、

1812

「寫在串良安住寺」

一於當家肝付代々不隨、當代猶以致不忠、永正三暦丙寅八月六日、忠昌於肝付就勦陣、新納与肝付成一味、故不遂御本意、同十月十二日開陣、從陣中刎御櫛歸坐亭内、恥衆眼心憤塞胸臆氣不霽、所詮、縮現在之命、求後世菩提、然而創建興國七宇之殿堂、安置本尊諸伽藍主畢、而果而御自害、同五年戊辰正月廿五日、平田右馬助串良城去渡、櫛間之豊州令參上、從亭内簾越見參之時、新納・肝付之滅亡者百年中於灰上可見云々、同二月十五夜半倚柱乍坐御自殺、年齢四十六、兩鬢如霜雪、一身似鶴痩、依宗津曳毎朝手自虔備茶湯如是、興國看主懐此哀悼可奉訪者也、

興國二世宗津曳判アリ

1813

一奈良原助八死後親戚圖繪其影有賛曰、

奈良原道三眞賛

奈良原助八公者、旅(膂カ)力過人武勇出群、其祖父出乎藤氏、山城州賀茂郷人也、越乎永正五年戊辰春二月十有五日、丁薩隅日三州刺史前奥州大守忠昌主君、俄執智刃以自殺、然而助八公亦同廿日早辰告慈母曰、吾以故從亡君、而暫遊矣、須叟而坐于福昌寺門之榎楠木之下、而翕(靠カ)弓於樹下、結以一筆之手書焉、蓋取別於諸友者欤、即提利刀而割腹、看來電光之顯剪春風回、其告父兄曰、吾重　君恩而輕一命而已矣、言畢而逝矣、人皆貴其膽、又感其忠、吁千古萬古豈有如斯事也耶、其賛曰、

行年廿有五兮、其人雄而英、強弓過羿穀兮、一弛不受槃、常以忠義氣兮、胸中藏萬兵自殺、奉　主君兮、重名命已輕、昔二客自刎兮、穿塚從田横、吁嗟断死節兮、使人病之生、

于時永正第七歳舎庚午五月廿日

鳳城山人以安光建書于巣松軒下、

1814

「忠昌公御譜中」

「寫在串良安住寺」

奈良原助八從十六歳、因有武勇器量、雖二男被召使、度々高名無限、姓藤氏、山城賀茂人也、永正五年戊辰二月十五夜半、忠昌遂御自殺時、彼助八同廿日早朝、向慈母云、我亡君之御恩賞不浅良愁嘆、又云、暫行遊、須臾福昌門前行長馬場、靠弓楠木(榎イ)、以告死別之一書於諸友、々々走集、即取利刀(剣イ)笑而割腹、行年廿五、諸友垂哀刻彫六地藏立之、興國二世宗津臾於向嶋之頂、鑄建銅鉄塔、上段御當家代々先祖、中段親類衆、下段奈良原關月道三戒名穿付、是感其忠之義也、懸命地邊茂木一町、二月十六日正月忌御半齊之次、道三公江香膳大悲呪一返盂蘭盆粥飯點心可供之者也、

宗津臾書判アリ

1815

『福昌寺文書ノ内』

欽呈上、

嗣承　字天祐、諱宗津、洞山二十七葉

嗣前福昌龍室從、々嗣泰雲琮、々嗣心嚴信、々嗣中翁邦、々嗣大寧竹居猷、々嗣福昌開山石屋梁、

薩州鹿兒島郡玉龍山福昌禪寺、廼藤氏島津恕翁忠公爲檀度而創建之精廬也、蘭慕石屋之法道、推之爲之開山祖、

而堂宇具體崇師之道化、猶一活佛祖塔號智日、其院號慧燈、院之左邊有坐禪石、瀑布觸之則四時吹雪也、臣僧天祐見住于茲矣、又以興國・大清・宣德之三精舍爲之兼住、臣僧十七歳僑居于南禪内歸雲院南院圖師塔下、闞螢雪之勤、泊乎有日二十歳求過商量、扣箕外禪於紀州鳳生寺、而露宿嵐殘尚要遍參、攀通幻風於丹陽永澤嶮、而霜苦雪煎終、因爲藤氏季族、後歸薩之錦里、蚤親近於祖翁泰雲、雖觸玄機受印證乎今龍室師、々事之自爾以降寅晡之候軀無離衣、晝誦夜禪脇弗潤席、且夫冀匡徒扶起宗也已矣、抑亦從龍室翁厥行李底不遑呈記之、早歳遍歴九州中國、勘破佛法麤細、然後長養有季矣、但族之其姓不同系、而嗣法於泰雲琮者也、餘不異錄于前、於是今茲秋八月當檀越恕翁一百遠諱、仍吾山徒弟胥議曰、偶際此辰、忝蒙兩翁之徽号、永欲爲祖門光輝云爾矣、龍雲寺卽龍室見住也、欽需誠懼誠惶頓首々々、

永正第六八月　日

1816

「忠治公御譜中」

「案書寫有之」

日本國薩隅日三州太守藤原忠治奉復　緬望福地、瑞氣日新神徹森嚴尊候安泰至祝至禱、抑我國以貴國爲善隣焉、實非他國之可比量者、時義近出于不意、而互絶音問者六年于茲、然使僧而年遠銜國命踰海來説以和好事、殊　天王東堂所傳　貴命、委曲領之、愚意趣具復白于和尚、見達尊聞者欠、仍差安國住持雪庭西堂、述回禮之義、以獻方物表微志而已、專願自今以後、不帶我印判往來商人等、一々令點檢之、無其支證輩者、船財等悉可爲　貴國公用、伏希此一件無相違、永々修隣好、而自他全國家者也、暮春過半　順時保重、誠惶恐誠敬白、

日本永正伍年三月十二日　　藤原忠治

奉復琉球國王殿下

1817

「忠治公御譜中」

「案書寫有之」

薩隅日三州太守藤原忠治

奉書

琉球國王殿下

茲継先業於下國職未遑、達京師早呈片書於

中山王、專在修鄰好局、非比誠於傾陽之葵藿若、敢得齊

齡於閲歳之松柏乎、四海所歸一國以富盡善盡美、惟徳

馨故、今差安國住持雪庭西堂、謹致賀忱獻方物、伏望寛容、恐惶頓首、不宣、

永正五年三月十二日　　藤原忠治

拜呈

琉球國王殿下

1818

「見于田布施金藏院由緒書出」

一御本尊十一面并脇士不動明王昆沙(ママ)門天王

右、忠幸公永正五年御建立、

寛文十年ニ　綱久公御再興、

1819

「國史　巻十三」

蘭窓公名忠治、圓室公之子也、幼字安房丸、稱又三郎、法名蘭窓津友、津友寺殿、

永正六年己巳、事缺不書、

七年庚午、是歳薩隅日三州大亂、據福昌寺年代記、公十月二十日賜北郷源左衛門尉書曰、嘉乃戰功、蘭窓公舊譜、以為疑此年書、今姑從之、附録於此、島津支流系圖、讃岐守敏久第四子信濃守久隆、初稱源左衛門、豈此人乎、

八年辛未秋八月十四日、故幕府足利義澄薨、法名清晃、號法住院、據將軍家譜、冬十二月二十九日、　公賜種子島武藏守□時書、賞其戰功、許以百町之地、□時、清時之曽孫也、據蘭窓公舊譜、種子島藏人系圖、種子島清時見第八巻應永十五年、公正月二十日賜澁谷彈正少弼書曰、嘉乃戰功、二月二十六日賜肝付越前守書曰、近募兵衆、將有事於山北南方、若得卿等相助、事必濟矣、二書無年、姑附於此、

1820

「櫻島池田氏藏年代記」

一永正六年五月十五日、向嶋御嶽金ノ鉾、福昌寺十一世天祐立之、

1821

渡唐船之事致警固、於自然儀者、無疎略者可爲神妙、仍太刀一振・刀一腰遣之候、巨細猶大内左京太夫(義興)可申候也、

十月十日

嶋津陸奥守とのへ

「右、見于御内書案文永正七年」

1822

「忠治公御譜中」

「正文在北郷殿都城北郷源左衛門」

態令啓候、仍今度之弓箭別而得懇志候、感悦之至候、殊毎々諸邦へ走舞入魂之儀、向後不可有忘脚(却)候、恐々謹言、

「朱カキ」「永正七年欠」十月廿日　　忠治(花押)

北郷源左衛門尉殿

「上包」

北郷源左衛門尉殿　　忠治

1823

「新納忠勝譜中」

「正文在新納三河忠徳入道楚弓」

新納四郎殿就嫡男出來候、爲厥御祝儀、從　屋形様御博士御給候、彼御太刀之事、赤松殿御重代候、竹田法眼三ヶ國下向之時、嶋津殿被進候、別而御給候、御使者河田彦左衞門尉殿、此等之儀爲後代書注也、

于時永正七天十月吉日

伴兼利（花押）

筆者

「上カキ」

「於御家引付」

1824

「正文在大乘院」

龍嚴寺坊津、莊嚴寺伊集院、大興寺鹿兒嶋、門徒一味契約事、

一莊嚴寺之開山者、良範法印、同二代号精範僧都、爰龍嚴寺第五代之祖賴憲法印者、精範之舍兄也、依之良範・賴憲堅令約諾、俱成師資之契約、兩師相互令法流相承給、是偏以門徒一味之儀、未來永々互法流可有扶助方便之契約也、然賴憲高野御住山第三度目也之時、精範依有高野參詣之立願之子細、令同道登山、立願成就之後、下向根來寺宿坊寶持院、令他界訖、其終焉之砌、莊嚴寺之事、後々可爲賴憲法印之御進退之由、以精範自筆書讓狀進上賴憲、其狀于今龍嚴寺在之、依之賴憲下向之後、莊嚴寺之事數か年令進退、其後以彼寺令付屬覺盛法印、從其已來、于今彼弟之相續而無退轉、任開山之本意、守法流門葉繁昌、

一伊集院衆徒中、各以莊嚴寺可被仰本寺事、

夫諏訪原其外之者、皆良範・精範之爲弟子分、在々所々獨住、就　立久之御代、以彼方之被集諏訪原之一所、令建立十二坊給旱、去間皆以莊嚴寺之門流也、於末代不可背此旨、縱自他所雖有來住方、以莊嚴寺可被仰本寺、其故者、入所隨所事是世間常掟也、敢不可有吳義、門弟等堅守代々血脉相承之旨、不可乱門徒法度、

一伊集院衆徒中、於傳法灌頂・曼荼羅供・御影供者、如前々、以莊嚴寺之本堂可定會場、更於別所不可被構道場、是偏崇祖跡、爲令法流敬重也、更非結界壇地之道場、何輒儲法莚乎、或構堂社、或料理私宅、開蜜壇事、輕賤之義皆以法滅之因緣也、努々堅可有禁制、

一大興寺者御屋形様忠治之御代仁号大覺寺殿、義昭大僧正之御菩提所建立之伽藍也、龍嚴寺坊津賴憲法印之時、

弟頼政之開山也、然則於良範之御法流者、良範・頼憲・頼政次第相承明鏡也、依之於彼三ヶ寺者、後々末代以門徒一味之義、堅可有門中法度之成敗、若於違乱輩者、顯蜜之法會俱以不可有會合、仍三箇寺衆徒中、令同心追加掟如件、

永正七年庚午十月廿九日

權大僧都法印頼政（花押）

一見候了（花押）「忠治」

1825

「忠治公傳」

一永正七年庚午十二月二十三日、　公娶伊東大和守尹祐之女、（母阿蘇氏、見伊東譜）爲夫人、　公乃使本田又次郎納聘焉、（見落合若狭入道自記）尹祐使其臣垂水隠岐守受之、

1826

「案文有之」

忠治様御代御寄合座躰

（本文書ハ一七九一号文書ノ前半ト同文ニツキ省略ス）

於其座ニ御屋形様江新納江州より鷹御進上候、

「已下略ス、享禄二年ノ場ニ寫入置也」

1827

「正文在入來院石見重頼」

先度松圖（『松本図書亮ト云アリ』）所まて、有方物語之子細、逐一内儀承候、誠以不知所謝候、以面如申候、悉皆諸篇憑存候由申之上者、世間之人莵角可申扱儀者、被免我々、弥不閣意見可承事、祝着本望不可過之候、次此間者、御氣分不甲斐之由承候、迷惑無申計候、能々養生偏可爲我等爲候、何様來春者、目出早々參會申、心事滿足之儀候、恐々謹言、

十二月廿一日　（『島津氏十二世也』）忠治（花押）

澁谷（重聰）彈正少弼入道殿

（上書）澁谷殿　忠治

1828

『入來院氏文書』

改年之御慶、千吉万祥、雖事舊候、猶更不可有盡期候、珎重々々、抑今度之弓箭之事、別而憑入之由申候之處、被勵懇志候、歡抃之至候、然者爲忠節之賞、隈城之事可進候也、仍證狀萬幸之賀事、恐々謹言、

正月廿日　忠治（花押）

澁谷（重聰）彈正少弼入道殿

澁谷彈正少弼（「包カミ」）入道殿　忠治

「忠治公御譜中ニ永正八年欠トアリ」

1829

「忠治公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

至山北南方之間、此節相催軍勢可出張之由、年寄共へ申出候、然者各人衆被馳走候者、此刻一途可達本意候事案中候、一段被抽忠節候者、可爲喜悦候、恐〻謹言、

「朱ニテ」

「永正八年カ」二月廿六日　　忠治（花押）

肝付越前守殿

1830

「國分宮内澤氏藏」

權執印職支

御前法橋永觀

右——

永正八年二月七日

石清水八幡宮惣検校權大僧都法印大和尚位判

1831

「御文庫拾六番箱一巻中」

識鷹秘訣集序

薩隅日三州之太守藤原朝臣　忠治賢主、内隠仁徳、外顯忠孝、性常好鷹、擧人靡弗獻焉、夫鷹者、在南爲鶴、在北爲鷹、魏曹操曰、鷹飢則爲用、飽則颺去、於茲論鷹之骨相、則處鞲者（タカダスキ）、颯爽而動秋骨、翮如劔、爪似鈎、其眼類明星、又似電光、其利吻可碎龍泉之鋒、當此時而怪狐猛獸命掛糸、下鞲則猛氣神俊、頸毛振雪、必有凌雲之志、或日將晡之時、乗良馬臂鷹而出于原野、則其鷹攫身以欲攫狡兎、側目而似愁胡面、脱臂則飜身而摩雲霄、指呼則又飛歸而刷（ハヅクロイ）矣、或時過鳥道擊飛禽而下、或墮山梁以逐雌雉、入草而挫之、倏忽毛血灑平蕪、俊狗爲之疾走而欲咬其肉、呼蒼鷹云〻、豈比彼鴟鳶之嚇腐鼠之類乎哉、宜乎　太守之好而爲樂矣、昔楚王有名鷹、俄而雲際一物翺翔飄颻、其鷹竦翮升、須臾而羽毛墮如雪、血灑如雨、其鳥翅之廣數十里也、博洽君子曰、是大鵬之雛也、此豈非鷹之妙用不思議乎、又有劉表、好鷹以築鷹臺、常登而歌野鷹來之曲也、或張翰自字稱季鷹、喚蘇味道、譬九月之鷹也、由英氣神俊、是故吾　太守亦造次顚沛無忘鷹也、遂爲諳鷹之根本、博考古書、集成編以爲九巻矣、是皆眞丹吾朝用鷹之故事也、蓋鷹之根本者、凡出于經論云〻、西天常勝天王之夫人夢、世自在王佛用金玉一顆、銀玉一顆、金箸一雙、銀箸一雙、而与之、夢已覺矣、既而後王子誕生也、一日之中又生金玉之箸也、寧匪夢之奇瑞哉、然五日而金玉之中有白鳥、大王卽名梵鷹焉、又名臺勝焉、蓋箸鷹之

説明矣、彼王子并諸鷹者、即無量壽如來、觀音、勢至是也、由之觀之、　太守之所好實有以矣哉、然則　太守之壽筭亦不可思量譬喩者欤、加之以文治國家、以武伏敵兵者、寔可如霜鷹搏無數之鳥獸而已矣、於是忝命僕令作序、以弁其端者也、因名此書曰識鷹秘訣集、以可傳千載矣、

時永正八年辛未孟秋下澣如意珠日

巣松判

「此秘訣集、忠昌公御譜中ニ在リ」

1832

「忠治公御譜中」

「正文在種子嶋三郎次郎久時」

就今度之弓箭、被勵懇志候、喜悦之至候、然者於三ヶ國中、自然之地百町、爲忠節之賞可宛行候也者、證狀如件、

永正八年十二月廿九日　　忠治（花押）

種子嶋武藏守殿（忠時）

1833

「國史　巻十三　蘭窓公」

九年壬申夏閏四月六日、　公賜禰寢大和守尊重（又五郎忠清更名尊重、稱大和守、）　書曰、揖宿院既係君家之舊、請俟事平、然後與之、（據蘭窓公舊譜、小松氏系圖、尊重、禰寢清平之孫、義天公賜清平揖宿郡鳴河村、見第八巻應永十八年、）

十年癸酉、事缺不書、

十一年甲戌春二月朔日、　公使本田參河守親安領大隅州山之地二十五町、其舊邑也、（據蘭窓公舊譜、）親安、兼親之子也、（據本田家總譜、本田兼親見上巻文明十五年、）秋九月十四日、　公講犬追物、冬十一月、十二月、講犬追物凡三日、（據蘭窓公舊譜、）

1834

『調所氏譜恒房傳』

永正九年壬申、間歲　蘭窓公命敷根某（疑備中守賴愛、）上井某（疑筑前守為秋、）戍阿多城、既又罷之時方恒房抱忠事、　公欲竢徵兵以戍陣塞、不苟避難、因松本圖書助（當時伊地知民部食菜姫木号松本氏、疑此也、）禀之國老、國老伊地知周防守重貞・本田因幡守兼親・桑田（波脱）讃岐守景元以聞　公、　公特嘉之、於是正月二十七日、（年紀無傳、姑置竢考、）重貞・兼親・景元承　旨、致恒房書以賀新年、尋使之發於來月初二日、三日、齎二旬糧、往戍阿多　命也、

1835

『仝文書』

又先度御祝儀之時、庄内へ人足共御立候、去年も南方へ御立、御辛勞共候、御悦喜之通、能ゝ申せと候、

仍五明一本進覧候、誠表祝儀計候、

改年之御慶重疊、雖申事舊候、猶以幸甚ゝ、

抑松本圖書助殿まて、何方之御番にても候へ、御奉公として可有御立之由御申候、近來御悦喜之通被仰出候、然處阿多之御番之事、敷根殿・上井殿可被立候之處、彼兩人者別而御用之子細候之間、不被罷立候、然者來月二日、三日之間、阿多へ可有御立よし被仰出候、依之態令啓候、日數廿日之用意たるへく候、恐々謹言、

正月廿七日　　(本田)兼親(花押)
(桑波田)景元(花押)
(伊地知)重貞(花押)

桑波田讃岐守
本田因幡守
伊地知周防守
重貞

(上書)(恒房)調所殿　御宿所

1836

「載本田親安傳」

雖不新、當代證狀大望之由候之間、加一筆所也、本田名字領地檢断事除之候畢、仍而狀如件、

永正九年壬申二月二日　　忠治(花押)

(兼親)本田殿

「御譜中、正文在本田甚兵衛トアリ」

1837

「在種子島嫡家」

一薩摩國指宿郡　門付坪付反畦付書略之、
一谷山郡和田名之内　右同断、
一臥蛇　一嶋

永正九年三月廿七日

(伊地知)重貞
(島取)政茂
(桑波田)景元
(本田)兼親

(忠時)種子嶋殿

1838

「忠治公御譜中」

「正文在禰寢右近重永」

指宿院之事先知行之上者、内々相談候辻、一途落居之時可宛行處也、早守忠儀、任先例、知行之時、不可有違儀候、恐々謹言、

「永正九年歟」
潤四月六日　　忠治(花押)

(尊重)祢寢大和守殿

「上包」
祢寢大和守殿　　忠治

1839
「川邊寶福寺文書」
三丈　　下たしろ
同　　屋敷
永正十年癸酉正月吉日
熊峯　　加治木久恒御判
新きしん

1840
「河邊玉泉寺寄進状」
奉寄進
河邊平山村之内寺前水田、つゑ物玉泉寺ニ岩下助右衞門尉永代をかきり不申、寄進申候、若子孫又ハ他のさまたけ候する時ハ、此状ニまかせ御知行あるへし、仍寄進状如件、
永正十年酉（ミつのとの）二月彼岸日

1841
「後於都城笠懸ノ日記」
笠懸射書

嶋兵	○	○	○	●	○	○	●	○	●	○	七						
嶋太	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	九						
嶋將	○	○	●	○	○	●	○	●	●	○	六						
嶋民	○	○	●	○	○	○	○	○	○	●	八						
嶋源	●	○	○	○	○	○	●	○	○	○	九（ママ）						
嶋右	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	六						
嶋又	○	●	○	○	○	●	●	○	○	○	七						
嶋三	●	○	○	○	○	○	●	○	●	○	七						
嶋六	○	●	○	○	○	○	○	●	○	○	八						
嶋左	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	九						

永十七廿五

1842
田布施野崎名之内
十石薗之門　　田數二町
廿貫文ニ賣渡し申候、
三年分子ノ歳、本錢以廿貫文ヲ請可申也、仍狀如件、
永正十年癸酉八月廿一日
一瓢（運久）（花押）
坊ノ津
智德院

「上包」
坊津智徳院　一瓢
「此御書、相模守連久譜中ニ在リ、正文在坊津一乗院トアリ」

1843
「一乗院文書」
田布施之内十石薗門代物
合貳拾貫文者、
与三方右衛門六　兩人
渡進し候、
永正拾年八月廿一日　智徳院　頼眞判
鎌田壹岐守殿
鮫島土佐守殿

1844
『阿久根大固寺文書』
薩摩國阿久根之院
水田坪付
一壹町三段　栗村門
一六町(段カ)卅　折尾門
一九段　長田
一貳段　久留主
以上三町卅
永正十年十月吉日　『薩州家四代』忠興印

1845
「載本田三河守親安傳」
一永正十一年甲戌二月朔、　忠治公賜二十五町於隅州山之地之内、舊邑故也、

1846
大隅國山之地之内貳拾伍町之事、依爲由緒之地、宛行所也、早任先例、可令知行之状如件、
永正十一年二月朔日　忠治(花押)
本田(親安)参河守殿
「忠治公御譜中ニ在リ」

1847
「仝」
一忠兼公賜父因州(本田兼親)曽於郡時、　公之執事本田二郎左衛門尉親尚(久兼之五代孫)、沮之、　公由是収曽於郡、親安父子恚之不朝、惡親尚猾邦内也、

1848
「貴久公御譜中」
「日新斎子女」(朱カキ)

女子
肝付河内守兼續室
女子
樺山安藝守善久室

十六代
貴久
虎壽丸　又三郎　三郎左衛門尉　修理大夫　從五位下　陸奥守　齊稱伯囿、
永正十一年甲戌五月五日誕生、父相模守忠良法師日新齊(斎)、母島津薩摩守重久女也、

1849
『調所氏譜恒房傳』
永正十一年甲戌　公命國老、割田五段於曾於郡薦之守公神、乃九月五日、國老伊地知縫殿助重周・桑波田讃岐守景元・鳥取播磨守政茂・伊地知周防守重貞・本田因幡守兼親裁之坪付、以授恒房、凡祭田係調所氏先例也、

1850
『全文書』
奉寄進
守公神　坪付
大隅國曽於郡之内

四反(うち水中台一反)　八反田
松木田
以上五反
永正十一年九月五日
本田因幡守兼親
伊地知周防守重貞
鳥取播磨守政茂
桑波田讃岐守景元
伊地知縫殿助重周

1851
「忠治公御譜中」
「在志布志士阿多飛彈忠縣」
犬追物手組　永正十一年九月十四日
殿　十二疋
伊地知縫殿助　二疋
加治木又八郎　二疋
竹田藤次郎　三疋
嶋津塩鍋丸　一疋
嶋津又六郎　七疋
加治木筑前守　五疋
嶋津十郎　三疋
長野豊前入道　二疋
本田刑部少輔　一疋

嶋津宮房丸　九疋　　嶋津三郎四郎　二疋
検見　　喚次
嶋津十郎左衛門入道　　「嶋津能登守イ」大寺宗左衛門尉
於鹿兒嶋殿中蘭窓御代初而之御犬追物手組

1852
「正文有之」
犬追物手組事　永正十一年十一月十四日
殿　　嶋津又六郎殿
竹田藤次郎　　廻兵部少輔
平田右馬助　　加治木又八郎
石井中務少輔　　税所左衛門尉
嶋津塩鍋丸　　嶋津能登守
嶋津三郎太郎殿　　嶋津宮房丸
検見　　喚次
嶋津十郎　　鎌田勘解由

1853
「正文在之」
犬追物手組事　永正十一年十一月十九日
殿　　嶋津三郎太郎殿
吉田若狭守　　嶋津能登守

竹田藤二郎　　石井中務少輔
平田右馬助　　嶋津十郎
税所左衛門尉　　廻兵部少輔
嶋津又六郎殿　　嶋津宮房殿
検見　　喚次
伊地知周防守　　飛彈源二郎

1854
「正文有之」
犬追物手組事　永正十一年十二月九日
殿　　嶋津宮房丸
嶋津左衛門督　　嶋津塩鍋丸
税所左衛門尉　　嶋津源左衛門尉
竹田藤次郎　　石井中務少輔
本田三河守　　伊地知新左衛門尉
嶋津尾張守　　吉田若狭守
検見　　喚次
嶋津豊後守殿　　嶋津十郎

1855
「國史　巻十三　蘭窓公」
十二年乙亥春二月七日、講犬追物、據蘭窓公舊譜、初櫛間屢有妖

怪、民間相驚以爲大覺寺殿爲之、於是乎、美作守藤原直久構祠於櫛間而祀焉、島津忠朝因神祇官兼倶、求位號於天朝、賜號福島大明神、妖怪漸熄、（據大興寺所藏福島大明神緣起、島津支流系圖山田氏譜、忠朝、忠廉之子、忠廉為飫肥櫛間領主、見上巻文明十八年、黒木家臣日置越右衞門・川邊人日置藤左衞門系圖文書、島津豊後守季久娶於日置助左衞門久儀之女、而久儀生美作守忠鑑、忠鑑生美作守久遂、忠鑑事豊州家、為飫肥櫛間總奉行、而福島大明神由緒書、有院故有司美作守、由是觀之、構祠祭大覺寺殿、疑是忠鑑若久遂、而其事不見系圖、系圖又無美作守直久、則其人果為日置氏與否、不可得而考也、久儀、伊集院□國第三子日置美作守久影五世孫也、福島即櫛間）至　公復立大興寺於鹿兒島、以爲大覺寺殿菩提所、（據蘭窓公舊譜、島津支流系圖山田氏譜、公立大興寺、其年不詳、但權大僧都法印頼政永正七年十月二十九日門徒契約書曰、蘭窓公建大興寺、以資大覺寺殿冥福、按公即位在永正五年、則大興寺立、蓋在永正五年以後七年以前矣、大興寺在府城東北半里許、菩提梵語猶華言正道、然和俗稱菩提所、猶言薫福所、不必依菩提本義也、）夏六月七日、又以某地爲大興寺領、（據蘭窓公舊譜、）秋八月二十五日、公薨、年二十七、葬吉田津友寺、（據島津系圖、廟堂要覽、）無男、弟　興岳公爲後、　興岳公生於明應六年丁巳、（母大友氏、見上巻永正五年、）是歲年十九襲封、（據興岳公舊譜、）

1856

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」

初日一番

犬追物手組之事　永正十二年二月七日

「太守忠昌公御嫡」殿忠治公　九疋　「忠昌公二男」「忠隆」嶋津又六郎殿　十八疋

廻兵部少輔　二疋　税所左衞門佐　十七疋

石井中務少輔　九疋　嶋津塩鍋丸　五疋

桑波田孫六　一疋　伊地知又七　五疋

肝付三郎五郎　一疋　本田刑部少輔　五疋

加治木又八郎　十四疋　本田三河守　三疋

「忠昌公三男」「忠廉」嶋津宮坊丸殿　三疋　伊地知周防介　四疋

検見　喚次

「川上」嶋津拾郎左衞門尉　大寺駿河守

「初日一番ノ分、忠治公御譜中ニ在リ」

1857

初日二番

同手組　同日

殿忠治公　「忠隆」嶋津又六郎殿

廻兵部少輔　税所左衞門佐

石井中務少輔　「吉利」嶋津三郎九郎

桑波田孫六　伊地知又七

肝付三郎五郎　本田刑部少輔

加治木又八郎　平田五郎左衞門尉

「忠興」嶋津三郎太郎　「大田」嶋津中務少輔

検見　喚次

「川上」嶋津十郎左衞門尉　大寺駿河守

1858

「正文在楞嚴寺」

「ウラ」「楞嚴寺寄進状」　「ウラ」「祐冨」

奉寄進　隅州清水楞嚴寺姫木森山之下まさう田一段之事

爲祐冨老没後世菩提也、本文書相添進上申候、何時も本主被請候ハんする時者、前之田地めされ候て可被吊後世者也、仍爲後日狀如件、

永正十二年乙亥二月十五日　祐冨(花押)

1859

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」

安永にて

犬追物手組事

近江守殿　七疋　　嶋津八郎殿　六疋

嶋津兵庫丞　十疋　　嶋津源左衞門尉　十疋

嶋津左衞門尉殿　十一疋　　嶋津六郎　五疋

嶋津千代若殿　十二疋　　嶋津左近將監　十疋

嶋津安藝守　四疋　　嶋津民部少輔　九疋

羽嶋越前守　五疋　　嶋津右衞門尉　五疋

太郎左衞門尉殿　七疋

検見　　喚次

豊後守殿

永正十二年四月一日

「新納近江守忠勝譜中ニ在リ、正文有之トアリ」

1860

「正文在大興寺」

薩摩國鹿兒嶋郡大興寺之事

右、件之寺者、征夷大將軍義持御舎弟大覺寺殿於日州櫛間院御下向之事、至天下無其隱云々、于爰曽祖父陸奥守忠國依爲京都之御下知難儀、于時嘉吉元年辛酉三月十三日、御年卅七、不慮之計無是非次第也、然處爲其子孫銘其恐肝、故奉請　勅號、權大僧都法印頼政定開基始祖、號大覺寺殿御菩提所、令建立大興寺旱、然者爲忠治子孫者可存此旨、仍寺領在別紙、至彼地萬雜公事諸役等、皆以可有停止者也、況於他之妨哉者、證狀如件、

永正十二乙亥六月七日　　忠治(花押)

「右ノ證状、忠治公御譜中ニ在リ」

1861

「御譜中」

永正十二年乙亥八月廿五日、忠治公逝去、年廿七、法名津友號蘭窻、津友寺殿、

自永正五年戊辰至永正十二年乙亥、八ヶ年治國也、

永正十二年、忠隆公十九歳爲守護職、「任御譜中」

1862

「山田忠尚譜中」

永正十二年乙亥、　太守又三郎忠治公島津莊内薩摩方麗島郡建立梵宇、號大興寺、令權僧都法印賴盛定開基始祖、爲大覺寺大僧正菩提所、是又曾祖父陸奥守忠國奉　大樹之命、忽弑於法體、迄於子孫、其恐銘於心肝、故如斯云云、詳在于寄進狀、

1863

一永正十二年、　忠隆公十九歲爲守護職、

1864

「正文在福昌寺」

玉龍山福昌寺定法之事、元久草創以來既誓狀有之上者、可守先例之外無他事、然處至忠隆代而、國家怨敵之族、一旦憑寺家而罷出之刻、慮外之狼籍出來、無是非次第也、但非自身之發起、雖然手之者所行之企所歸一身欤、迷惑不過之、於茲重而進一筆者也、然者至福昌寺末寺末庵、縱雖大犯三ヶ條之者、走入不可及刃傷之儀、況於于本寺〻領等哉、已如此悔先非以申出之所、若背此旨輩者、不可爲忠隆子孫之至孝者也、仍爲後日之狀如件、

永正十二年拾一月廿七日　　忠隆(花押)

進上　福昌寺
侍衣禪師

「上包」
進上　福昌寺
侍衣禪師　　忠隆

1865

「國史　卷十四　興岳公」

興岳公名忠隆、蘭窓公之弟也、幼字百房丸、稱又六郎、法名興岳龍盛、龍盛院殿、

永正十三年丙子春三月二十八日、備中蓮島或作連島、住人三宅和泉守國秀、欲取琉球、率舟師泊坊津、鬪艦凡十二艘、公欲擊之請於幕府、許之、據興岳公舊譜、島津系圖、入來院主馬家藏年代記、第十二卷永正五年將軍義澄罷、義尹復任征夷大將軍、此云幕府即義尹也、島津系圖以為義澄誤也、夏四月二十五日、琉球使者天王寺僧某・謝那大屋子來、據興岳公舊譜、福昌寺年代記、六月朔日、公擊三宅國秀殺之、據興岳公舊譜、島津系圖、入來院主馬家藏年代記、七日、公講犬追物、秋八月、九月、講犬追物凡三日、據興岳公舊譜、冬十二月二十日、琉球使者建善寺僧某等來、據興岳公舊譜、福昌寺年代記、十四年丁丑春二月十二日、福昌寺年代記作十一日、公攻吉田若狹守位清於吉田城、十四日、吉田納右衞門系圖作十五日、位清以城降、位清、孝清之子也、據興岳公舊譜、福昌寺年代記、吉田納右衞門系圖、吉田孝清見第十二卷文明十七年、吉田城遺墟在吉田鄕地頭館西八町餘、東佐多之浦村、係

十五年戊寅夏五月十一日、遊行上人稱愚來、據興岳公舊譜、遊行上人歷代小傳、

十六年己卯夏四月四日、　公薨、年二十三、無男、據島津系

圖、廟堂要覽、隆盛院有興岳公石塔、福昌寺界内西面有興岳公闍維遺跡、初　大翁公出爲顯娃氏嗣、至是入爲　興岳公後、　公生於文亀三年癸亥、母大友氏、見第十二巻永正五年、是歳年十七襲封、據島津系圖、大翁公舊譜、顯娃左京系圖、大翁公為兵部少輔兼友嗣、兼友、兼心之孫也、兼心見第十二巻文明八年、按大翁公生於文亀三年、是歳為興岳公嗣、年十七、而兼友生於享禄二年、在是歳之後、則顯娃氏系圖云云、其説妄矣、而島津系圖・舊譜、止言為顯娃氏嗣、今從之、冬十一月二十七日、伊集院尾張守擧兵反、據曽於郡城、十二月八日、新納忠武遣兵助之、大翁公遣肝付三郎五郎兼演等、擊尾張守、兼演、兼光之孫也、據大翁公舊譜、肝付典膳系圖、肝付兼光見第十二巻永正三年、曽於郡城即橋木城、見第五巻建武四年、是歳三州大亂、據大翁公舊譜、

1866

『調所氏譜恒房傳』

永正十三年丙子正月二十日、留守所下政令三章於諸郷院如例、

1867

『仝文書』

留守所下　　諸郷院

仰下　　參箇条

一可任例勤行佛神支等事

右、治國之法、佛神事爲先、尤致礼具、可勤行、

一可修固池溝築堤事

右、初春要池溝堤爲宗、尤可修固、

一曳殖苧桑柒等事

右、治務之道、苧桑柒爲要、尤可曳殖、

以前參箇條、任下知之旨、可致沙汰狀如件、

永正十三年正月廿日　　大中臣篤則(花押)

權大拯

1868

「山田河内守忠豊譜中　初式部少輔」

「正文在山田七郎右衛門久通」

犬追物手組事

左衛門佐殿　十三疋　　次郎三郎殿　六疋

嶋津左馬助　十六疋　　嶋津助四郎　七疋

嶋津六郎　二疋　　嶋津治部少輔　八疋

澁谷太郎次郎　十疋　　梁瀬源五　七疋

嶋津六郎三郎　二疋　　羽嶋新三郎　五疋

嶋津式部少輔　四疋　　平田平三郎　七疋

四郎殿　十二疋

検見　　喚次

嶋津兵庫丞　　嶋津藏進

永正十三年三月十三日

1869

「山田忠豊 治部少輔 譜中」

犬追物手組事

近江守殿　四疋　　豊後守殿　八疋

四郎殿　十疋　　嶋津式部少輔　三疋

嶋津次郎三郎　十三疋　　嶋津治部少輔　五疋

嶋津六郎　五疋　　羽嶋越前介　六疋

嶋津左馬助　十一疋　　嶋津助四郎　二疋

嶋津六郎三郎　二疋　　平田平三郎　十一疋

澁谷太郎次郎　七疋　　梁瀨源五　一疋

左衞門佐殿　十二疋

検見　　喚次

嶋津兵庫丞　　嶋津藏進

永正十三年三月十六日

1870

「年代記」

一永正十三年丙子四月廿五日、琉球國文船(アヤフネ)着岸、使僧天王寺、使者謝那大屋子云云、

1871

「仝」

一同年備前國蓮島三宅和泉守誘十二艘之兵船、爲責琉球國、而先着薩州之坊津、俟時之宜留滯者久矣、此事既達上聞、故蒙三宅誅罰之命、誅戮者也、

1872

「仝」

一同年、又琉球國使船二艘着岸、使僧建善寺、使者西殿云々、

1873

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」「忠隆公御譜中ニ無之」

手組　永正十三年五月廿八日

「樺山」嶋津太郎左衞門尉　　吉田若狭守

「川上」嶋津助六　　本田三河守

税所左衞門佐　　本田刑部少輔

桑波田孫六　　伊地知又七

加治木刑部少輔　　平田五郎左衞門尉

廻兵部少輔　　肝付三郎五郎

「志和地」嶋津源左衞門尉　　「迫水」嶋津又七郎

検見　　喚次

加治木筑前守　　伊地知四郎左衞門尉

1874

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」「此手組御譜中ニ無之」

初日一番

手組　永正十三年六月一日

「忠昌公二男」殿忠隆公

廻兵部少輔　「川上」嶋津左衛門尉

加治木筑前守　肝付三郎五郎

伊地知又七　加治木刑部少輔

平田五郎左衛門尉　桑波田孫六

石井中務少輔　本田刑部少輔

「川上」嶋津拾郎左衛門尉　「志和地」嶋津源左衛門尉

「樺山」嶋津太郎左衛門尉　「迫水」嶋津又七郎

検見　喚次

吉田若狭守　大寺駿河守

1875

初日二番

同手組　同日

「樺山」嶋津太郎左衛門尉　吉田若狭守

「川上」嶋津助六　本田三河守

税所左衛門佐　本田刑部少輔

廻兵部少輔　桑波田孫六

石井中務少輔　伊地知又七

加治木刑部少輔　平田五郎左衛門尉

「志和地」嶋津源左衛門尉　肝付三郎五郎

「川上」嶋津左衛門尉　「迫水」嶋津又七郎

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　伊地知四郎左衛門尉

「忠隆公御譜中此一通アリ」

1876

「山田忠豊譜中」

犬追物手組之事　永正十三年六月一日

嶋津左衛門尉　吉田若狭守

嶋津助六　本田三河守

税所左衛門尉　本田刑部少輔

廻兵部少輔　桑波田孫六

石井中務少輔　伊地知又七

加治木刑部少輔　平田五郎左衛門尉

嶋津源左衛門尉　肝付三郎五郎

嶋津太郎左衛門尉　嶋津又七郎

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　伊地知四郎左衛門尉

1877

犬追物手組之事　永正十三年丙子六月七日

殿御代初而十三代忠隆公　廿四疋

廻兵部少輔　三
加治木筑前守　八
伊地知又七　四
平田五郎左衛門尉　五
石井中務少輔　三
嶋津十郎左衛門尉　四
嶋津太郎左衛門尉　六
嶋津左衛門尉　十一疋
本田三河守　四
肝付三郎五郎　四
加治木刑部少輔　四
桑波田孫六　三
本田刑部少輔　七
嶋津源左衛門尉　四
嶋津又七郎　四

検見　喚次

吉田若狭守　大寺駿河守

「此手組、忠隆公御譜中ニ在リ、在山田七郎右衛門トアリ」

1878

「正文在清水楞厳寺」

「ウラ」「寄進状」　「ウラ」「了厳寺」

社家之大工の所領（「大工田」）むけ大門口一町の内東ニ付て二たん、大工藤次郎の手より、清水石塚八郎さへもんし地けん申候を、志として了厳寺へ寄進申候、本物ハ字大鳥九貫文・洪武二貫文・米一斗にて候、何時も本主としてうけ候する時者、石つか次郎さへもんれうこん寺まいりあひ候て、本物をうけとり申へく候、若彼所領ニ付候て、吳儀違乱申候する時ハ、石塚の子孫ニをひて其沙汰可（ママ）至候、少分の志にて候へ共、かの所領の事かたく覺悟めされへく候、仍爲證文寄進狀、

永正十三年八月廿六日　石塚八郎左衛門尉種延（花押）

1879

「忠隆公御譜中」

「正文在吉田次郎兵衛為清」

犬追物手組事　「朱カキ」「永正十三年」「本マヽ」

嶋津殿　吉田若狭守

廻兵部少輔　石井中務少輔
本田三河守　伊地知又七
桑波田孫六　平田五郎左衛門尉
税所左衛門尉　加治木刑部少輔
嶋津左衛門尉

検見　喚次

嶋津十郎左衛門尉　加治木筑前守

1880

「在山田七郎右衛門久通」

犬追物手組之事　永正十三年八月廿九

殿　廿三疋　嶋津豊後守　七疋
肝付又八郎　五疋　税所左衛門尉　三疋
本田參河守　二疋　伊地知又七　四疋
嶋津太郎左衛門尉　二疋　吉田若狭守　八疋
嶋津三郎衛門尉　六疋　嶋津近江守　五疋
検見　喚次
嶋津十郎左衛門尉　大寺駿河守

1881

「忠隆公御譜中」
「寫在喜入摂津介」

犬追物手組事　永正十三年九月一日

殿　廿四疋　嶋津三郎左衛門尉　四疋
嶋津太郎左衛門尉　四疋　肝付又八郎　四疋
竹田山城守　二疋　加治木刑部少輔　五疋
本田刑部少輔　七疋　肝付三郎五郎　五疋
嶋津又七郎　八疋　税所左衛門尉　五疋
嶋津左衛門尉　十二疋　吉田若狭守　六疋
嶋津豊後守　六疋　嶋津四郎　六疋
検見　喚次
嶋津十郎左衛門尉　平田五郎左衛門尉
於鹿兒嶋

1882

「同御譜中」
「在山田七郎右衛門久通」

犬追物手組事　(ママ)永十三年九月十日

殿　廿六疋　嶋津四郎　七疋
吉田若狭守　十二疋　伊地知周防入道　五疋
嶋津十郎左衛門尉　四疋　肝付三郎五郎　三疋
平田五郎左衛門尉　七疋　伊地知又七　四疋
税所左衛門尉　八疋　本田刑部少輔　八疋
嶋津又七郎　四疋　嶋津助六　二疋
嶋津豊後守　三疋　嶋津左衛門尉　六疋
検見　喚次
嶋津近江守　伊地知四郎左衛門尉

1883

「見年代記」「御譜中」

一永正十四年丁丑二月十二日、忠隆攻吉田城、同十四日庚申、令降參、戌刻城門之捧蟬鑰、領納之也、同十七日、祝泰平於内城畢、

1884

「宮里系圖」

一末吉宮里系ニ孫太郎正豊、永正十四丁丑二月十二日、隅州吉田犬馬場於折目合戰、面目ヲ給ソロ、又云、御屋形忠隆之御代ニ、本名字宮里と御上意ソロ、

1885

「忠隆公御譜中」

一同年連歌宗匠宗碩法師、下向于當國、天假良緣、獲遂識荆之願、是以忠隆古今集之爲傳授給、陪其席者、上下共五人耳、

1886

『入來家臣田中氏藏』

坪付

大隅國吉田院

宮之浦名一ケ所　屋敷小薗

卅　つゐかさね

卅　岩下

十　宮の脇

六反卅　ひの口

一反　わうはん田

本城名二反卅　くすの木か丸

以上一町一反卅

永正十四年
三月廿一日

『忠隆公御家老本田因幡守』兼親
『伊地知鎮殿介』重周
『桑波田讃岐守』景光
『伊地知周防守』重貞

萩野又左衞門尉殿

1887

「正文在大興寺」

薩摩國麑嶋郡大興寺之事

右、寺建立之旨意趣并寺領定法等之儀、去永正十二年六月七日、忠治之狀在之条、尤所庶幾也、然者至永代、可守此旨之外無他事、萬一於違乱之輩者、不可爲忠隆子孫之至孝者也、仍狀如件、

永正十四年丁丑八月廿七日　忠隆(花押)

「忠隆公御譜中ニ在リ」

1888

「御文庫廿一番箱犬追物一巻中」

初日一番

手組　永正十四年九月十五日

殿忠隆公

吉田若狭守

桑波田孫六

平田五郎左衛門尉

税所左衛門佐

「佐多」嶋津又太郎

検見

「川上」嶋津十郎左衛門尉

「吉利」嶋津三郎九郎

「寺山」島津越後守

石井中務少輔

「吉利」嶋津六郎

廻兵部少輔

嶋津塩鍋丸

喚次

加治木刑部少輔

1889

二日之二番

手組　同年九月十六日

殿忠隆公

廻兵部少輔

本田三河守

桑波田孫六

税所左衛門佐

「川上」嶋津左衛門尉

検見

嶋津十郎左衛門尉

吉田若狭守

石井中務少輔

伊地知又七

平田五郎左衛門尉

加治木刑部少輔

「吉利」嶋津三郎九郎

喚次

加治木筑前守

1890

「正文新納三河楚弓」「忠武譜中ニ在リ」

公方様至分國、就被遷御座候、被成　御内書候、尤御面目之至候、此時一段被抽忠節候者、可爲肝要候、此等之旨猶委細、被對伊東大和守被仰下候条、御相談可然候、萬端併期後信候、恐々謹言、

【永正十四五年ノ間歟】十二月十三日　（大内）義興在判

新納（忠武）近江守殿

「忠武之御代ニ下候也」

1891

『寫在楚弓』

公方様就於當國被遷御座之儀、被成　御内書候次第、左京太夫以別狀被申候、伊東和州被仰談、此節一段被抽御忠節候者、末代御名譽不可有比類候、就其御申之儀共候者、具被仰上、則可申達候、猶委細積門坊可令演説候之条、期後信候、恐々謹言、

【年号不知】十二月十三日　武道在判

新納（忠武）近江守殿　御宿所

杉勘解由左衛門尉

武道

「上包」新納近江守殿　御宿所

「新納忠武譜中ニ在リ」

1892

『福昌寺文書』

人民の事所賴候、

永正八年辛未六月、就　屋形出陣候夫丸十人立候札、當寺無如此之例、雖然折節國家飢饉以外候間、依且方迷惑而誘書狀、不可爲已後之例由被申候間、如此候、仍　忠治并愚老之書狀相副候て爲證文略之、不可爲後來例者也、

勅持賜智法左禪師(花押)

1893

『全』

妙谷寺之事、以爲

心巖和尚買地付與柱山和尚、其後泰雲和尚彼山付與僧、然則雖可傳愚老之末孫處、割以寄付本寺福昌寺早、可爲住持之進退者也、於已後若付与親煑之同宿一人事、不可有者也、於後代背此旨輩、不可爲開山和尚并野僧之子孫者乎、仍狀如件、

永正十五年戊寅正月十六日

勅佛智法照禪師天祐(花押)

1894

『全』

【天祐和尚辭世偈】

辭世

生來死去　十世古今

末後一句　枯木風吟

1895

「見于年代記」

一永正十五年戊寅五月十一日、廿三代遊行上人來着于麑嶋淨光明寺、同十九日、忽往生也、故同六月十日、所從遊行之士素共以發出於麑嶋也、

「忠隆公御譜中ノ文也」

1896

「正文在入來東郷兵右衞門家」

忠隆之御代　座敷

鹿兒嶋ヘ澁谷參上之時

主居	中居	客居
忠隆様	芋瀬入道	東郷弥次郎
入來院又五郎重朝	敷久	桛山藝州入道長久
伊地知周防入道		祁答院又次郎重武
高城秋月		高城珠全

伊知地縫殿助（マヽ）

1897

「阿多上宮能野權現ニアリ」

一御鏡　竪横貳尺七寸方鍮銘　一面

但本尊弥陀左右花立眞鍮作花有

右裏板ニ

大願主嶋津藤原朝臣子孫繁昌忠幸、大日本國薩摩阿多（右）

郡上宮權現一宇、永正十五年戊寅五月廿一日、但忠幸公

御自筆と申傳候、

1898

『入來家臣東郷善兵衛藏』

永正十五年戊寅七月廿八日

諏方座敷之事

又五郎殿（重朝）　伊集院殿

岡本殿　「東郷」左馬助殿

大膳亮殿（村尾）　山口殿

市來殿　宮里殿

田代殿　「入来」治部少輔殿

横大路殿　原口殿

木場殿　柳田殿

水平殿（手）　「種田」新右衛門殿

渡角殿　有川殿

萩殿　田口殿

「種」五郎二郎殿　「今村」右京殿

嶋殿　長野殿

1899

「忠隆公御譜中」

「案文有之」

抑

謹令啓候、

天王和尚并建善寺爲御使節、遙預光儀候、尤當年可致回

礼候之處、國家未調之間、先〻就對馬守罷下候、以書狀

怠慢之通令申候、如何様來春以使僧彼是可申述候、將又

進物之分別副有之、以此趣、可被達閣下候、恐惶敬白、

永正十五年戊寅九月廿二日　忠隆

進上　琉球國王閣下

1900

家親　泰平諸人快樂故奉造立旨如件

永正十五年戊寅九月廿七日

結緣衆等　大勸進大工折田年兼　小工

大願主帝釋天王　古意藤者奉爲天王地久御願圓滿殊者信心大植那等願主當祝鍾吉

大植那大梵天王　大植那鳥津摩羅守忠興　信心施主中原久志

奉造立愛宕山界雨露部州久志浦九天大明神一宇　豊秉天中天　伽陵頻伽聲　衆生者　我等今敬礼

1901

『調所氏譜恒久傳』

永正十五年戊寅十月、前此、　圓室公使島津豊後守忠朝、攻串良城陷之、而賜忠朝串良、忠朝乃使其叔父平山越後守忠康戍之、（豊州譜、肝付譜、為明應四年四月事、為永正五年正月事、）平山氏之於恒房也、本同其祖、故此月十五日、忠康與恒房書修舊好也、既而忠康卒、其子左衞門尉近久嗣、居串良城如忠康時、於是乎、（年月無傳、類記于此、）恒房及弟九郎兵衞尉恒男訪近久於串良城、饋近久（所謂金吾此也、）太刀一腰・馬代二百疋、其子久丘（所謂又次郎此、）行安造刀、近久亦饋恒房甲及太刀、其他贈答有差、不悉書也、

1902

『同文書』

調所名字之事、爲平山同家之由、前代有其謂云々者、任由緒之旨、不可及餘義之狀如件、

永正十五戊寅
十月廿五日　　平山越後入道忠康在判

（恒房）調所殿

平山越後守
久武

（上書）条所兵部少輔殿　御宿所

1903

『仝』

就名字之儀、雖度々承子細候、加斟酌候之處、伊地知（重貞）防州預御助言候上者、前代之由緒歴然之儀候哉、然者不及難澁候之条、爲後日令進一筆候、猶期後喜候、恐々謹言、

1904

十月廿五日　忠康（花押）

調所九郎兵衛尉殿　進之候

平山越後入道

「包紙」調所九郎兵衛尉殿　進之候　忠康

『調所氏文書』

於串良引物

（平山左衛門尉久近）金吾へ

太刀一腰

二百疋　（恒男）兵部少輔

太刀一腰

二百疋　（調所恒男）九郎兵衛尉

打刀行安　兵部少輔

（平山又二郎久年）又次郎殿へ

弓　九郎兵衛尉

百疋　両人より

女中

ミなミへ

百疋　扇一本　兵部少輔

百疋　扇一本　九郎兵衛尉

百疋　両人より

かいちへ

（豊州御内）甑殿

弓　紙二そく

平山伊与助殿

弓　鷲の羽一尻　紙二そく

（豊州御内）國前殿

城薗寺殿

市成殿

（豊州御内）竹崎殿

竹崎帯刀殿

（豊州御内）□原殿

有河殿

重久治部左衛門尉殿

河俣殿

（使者）山崎宮内少輔殿

（中間）江田

（極楽寺紙そく）松下

（東禅寺紙一そく）勢兵衛

（岩ひろ）宿

（大石崎ノ）宿

地下けかんニ

初之使中間

返報

金吾より

弓　太刀一腰　紙一そく

紙一そく

弓

太刀一腰

弓　紙一そく

紙一そく

紙一そく

紙一そく

紙一そく

紙一そく

鳥目十疋

鳥目十疋

鳥目十疋

鳥目十疋

鳥目十疋

鳥目十疋

甲　御住代　　太刀一腰
松原十帖（ミなミより）　百疋　兵部少輔
大打刀　御住代作有　太刀一腰
松原十帖（ミなミより）　百疋　九郎兵衛尉
國前殿よりはうちゆう
白木原殿より嶋いゝき

1905
『感應寺文書』
相州鎌倉建長寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、
永正十六年五月十五日　　源朝臣義稙判
從亀首座

1906
「忠隆公御譜中」
一永正十六年己卯四月四日、罹痘疹病卒、享年廿三、法名龍盛號興岳、龍盛院殿、

1907
「仝上」
一自永正十二年至同十六年、共五ヶ年治國也、

1908
「見于玉龍山福昌寺之西卵塔所在碑云」
一夫分陀利華經者一句一偶之功德、超越六波羅蜜之行云、
奉爲
前太守忠隆興岳龍盛公大禪定門
其近臣書一字一石、以備追膳、其功力不可勝計、靈
其受之焉、
時永正己卯七月十有六日敬白
一御像在隆盛院、舊藏于吉田興化寺、元和七八年主僧南叔時、召　公府而如今云、
一前薩隅日三州太守興岳大禪定門遺像、謹應當府君明旨、叨題一祗夜以讃之、天正歳次玄黙敦牂孟夏如意珠日、
前建仁雪岑叟津興、汗馬功成討不臣　凜然意氣有誰均
若將武勇論千古　漢室三良輸一人
「此書、御譜中ニナシ」

1909
「勝久公御譜中」
一穎娃氏依無世子爲猶子、雖然兄二人早世、故去穎娃氏、
爲守護職也、

1910
「仝」
一永正十六年己卯、薩隅日三州凶徒蜂起、既爲大亂矣、

1911

一同年八月十日、御代始犬追物手組、

「新納家支流越後守忠泰譜中」
「正文在新納喜右衛門久盛」

悪四郎久顯公ハ新納ノ家督タリシカ共、求仁院退出之義ハ故アリ、安樂ニ善護庵と云寺アリ、此寺ニ招請被申砌、小者共アマタ居タリケルカ、庭前ノ花檀ニカヽリ花ヲ多手折ケルヲ、久顯公御覧有テ腹立シ給ウ、然處ニ中野左衛門尉ト云人是ヲ見テ、主人ノ義ニハアマリ輕〻敷御氣色トテ、彼花橘ヲ手折取せケレハ御腹立尤也、御座ヲ立ントシ玉ウ處ニ、各袂ニ取付留被申也、少御座有テ、ヤカテ如志布志御歸候之處ニ、左衛門之親對馬守是由承付、人數召列如安樂被參ケルニ、六月坂ト云所ニテ被參會也、久顯公打笑給イ、今日イツモノ酒狂ヲコソ申テ候へと被仰ケレハ、對馬守被申様ハ、左衛門尉緩怠申之通承付候、腹ヲ切セ申サント存知參候ト被申ケレハ、久顯公サヤウニテハナシ、只我等酒狂ト被仰候て、城へ歸リ給ウ也、其時ノ内城ハ松尾之城也、對馬守之役所ハ今ノ性法院也、其ヨリ是ヲ基トシテ、内之衆もソシリヲナスニヨリ、志布志ニ離給ウト申傳ルナリ、久顯公之御母ハ肝付殿姫也、依之先如肝付退出也、久顯公佐伯殿聟也、然間肝付ヨリ佐伯へ被越滞在也、有去子細、於佐伯生害ナリ、其後久顯公之舍弟忠臣公ヲ新納之家督トス、此代ニ久顯公依成給崇、荒人神ト祭給ウ、江臨大明神是也、今貴所之御披官大岩根宮内少輔方ヨリ御筋目之由來先年尋候間、凡物語如此申候ッ、又ハ久顯公ノ御子十郎忠泰之夏、出家ニ可有御成トテ佐伯へ御座候シヲ、「玄久酔岳ノ御事也」御屋形氏久様被聞召付、元俗候へト依仰被任上意候、烏帽子名ハ四郎タルヘク候へ共、忠臣家督トナラレ候間、又〻ムツカシクモヤト候而、少御思唯共(ママ)候處ニ、内田十郎ト云年來之人申事ニハ、乍恐我等養育申候条、只先吾等カ名ヲハ如何ニト申ケレハ、　氏久様尤可然ト被仰候て、十郎殿ト申候、早竟只氏久様之可爲御末子之由上意ニテ、ソコヨリ庄内三俣之内名〻六十町御給候而、三俣高城東五百町之衆頭ニ御定候也、是ハ誰モ〳〵御存知之前ニ候、萬〻書付タル日日記ノ中ヨリ見出申候、御尋之間書記令進候也、

とゝめをくを見てもわするな筆のあと
あハれなからんのちの世までも

永正十六年九月重陽日　　中野安房守歳信(花押)

新納越後守殿(忠泰)
參

1912

「山川郷」

一奉造立霧嶋御社一宇

右、意趣者云々、大檀那伴之兼憲御息災延命云々、

永正十六年己卯九月廿日

鍛冶　孫兵衛尉

大願主伴兼憲　大工　助兵衛尉元吉

小工一人

1913

「豊州家豊後守忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

雖未申通候、以次染筆候、仍太刀一腰宗近進之候、隨而渡唐船之儀、委細陶安房守可申候、無御等閑候者、可爲祝着候、恐々謹言、

「朱カキ」「永正十六欠」十月十日　義興判

嶋津豊後守(忠朝)殿

1914

「案文仝上」

左京大夫以狀申候、仍渡唐船之事、於御分國中可被相留之由申候處、興國寺東堂以御入魂蒙仰候趣、先以祝着候、近日必重々以使者可申入候、智水境(「本ヤ」)池永修理事者、此方申付候、然者彼仁申船事、於何方許容可然候、委細定可申入候、恐々謹言、

「朱カキ」「永正十六欠」十月十日　陶安房守弘詮

嶋津豊後守(忠朝)殿　御宿所

1915

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

御札之趣具令拜見候早、殊御太刀一腰宗近誠賞翫、畏入存候、抑就渡唐船之儀、蒙仰候之趣、奉得其心候、細碎陶房州江令申候、仍從是信房一腰金覆輪進入之、聊表御祝礼計候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

「永正十六欠」十一月四日　忠朝

京兆　御返報　人々御中

1916

「仝上」

御屋形様御書并示給候趣得其心候、抑渡唐船可相留之由、御意之旨、不可存疎略候、但此方之事、所詮、可應忠兼下知之条、御得心前候之哉、池永修理船許容之儀、不可

有等閑候、委曲猶一中軒令申候間、不能詳候、恐々謹言、

「永正十六歟」十一月四日　　忠朝

陶安房守(弘詮)殿　御返報

1917

「勝久公御譜中」

一永正十六年十一月廿七日、伊集院尾張守爲長本起謀叛、

楯籠曽於郡城、十二月八日、新納近江守忠武籠軍兵於

彼城、

1918

「在山田氏譜中」

「正文在隈之城衆上村勝吉」

八幡新田宮御寶前

奉進

御筆法花經

右、旨意趣者、　奉爲天長地久、御願圓満、殊者信心施

主子孫繁昌、息災延命、心中所願皆令満足之故也、所定

如件、

永正十六年己卯十二月吉日　　藤原忠俊(花押)

新田宮政所座主周宗計次(「本マヽ」)

1919

「國史　巻十五」

大翁公初名忠兼、又改勝久、後改義忠、興岳公之弟也、幼字宮房丸、稱又八郎、又改八郎左衛門尉、歷修理大夫、任陸奥守、法名大翁妙蓮、按公名忠兼、大永六年遜位於大中公、享禄元年更名勝久、其後又改義忠、皆在遜位之後、則書在位中事當曰忠兼、而島津系圖曰勝久、蓋以公遜位後、為在位之年耳、

永正十七年庚辰夏六月十五日　宣旨、　公任修理大夫、

據大翁公舊譜、　島津忠朝使平山越後守近久守串良城、秋八月朔日、肝付河内守兼興攻之、近久擊破之、據島津内膳家譜、近久、忠康之子、兼興、兼久之子也、據島津内膳家譜、肝付甚兵衛系圖、平山忠康見明應四年、肝付兼久見永正三年、並係第十二卷、　二十一日、　公攻曽於郡、冬十一月二十七日、伊集院尾張守以城降、據大翁公舊譜、

大永元年辛巳、是年八月改元大永、自七月以前猶是永正十八年、初樺山音久領野野美谷、事見第八卷應永元年、傳至長久、　公以堅利・小濱・小窪・河北・臼崎・持松代之、使北郷左衛門尉忠相領野野美谷、夏五月十日、長久移堅利、忠相、敏久之孫也、據島津支流系圖樺山氏・北郷氏譜、樺山玄佐自記、北郷敏久見第十二卷文明八年、郡國分郷有小濱村、清水郷有川北村、贈吻郷有持松村、持松村今屬踊郷、西舊跡見分帳、國分郷小田名有堅志利、伊集院吉左衛門家藏文書、賢尻五十五町、小濱六町屬桑西郷、賢字讀曰加太、尻字讀曰之利、堅字讀曰加太之、堅利疑是賢尻、島津支流系圖樺山氏譜、賜樺山氏賢利・小濱・小窪・河北・臼崎・持松及濱村、按玄佐自記、濱村似言斥國無用之地、則非村名也、今刪之、秋八月十八日、島津忠朝將兵、攻鹿屋城、戰勝而還、肝付兼興要諸鹿屋原、忠朝與戰大敗之、據島津内膳家譜、二十三日改元、據和事始、冬十二月、將軍足利義稙罷、義晴

爲征夷大將軍、（據將軍家譜、義稙即義尹、）

1920 「忠將一流系圖」

忠將

初政久　又四郎　右馬頭

永正十七年庚辰誕生、母貴久一腹、

「右ノ母、島津薩摩守重久女ナリ」

1921 「勝久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

去年者至曽於郡長〻在陳、被勵軍忠候之条、喜悦無他候處、重〻就彼方番之儀、辛勞無申計候、ヶ様之懇志、誠〻難忘候、佳事、恐〻謹言、

「朱カキ」「永正十七年欠」二月五日　　忠兼（勝久）（花押）

肝付三郎五郎殿

1922 『一乘院文書ノ内』

庄嚴寺追加之内可有意得事

一伊集院衆徒中於傳法灌頂等、莊嚴寺可定會場之事、

是者開山之御法流本意仁爲令行也、若雖爲後寺之住持、閣開山之法流不被行者、可非良範之門弟、故自餘門弟等於他所法事被取行支、更〻非制限者也、又構宮拜殿等之男女雜居因食不淨處、努〻不可在秘蜜之法事等勤修者也、

仍爲後日掟如件、

永正十七年庚辰二月十二日

權大僧都法印賴政定之、

1923 一永正十七年庚辰、忠兼被任修理太夫矣、使僧桂樹院之玄章首座也、

1924 「御文書方有之」

上卿　帥中納言（三条西公条）

永正十七年六月十五日　　宣旨

藤原忠兼

宜任修理太夫、

藏人左少辨藤原（葉室）賴継奉

「右ノ上書有之」「ロ　宣案」

「勝久公御譜中、正文在手鏡トアリ」

1925

『阿久根大固寺文書』

坪付

薩摩國阿久根之内水田

一七町五段　　潟

永正十七年六月四日　　忠興印

大固寺

「此坪付ハ、本源御自分之新田と申傳來也」

1926

「勝久公御譜中」

「寫在本田作左衛門宣親」

就渡唐船之儀、先度委曲令申候、弥預入魂候者、可爲本望候、猶桂樹院可有演説候、恐〻謹言、

「朱カキ」「永正十七年」閏六月十七日　　(細川)右京大夫高國

謹上　嶋津修理大夫(勝久)殿

1927

「正文在樺山源三郎久清」

一不寄存候之處、以御誓札可被懸御意之由、示承候、目出候、此前茂對御方無御等閑之儀候、已後も又心底可爲同前候、

一如此申談候之處、和讒等互可申披事勿論候、

右條〻僞申候者、

日本國之大小神祇、殊者天照大神宮　正八幡大菩薩　春日大明神　鵜戸六所權現　諏訪上下大明神、各可罷蒙御罰候、

永正十七年庚辰七月廿二日　　豊後守忠朝(花押)

樺山(宗光)殿

同太郎左衛門尉(「広久、後美濃守ト称ス」)殿　御返報

「此書、樺山氏七代廣久譜中ニ在リ」

1928

「正文在樺山源三郎久清」「此書樺山氏七代廣久譜中ニ在リ」

契狀

一世上雖如何躰轉變候、無二ニ可申承事、

一自前〻偏奉憑候上者、於弥無二心頼存、又可預御助成之事、

一如此申談候之處、自然和讒凶害出來之時者、御相互無覆藏承可申披之事、

若此條〻僞申者、

伊勢天照大神宮　熊野三所大權現　霧島六所大權現　正八幡大菩薩　諏方上下大明神、各可罷蒙御罰也、

于時永正拾柒年七月一日　　(樺山)宗榮
　　(樺山)廣久

(忠朝)豊州
　　參

1929

「仝上」

不寄存預御證文候、此間不申合事候間、雖可斟酌申候、遙〻示承候条致頂戴候、過分之儀候、當時不宜氣分候て罷居候、平(癒)喩仕、追而以精進可致御報候哉、從都城之御使僧モ先以返申候、委細此御使僧令申候間、閣筆候、恐〻謹言、

七月二日　　忠朝(花押)

樺山太郎(広久)左衞門殿
　　御返報

「此書、樺山氏七代廣久(後信久)譜中ニ在リ」

1930

「宮里孫太郎正豊傳」

一永正十七年庚辰七月廿四日、於大隅比目木石跳、新納殿衆ト合戰、

1931

「勝久公御譜中」

「見于年代記」

一同年八月廿一日、着陣於曽於郡、十一月廿七日、伊集院尾張守・新納近江守忠武之士卒降、去其城、屬無爲也、

1932

「忠將一流系圖」

忠將

初政久　又四郎　右馬頭

永正十七年庚辰十一月十二日於薩州伊作誕生、父母同于　貴久主、

忠將者國主之次弟、且日新齋之二男、是以氏族國人、尊敬無出其右者、

1933

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衞門」

就渡唐船之儀、吉河出雲守令下着之處、無別儀之由候、弥入魂可爲喜悦候、恐〻謹言、

「永正十七」十一月十六日　　(細川)高國

嶋津(忠朝)豊後守殿

1934 『調所氏譜恒房傳』

永正十八年辛巳、（八月改元大永）、正月二十日、留守所下政令三章於諸郷院如例、

1935 『仝文書』

留守所下　諸郷院

仰下　參箇条

一可任例勤行佛神事等事

右、院（治カ）國之法、佛神事爲先、（尤脱カ）致礼具、可勤行、

一可修固池溝築堤事

右、初春要池溝堤爲宗、尤可修固、

一曳殖苧桑柒等事

右、治務之道、苧桑柒爲要、尤可曳殖、

以前參箇條、任下知之旨、可致沙汰狀如件、

永正十八年正月廿日

大中臣篤則（花押）

權大拯

1936 『調所氏譜恒房傳』

永正十八年三月十五日、　大翁公賜恒房田二段、（在隅州武安名、）

國老末弘伯耆守忠臺・肝付越前守兼演・伊地知縫殿助重周・桑波田讃岐守景元・本田因幡守兼親、爲坪付以授之、

1937 『仝文書』

坪付

隅州

武安名仮屋之内　二反　國衙ニ引水口　經田

永正十八年三月十五日

（本田）兼親

（桑波田）景元

（伊地知）重周

（肝付）兼演

（末広）忠臺

調所兵部（恒房）少輔殿

1938

一元日、先出仕衆上覧候而御社參之事、

一同二日、福昌寺へ御光儀之事、

一三日、市來より御さつしやうの事、

一四日、福昌寺之御請用之事、

一五日、縄御はしめ殿中へ福昌寺御參之事、

一六日、御代官所へ被申候事、
一七日、平田方之垸飯之事、
一八日、平田方御請用之事、
一九日、道場より御請用之事、
一十日、石井殿より御請用之事、
犬追物初
一十一日、御吉書之事、
一十五日、清水垸飯之事、
一十六日、御千句并大磐若、
一十七日、本田より前々ハ被申候事、
一大殿様・若殿様御一家中へ御寄合之事、
一伊東より使者肴、澁谷衆へ肴同前之事、
一年頭五日、福昌寺殿中へ御出之事、
一御一家中御參之時、相州様御家計左中奏者之事、
一三月三日御祝之事、
一五月五日之事、
一六月一日之事、
一七夕之事、
一七夕さうめんの事、
一諏訪御祭禮之事、
一諏方御祭禮之時御座躰之事、
一司へ御祭禮の日御前御酒もりの事、
一八朔之事、
一八朔之御使者之事、
一奏者之事、
一御一家國衆へ御寄合之事、
一御寄合之御相伴之事、
一御座敷奉行之事、
一常住御手長之事、
一殿中惣門之事、
一御寄合之時川上殿之事、
一御一家國衆宿へ御光儀之時之事、
一五ヶ日御垸飯頭御酌之事、
一御沓之事、
一原田松本道うちの御剣持申事、
一御宮仕之事、
一八人御年來之事、
一御吉書御垸飯之御座之事、
一十一日、御見かゝミ御三献之事、
一十一日、御吉書御三献之事、
一十一日、御吉書之時左中筆者扱之事、

一琉球紋船之事、
一同赤かミ衆座敷之事、
一同下部之座敷之事、
一琉球より進物之事、
一琉球人宿へ調之事、
一御屋形様より世主へ御返禮之事、
一此御返禮なき以前ニ、御屋形様使僧使者宿へ御光儀之事、
一殿中へ琉球人參上之時之事、
一御けんふくの事、
一新納殿ゑほし親ニ御參之事、
一忠幸様御ひたいめされ候御祝之事、
一御代祝之御座敷之事、
一御小者三そくきり三人之事、
一御はらの事、

田島駿河守
伊地知越後守（重周）
本田因幡守（兼親）
桑波田觀魚
石井旅世

大寺宮音
肝付越前入道

1939 『福昌寺文書』

大隅國曽野郡郡田名之内

谷頭之門　二反　一條　三反　道近
一反　堀町　辻之屋敷　二反　屋敷付　笠淵
二反　小祿　二反　小松田　畠地之分
五反　姫木　五反　西福寺

都合水田一町二反畠地一町

右、彼田畠、愚老百年之後、年忌之半剤月忌之點心茶子可備毎朝佛餉并菓子者也、依爲後日誌之、

現住福昌一門智陸（花押）

于時永正十八年辛巳孟穐十二日

1940 『福昌寺文書ノ内』

爲悦叟歡公禪定門祠堂物、合而六斛之定、毎年利分一石充慥定置處如件、

玉龍山福昌禪寺常住
恕岳老拙（花押）

1941

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

如蒙仰候、池永修理渡唐艤之事、於當津造畢候、肝要存候、猶爰元之儀、陶房州へ令申候、定而塩田壹岐守可被述候哉、仍御太刀一腰拜領畏入候、從是同太刀一腰奉表御祝儀候、以此旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

「永正十八」
一二月十一日　　忠朝

京兆
御返報
人々御中

1942

「仝上」

如仰、就渡唐船之儀、已前示承候處、重而預御書候、誠過分之至候、弥不可存疎略候、修理大夫申旨、委細塩田壹岐守可被相述候条、不能詳候、恐々謹言、

「永正十八」
一二月十一日　　忠朝

陶安房(弘邑)守殿
御返報

1943

「仝上」

京兆様御書、同御太刀一腰并陶房州書狀贈給、慥令拜見候早、抑渡唐船之儀、日向屋修理企聊尓之次第、已前細碎被仰含候キ、存其旨候處、又從細川殿彼二艘之事警固可仕之由、度々承候、京都之御談合如何候哉、御兩家皆以難相黙御事候、所詮、委細之儀定年行共可申候、以其趣御心得可爲肝要候、恐々謹言、

「永正十八」
一二月十一日　　忠朝「裏付等同前」

塩田壹岐守殿

「右、鹿児嶋迄為使下向之時、返狀之案文」

1944

「佐多氏譜中」

忠和

又太郎　伯耆守

文明九年丁酉誕生、

1945

「正文當家有之」

依無指題目、不申通遺恨候、抑就家門由緒之儀、雖其憚多候、助成之事連々申候、可然之様、此節別而馳走頼入計候、猶不断光院可有演説候也、かしこ、

「年間シレス」
三月五日　　(近衛龍家)(花押)

佐多伯(忠和)耆守とのへ

1946 大永元年辛巳四月八日死、年四十五、法号俊翁道英居士、

1947 「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

御札之趣令披見候旱、抑絹川佐渡(入道カ)□事、不可有許容之旨、修理太夫(勝久)□從最初如申候、爰元之儀者順逆□今以同前候、恐々謹言、

「永正十八」四月一日　忠朝

陶安房守(弘詮)殿　御返報

1948 「仝上」

就渡唐船之儀、度々以貴札蒙仰□、悉皆修理大夫(勝久)可任下知之条、不可□旨、宜預御披露候、恐惶謹言、

「永正十八」四月一日　忠朝

京兆　御返報

人々御中

1949 「樺山玄佐自記」

一大永元年五月十日、堅利小田かりやにふる雨を過し、「大永二年也」次之年廣久西郷江栫へ移り、「父入道」宗榮をかりやへ移す、「小田カ」かゝる程ニ老病といひ、「宗榮カ」入道六拾六才ニ而彼所ニおひて「大永二年カ、左アレハ康正二年丙子生レナラン」去行、扨忠兼様奉行衆之内、本田次郎左衛門尉と云悪者有て、大隅曽於郡地頭を領しけるが、「大久保」おくほ・河北・うす崎・持松を望取、其打替横瀬四町・帖佐・春毛・餅田、其外爰かしこ拾八町を合せ、彼四ヶ所知行す、「本田次郎左衛門カ」椛山にのミならす、惡逆諸人歎之、「以下末ニ載ス」

1950 「樺山氏六代安藝守長久譜中」

伊東某・北原某者、同意之外敵也、又爰吾之野野三谷者、自應永元年至大永元年、殆迄一百三十年、所以領知之地也、有所欲之之内敵、陽向于守護則曰、可抽無二忠節、陰通于外敵則曰、以廻籌策欲亡味方之言、其陰謀既露顕、是以野野三谷居住將向難遂、故長久與廣久父子共議曰、如此則非啻失勲功之地、且破累代之家、不如移居於佗所乎否、于時北原某有以栗野欲易野野三谷之告、長久入道宗榮雖爲六十三歳之衰老、艴然不悦、速候于麑島、有訴訟之旨曰、數代所領知之以島津莊樺山、去渡于北原、何可退出乎、太守忠兼公以國中之難治不能許容、終替于堅利五十五町・小濱廿四町・小窪・河北・臼崎・持松并濱村等、賜之樺山令領知、大永元年五月十日、移于堅利小

田假屋、翌年移廣久於西郷栫者也、

1951

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

連〻可申上候之處、依遼遠不能其儀候、頗奉失本意候、
抑永源寺主席承儀、　勅号之懇望、彼僧二人致參洛候、
以御入魂事達候者、誠本望可畏入候、仍雖左道之至候、
北絹一端令進献候、此旨宜預御披露候、恐惶謹言、

「永正十八」五月十九日　　豊後守忠朝

進上　甘露寺殿
參人〻御中

1952

（端裏書）「永正十八年七月十三日到來」

今年以貴國之使節妙滿寺渡海、然ハ所蒙之尊札委細令披
見候、仍兩國永〻和親之義簡要候、殊兩品之重貺不勝萬
感候、餞副別楮、不宣、

林鐘十五日　　三司官

種子嶋武藏守（時堯）殿閣下

1953

追而令啓上候、

抑貴國之御船荷口之事、妙滿寺於此方御披露候間、那覇
之奉行此義依申述三司官候、則達上聞候、然者種子嶋前
〻爲琉球有忠節之義、從今年御船一艘之荷口之事、可有
免許由承綸言候、仍爲證明進別楮候、萬端不宣、

「当本朝大永元年」正徳十六年辛巳　林鐘十五日　「国王尚真代」三司官印

種子嶋武藏守（時堯）殿閣下

1954

回答

種子嶋殿平時堯公

不違多載之佳例、見投一壺之香華勝北宛先春醒南華老夢
珎重、曼福表菲礼、線織物五端進呈、一覧多幸、不備、

丙辰大呂十又三蓂

琉球國中　山王（朱印）

回答

種子嶋殿平時堯公

「丙辰大呂ハ大明嘉靖卅五年也、本朝弘治二年也、中山王ハ尚眞子尚
清ナリ」

1955

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

渡唐之内二號船事、被申付絹川佐渡入道處、種々御懇之由喜悦間、以直書被申候、然間佐渡尤可罷下之處、於當津愈申付儀依在之、愈相留候条、被成其心得、弥預御入魂候者、可爲祝着之由、猶自秋相心得可申由候、恐々謹言、

「永正十八」
八月十四日　元盛「裏付香西四郎左衛門尉」
嶋津豊後守(忠朝)殿
御宿所

1956

「仝上」

今度渡唐之内二號船之事、申付絹川佐渡入道候處、御懇之由候、弥預入魂候者、可爲祝着候、猶委細四郎左衛門尉可申候、恐々謹言、

「永正十八」
八月十六日　高國(細川)
嶋津豊後守(忠朝)殿

1957

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

爲其堺無事之調法、至伊東尹祐加助言候旨趣、定惠院可申達候、安全御覺悟肝要候、仍太刀一腰持次、鞍一口本所進之候、猶期後音候、恐々謹言、

「永正十八」
八月廿三日　親敦(大友)
嶋津豊後守(忠朝)殿

1958

「仝上」

就三ヶ國御弓矢之儀、任代々之旨、爲無事調法、定惠院祐順僧都被進之候、可然様可被仰談事此時候、兼又先年二號船歸朝之刻、御懇志之御礼志賀宮内大輔被申付候之處、近年依國中亂忿延引、聊非疎儀候、是又祐順可被達候、恐惶謹言、

「永正十八」
八月廿三日　本庄伊賀守右述
臼杵民部少輔長景
大神遠江守親照
嶋津豊後守(忠朝)殿　進覽之候

1959

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

爲渡唐、於貴國船新造之儀申候之處、御懇承候、于今祝着之至候、次以塩田壹岐申子細候、是又御入魂所仰候、

仍太刀一腰進之候、猶委細陶安房守可申由、恐々謹言、

「永正十八」十一月二日　　義興（大内）

嶋津豊後守（忠朝）殿

1960

「仝上」

就渡唐船之儀、以前被申候之處、御懇示給候、祝着候、重而以書狀申旨候、弥御入魂所仰之由申候、猶塩田可申候、恐々謹言、

「永正十七」（八欠）十一月二日　　弘詮「裏付陶安房守」

嶋津豊後守（忠朝）殿　御宿所

1961

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

態令啓候、抑已前以趣傳申入候之處、旨趣被遂御披露、御懇之儀誠畏入存候、然者爲其辻、至伊東尹祐被加無爲之御助言候之由、先日定惠院委細達承候、御累代連綿御芳志之条不及申候、殊僧都御歸國之砌、從都於郡如承候者、彼方進迎可被應貴命之由候き、可然存候、弥庄内安全之御調法併奉頼候、就之北郷左衛門尉進一行候、猶具明星院申含候、預御入魂候ハヽ可爲本望候、恐々謹言、

「大永元年」十二月八日　　忠朝

本庄伊賀守（右述）殿

臼杵民部少輔（長景）殿

大神遠江守（親照）殿　御宿所

（表紙）

勝久公　自大永二年
日新公「忠良」　至同七年
貴久公

前編　舊記雜錄　巻四十三

1962

大永三年癸未　永正八年八月二十三日大永と改元

新納近江守忠武命に方ひ逆を謀る事久し、　按に、永正三年忠昌公高山を攻むるの時、肝付氏を救て公の軍を擊ち、　忠兼公深く是を怒り、伊同十七年伊集院尾張守か叛を助く、地知・吉田を將として大軍を發し志布志を攻む、忠武も大兵を卒し月野　志布志の内、に逆へ戰ふ、二將兵を指揮して挑戰ふ、忠武か兵勢甚疾し、伊地知・吉田か軍利あらす、七百三十餘人戰死す、二人餘兵を收めて鹿兒嶋に歸る、

六年丙戌

嶋津八郎左衞門尉實久、　其祖用久、　久豊公の次男也、薩摩守と稱す、故に薩州家といふ、其子薩摩守國久、其子薩摩守成久ハ日新公夫人の父也、其子三郎太郎忠興加世田に住す、大永五年卒す、於是實久家を襲ふ、　封を薩州出水に受しより五世を領し、　按に、出水ハ建久年間和泉小太夫兼保領す、兼保ハ伴姓肝付氏の支族なり、其子井口諸太郎兵衞尉保久、其子太郎兵衞尉保忠、其子諸太郎政保相傳領す、其後貞久公の次弟豊後守忠氏出水を領す、相傳へて五世又四郎直久に到て、應永二十四年川邊に戰死す、久豊公出水を用久に賜ふ、七世傳領して又太郎忠辰に到て没せらる、數邑并せ領す、谷山・川邊・加世田・高尾野・阿久根・高城・水引等なり、支族繁榮し、用久の二男下野守延久河邊の城主たり、大田氏の祖なり、其子下野守昌久家嫡成久と不和にして、河邊を忠昌公に獻す、更に南郷を賜ふ、大永六年帖佐を賜ひ、翌年叛を謀て、忠良公に亡さる、國久の二男駿河守忠綱加世田に地頭たり、大野家の祖也、同三男伊勢守秀久吉利家の祖也、薩州吉利を領す、五世下總忠張に到て日州塩見を賜ふ、　貴戚の世臣なり、忠兼公同五男越後守光久ハ寺山家の祖なり、實久か姉を立て夫人とす、實久性猖獗、寵に奢り權に募る、　忠兼公政治怠あるを見て終に謀反す、國内彼に黨して大に乱る、　公大に恐怖し征伐に術なきを憾む、時に相模守忠良公ハ相州　按に、忠國公の長子相模守友久ハ側室に生、故に封を襲ハす、田布施・阿多・高橋を賜て田布施に居す、卒して田布施常珠寺（福昌寺末太平山と云、應永十八年仲翁和尚建立）に葬る、其子相模守運久、初三郎左衞門尉忠幸と稱す、除髪して一瓢と號す、卒して阿多大年寺（千手山と云、常珠寺の末寺也、天文八年建立）に葬る、卒して阿多大年寺（千手山と云、常珠寺の末寺也、子なし、故に忠良公を養て子とす、○東武昵近の士島津主馬某家傳云、其先嶋津相模守運久に出つ、運久の子僧となり長徳軒と云、遍歴して相州小田原に居し、還俗して後藤氏を冒す、世〻以て氏とす、光久公の時、其系圖を持來て島津氏を冒さんことを乞ふ、我邦君の記に載せすと雖、其乞を許す、是を後藤嶋津といふ、野間氏傳に云、野間氏の女一瓢に仕ふ、室を一瓢の屋邊に築て居らしむ、是庵室と稱す、男子を生む、即一瓢の子也、童坊と成て為阿弥と稱す、後ニ母の性を冒し名を賜つて野間喜庵といふ、其裔今の野間孫右衞門是なり、伊作の兩家を兼嗣て、　按に、伊作家其先久經公の次子大隅守久長に出つ、久長初三郎左衞門尉下野守忠長と稱す、久豊公の讃を受て、信州大田の庄を領す、又薩州伊作を領し、爰に居して以て氏とす、久經公に從て筑前國箱崎の津を鎮す、弘安七年より嘉元三年に到り、二十四年箱崎にあり、將軍尊氏に仕へて功あり、卒して伊作多寶寺に葬る、（佛母山多寶寺臨濟宗、伊十院廣濟寺末寺なり）其子左京亮久清、後大隅守宗久と云、其子下野守忠親共に尊氏に仕ふ、

忠親弟を三郎左衛門尉久氏と云、尊氏に近侍す、貞和三年尊氏諸將を攝州天王寺に遣して楠正行を伐つ、久氏其中にあり、洛陽東寺を出んとする時、尊氏扇に歌を書て久氏に賜ふ、菊の綿あり、歌に、九つの國より御代ハ治りて目出度ことを白菊のはな、是を本國の兄に送て九月十二日天王寺に戰死す、子あり、竹壽丸と云、將軍家に仕ふ、信州神代郷に居す、其後を知らず、忠親の子を大隅守久義と云、遠江守十忠か為に殺さる、其子四郎左衛門尉勝久、久豊公に惡まれて肥前國に走る、其子四郎左衛門教久、其子犬安丸長安二年伊集院諏訪祭礼頭殿と為て、十二月四日十六歳にして頓死す、妹あり、伊作家の諸臣、忠國公の三男亀房丸に妻せて犬安丸の嗣とす、後に式部太夫久逸と稱す、又河内守と改む、立久公日州福嶋を賜て移居す、文明年間新納近江守忠續と善からず、鬪戰に及ふ、忠昌公忠續を救ふ、久逸降を乞て伊作に歸る、明應元年加世田に卒す、久逸の子又四郎善久、始日州福嶋の衆新納駿河守是久（武藏忠元の高祖父）養子と為り、其女を妻す、（常盤殿と稱す）卒て伊作西福寺に葬る）後に辞て伊作に歸る、夫人貞節を守て伊作に來る、善久明應三年奴僕の為に弑せらる、其子即忠良公なり、明應元年九月廿三日、伊作城に誕生す、三歳にして父を喪し、祖父に養ハれ、七歳にして伊作海藏院（如意山顧成就寺とす、眞言宗大乘院末寺）に登學に就き、九歳にして久逸戰死、十五歳にして伊作城に歸る、時に相模守運久の夫人ハ島津筑後守女、運久是を惡んで去んことを欲すと雖、夫人能事へて礼を欠す、運久去るに由なし、竊に家士に謀て高橋の藥師に詣しむ、僕從舟を艤して海上の遊を催す、夫人知すして舟に乘る、棹て市來濱に到り、薩摩山の堂に誘ひ、火を放て六人の婢と與に燒く、運久常盤殿の美なる事聞て、迎て夫人とせんと云、夫人聽す、運久固く乞て止す、於是答て曰、忠良公を以て、運久の嗣子とせハ命に從ん、運久大に喜んで云、我未嗣子なし、もとより希處なりと誓書を送る、常盤殿猶聽す、相州家諸臣の誓書を求む、書成て運久に嫁す、故に忠良公田布施に長す、天文八年運久逝す、忠良公相州・伊作の両家を継て、阿多・高橋・田布施・伊作を并せ領し、田布施の城に居す、按に、頭殿・居頭殿役ハ、忠國公の時に始る、頭殿とハ公卿藏人頭にて勅使の意也、居頭ハ頭殿寄にして衆の頭に居るの意也、是ハ上使を表す、七月頭屋の儀式ハ勅使會釋の躰なり、祭の日頭殿の幣ハ天下の祈祷、居頭の幣ハ國の祈祷也、氏親か永享十年の記に云、鹿児嶋諏訪大明神祭礼陸奥守貴久御代、頭殿・居頭殿始ると云、故に世人多くハ大中公に始ると思へり、永享十年ハ大中公誕生より以前也、是ハ忠國公初貴久公と號す、故に是を以大中公と誤まるなるへし、

仁厚にして民其徳に懐く、　忠兼公以爲、今や此乱を鎭めん事此人にあらすんハあたハしと、本田次郎左衛門尉を田布施に遣し、　忠良公に説て曰、我往に佞奸の徒に誤られ、政人望に背く故に此禍を招けり、庶幾ハ我に代て賊を討し民を安んせよ、足下に加へ封するに薩州南郷を以せん、　忠良公諾す、南郷城主桑波田孫六（按に、孫六か先桑波田万揚房覺辨南郷を領してより世々傳領す、覺辨ハ建久八年内裏大番の触状に見えたり、孫六か裔今宮城に有て勘左衛門と云、）　忠兼公の命に應し南郷を　忠良公に献す、　公即孫六に命して是を守らしむ、孫六是より　忠良公麾下に屬す、

十一月、　忠兼公伊十院に到り、嶋津下野守昌久（昌久ノ妻ハ忠良公姉也、）使として日置を　忠良公に賜ふ、（來由記曰、日置ハ文治比重純地頭、建久の頃日置兵衛太郎頼純、其後小野太郎家綱、頼朝公より日置を賜て來住す、山世々傳領す、應永の頃伊十院長門守忠國の三男日置美作守久影領す、山田家の記ヲ按スルニ、忠久公ノ時式部太輔始テ薩州に來り山田に住す、日置ヲ賜ルト云、天文二年有親伏誅ノ時日置ノ主タル時ハ中絶シテ復領スルカ、）　忠良公日置に往き（五日、）明日伊集院に至り、　忠兼公謁し恩を謝し、國政委任の約を堅ふす、於是　忠兼公忠良公と共に鹿児嶋に歸り（七日、）厚情日々に加わる、　忠兼公今年二十四歳、いまた嗣子なし、　忠良公の長子虎壽丸（年十三、）容貌魁梧神采俊發なるを聞、養て子とせん事を欲す、村田越前守・土持伊豆守・梶原備前守をして　忠良公に説しむ、　公辞するに、（「辞ノ字落ルカ」）　忠兼公壯年他日子あらん事を以す、再三すれとも聽かす、止む事を得すして田布施（或ハ伊作とす、）に還り、虎壽丸を携て復鹿児嶋に至る、

忠兼公大に歡ひ、元服して又三郎貴久と稱し、鐘愛所出に異ならず、傳云、此時伊作より松崎飛弾守・満留吉左衛門・池上但馬・折田淡路・吉田肥前・川越三左衛門従ひ來り忠を盡す、

十二月、　忠良公隅州帖佐を擊つ、初帖佐城主邊川筑前守川上七郎左衛門の祖と云、實久に黨し、本城・新城共に帖佐の地、に兵を聚めて鹿兒嶋を謀る、　忠良公　忠兼公に告け軍を發して吉田に次し四日、進んて帖佐城を攻る、七日卯刻軍を發す、實久か族嶋津善左衛門尉援兵を卒し來て城中に在り、總禪寺口より高尾に出て戰ふ、　忠良公の軍岩本壽齋兵を接へ善左衛門を擊つ、城兵狼狽して退く、　公の軍大に進て城下に至り、酉刻火を放て城を燒く、邊川防禦の術なく、男女五百餘人命を殞す、嶋津昌久をして帖佐を守らしめ、忠良公鹿兒嶋に歸る、　忠兼公功を賞して伊十院を　忠良公に賜ふ、比年の乱ニ邑民離散し田野荒蕪す、於是忠良公伊十院に至り十二日、田を制し農を勸め、伊作・谷山の民を分つて髣に移し明年二月、業を勤て怠なからしむ、

七年丁亥

四月、　忠兼公位を　貴久公に讓り、伊作城に移る、初忠兼公早く　貴久公を立て、躬退ひて閑暇を樂ん事を欲し、僧大應福昌寺十三世、を遣して　忠良公に告く、　公曰、謹而命を奉す、我新に封を受る處の地市來・伊十院・加治木・帖佐、　公自撰ぬて閑居の地とせよ、大應反命す、忠兼公欲する處四地にあらす、　忠良公復曰、阿多・高橋・伊作・田布施我祖先墳墓の地也といへとも、　公の欲する處命に從わん、於是位を　貴久公に讓り、清水城を出て船を田の浦に發し、谷山に至り明日十六日、伊作城に移る、初　忠良公來て　忠兼公を迎へ從て伊作に趣き、復鹿兒嶋に至り　貴久公を輔て國政を行ふ、　忠兼公伊作城に於て髪を削り四月二十九日、以て國家に望ミなきを示す、忠良公も髪を削り、愚谷軒日新齋と號す、　或云、字を湯盤ノ銘ニ取ル、傳云、忠兼公伊作に移るの時、重代の器物許多を貴久公に移る、所謂生杉摺墨（馬ノ陰玉曲器二ツニ納ル）、佐ミ木高綱カ宇治川渡の鎧（黒皮縅）生杉摺入附タル郎等の太刀（野太刀七尺三寸）、綱切ノ太刀、方一寸阿弥陀（丹後局縫）、頼朝公ノ旗等なり、後に伊作城に置キ、伊作士晝夜警固す、家久公ノ時鹿兒嶋に移スト云、　五月、　日新公帖佐・加治木を定む、先是日新公帖佐を擊つ、大永六年十二月、下野守昌久　按に、昌久日新公の女兒を妻とす、太田氏祖也、傳義弘公慶長五年に在り、　を封す、昌久性猜疑多し、伊地知周防介加治木ノ主、　と謀て、日新公に叛す、　公神速に軍を發し帖佐を襲ふ、昌久軍敗て誅に伏す、　公猶軍を進めて加治木を擊つ、伊地知當る事あたはす、　公の軍突進んて城に入り、周防介及ひ新左衛門周防介子、を誅す、一日にして二地を帖佐・加治木、定む、時に實久ハ出水に在て　日新公の雄略を懼れ、竊に反間を用ひて　忠兼公に説く、　公奸計を弁せ

す、實久に命して　日新公を討しむ、實久大に歡んて日置伊集院を襲んとす、　日新公加治木に在り、普く地の利を察して以爲、帖佐・加治木の二地ハ鹿兒嶋の藩籬として要枢の地なり、一旦賊爰に起る時ハ水陸并進んて鹿兒嶋保ちかたし、還て　忠兼公を勸て居を爰に移さは、勢相助け長久の計なるへしと船を發し、戸柱（鹿兒嶋ノ地）に至る時に、小船數艘頻に往來して事の急あるか如し、審に問ふて其情を得たり、　公大に驚て曰、我二心なき事天地神明の識る所なり、速に伊作に至り、　忠兼公に見へて赤心を明さん、群臣其害あらんことを慮て是を止む、於是速に陸に上り、湯越の峯を踰て田布施の城に入る、實久か黨既ニ鹿兒嶋に充つ、故に　貴久公竊に從臣と議し、夜に乘して清水の城を出つ、（五月六日）、山田伊豫守・木脇大炊助・川越民部左衞門・長井善左衞門・鎌田筑前守・井尻九郎・乳母宇多氏（井尻九郎か母）、是に從ふ、小野邑園田清左衞門か家に入る、賊追ひ至る、清左衞門　貴久公を聖宮に隱し、從臣等を山林に隱す、出而訳言して曰、先に六七人栗野を問ふて北に向ふて去る、賊等是を信して走去る、（按に、清左衞門か子新右衞門に至て貧困なり、是を嘆訴す、吉貴公祖先の功を以て、年俸八斛を永く賜ふ、）於是清左衞門も　公に從ひ山間の徑路を經て、伊十院竹の山に入り、春山鹿倉を過て柳ヶ谷（伊作・谷山の堺）に出、場貫のほせ（伊作ノ地）を登り、鬢石より日添の尾を越へ、牛野ゝ河原路より金峯山の後に出、辛苦して田布施に入る、　日新公曰、貴久既に　忠兼公と父子の約有り、潛行して遁るゝ事道にあらす、速に伊作に至り父子の交を絶、暇を告けて後還來れ、　貴久公又後平より湯元へ出て伊作城に入、忠兼公に謁して暇を乞ふ、　公其儀を重んし意を決して來るを悅ひ、是に告て曰、我に秋毫の僞心なし、只讒者の欺妄に因て、父子の情に違ふのミ、落涙して宴を設け留むる事三日、從者をして田布施に送り還らしむ、（十八日）、於是實久　忠兼公をして鹿兒嶋に還る、復ひ位に卽しむ、（二十一日）、（六月十一日）、實久師を帥ひ伊十院を襲ふ、城兵戰ふて利あらす、遂に陷る、

七月、　日新公伊作城を復す、先是　忠兼公伊作を去るの時、軍をして是を守らしむ、實久密に是を奪ん事を謀る、　日新公是を察して曰、伊作は我世領地たりと雖共、先に　忠兼公の求に應して是を獻す、速に是を取て實久に賜ふへし、於是夜ニ乘し兵を卒し、石牟礼（伊作ノ地妙見神社ナリ）、に至り、隊伍を整へ東城を襲ふ、城兵利あらす退て西城（傳云、市來ノ軍守ル）を保つ、　日新公の軍追ひ進んて攻擊つ、卯刻

城陷る、　公復伊作城に居す、傳云、日新公今夜軍ヲ發ス、時未二更ナラサルニ、月既ニ金峯山小野嶺上ニ出テ、恰モ白日ノ如シ、是天ノ助也ト、公軍甚勇ム、

1963

「國史　巻十五　大翁公」

二年壬午秋七月二十日、右中將奉　勅告　公曰、天子以泉涌寺舍利殿壞敗、令募緣修造、宜使國中注偈、據大翁公舊譜、名物六帖、僧道作業・南史融傳、四月八日建齋、並灌佛、僚佐偈者、多至一萬、融獨注視百錢、偈字彙裏也、蓋偈施之義、

八月五日、　公與本田兼親盟、同上、

三年癸未夏四月九日、故幕府足利義稙薨、法名道舜、稱惠林院、據將軍家譜、北郷忠相使族人右衞門尉尚久守野野美谷城、據島津支流系圖、原書、北郷持久第五子曰周防介常久、尚久、常久子、冬十一月八日、伊東大和守尹祐與北原氏攻之、尚久戰死、伊東氏取野野美谷城、據島津支流系圖、壹岐彌四郎家藏文書、東光坊家藏伊東家略記、伊東尹祐、祐國之子也、祐國見第十卷寛正五年、　十二月七日、秩父十郎兵衞系圖作五日、　公遣伊地知縫殿助重周・吉田某攻槻野、新納氏邑、　新納近江守忠勝擊破之、重周死、據大翁公舊譜、島津支流系圖、秩父十郎兵衞系圖、槻野或作月野、郡村高辻帳、救仁院有槻野村、　重周、季豊之玄孫、忠勝、忠武之子也、據島津支流系圖、秩父十郎兵衞系圖、伊地知季豊見第八卷應永九年注、新納忠武見第十二卷明應三年、

四年甲申秋九月二十九日、肝付兼興復攻串良城陷之、殺六郎三郎忠吉、忠吉、島津季久之庶孫也、據島津内膳家譜、初公下曾於郡、以賜本田兼親、據島津支流系圖樺山氏譜、本田信次郎家藏文書、

1964

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衞門」

去年者乍若輩以明星院申入候處、雖毎度之儀、御懇之御執申、殊於御殿中御意過分之由物語候、誠以忝存候、抑已前如申候、至伊東尹祐御助言之次第、御丁寧之至不及申候、就其彼方被申事逐可承候、先庄内弓矢之事、北原對山田競望之時者、可有与力之由候、然者其旨北原江申遣候、如返事者、對北郷左衞門尉徹底雖不構疎略候、伊東代々知音之事候、又者領中近所之間、應彼進迎候之由候、兩方區之儀不及分別候、山田・野々美谷之事、本主へ可返付之由候、北郷申事者、山田者先年北原兼珏去渡候刻、直又鹿兒嶋之儀安堵之地候間、於于今者從他方可被相綺事無覺悟候、野々美谷樺山安藝入道以談合、事既治定候上者、是又不可及違變之由候、兩条實難成子細候、次黄揚尾・三俣領地之由被申候哉、大濫吹之儀無是非候、所詮、条々寄事於左右、難澁之儀迄候者、舊冬已來至此、彼北郷被官之者被討捕候、剰去九、山田・野々美谷堺數勢差寄合戰候、北郷雖得勝利候、彼方之計略如此不相止候、然間度々爲返報黄揚尾へ近日被遣候、此方不出手儀候間注進候、又々庄内出張之風聞候、急度被加成敗候様、

御入魂併奉憑候、御老中各雖可令申候、就便宜染筆候間、無其儀候、得御意候者可爲祝着候、毎事期後喜候、恐々謹言、

「大永二年」
二月廿八日　　忠朝
本庄伊賀守(右述)殿　御宿所

1965
「殖國名藪中」
大永二年壬午
四月廿六日、北郷六郎久家　庄内梶山に討死とあり、

1966
「豊州家忠朝譜中」
「案文在都城衆野邊懃右衞門」
就渡唐船之儀、度々御屋形様以御書蒙仰候、誠忝奉存候、絹川佐渡入道船之事、去年既令渡洋候、吉河出雲守待居順風候、各不可有疎略之由、宜預御披露候、恐々謹言、

「大永二年」
六月十八日　　忠朝
香西(元盛)殿　御宿所

1967
「仝上」
御書之趣具拜見仕候早、抑二號船之事、就當津着岸、警固之儀蒙仰候、奉得其心候、於于今者客衆各歸國之条、肝要令存候、以此旨、宜預御披露候、恐々謹言、

六月廿三日　　豊後守忠朝
謹上　寺町石見守殿

1968
「仝上」
就二號船之儀、從御屋形様御書并御添状之趣、具令披見候早、彼客衆依不慮之錯亂、大友義長頻雖欝憤之儀候、以無爲御入魂各歸國也、肝要存候、定而時宜可被聞召及之条、不能詳候、恐々謹言、

六月　　忠朝
寺町石見守殿　御返報

1969
「寫有巻本」「勝久譜中」
泉涌寺舍利殿等事乱後如形修造候處、近日既及破損之條、被歎思食之間、早以都鄙之奉加、可致再興經營之由、所被成　勅裁也、分國中勵涯分助成、令致嚴密之沙汰者、

尤可爲神妙之由、　天氣所候也、悉之、以狀、

大永二年七月廿日　　右中將在判（九条稙通）

嶋津殿（勝久）

1970

「寫在巻本」「仝御譜中」

就泉涌寺造營之儀、被成　勅裁候、國中可然之様被申付候者、可爲祝着候也、狀如件、

「朱カキ」「大永二年カ」八月二日　　在判（近衛尚通）

嶋津殿（勝久）

1971

「寫有之」

就泉涌寺舍利殿等造營勸進之事、被成　勅裁候、別而以勵助成候者、尤神妙之由被仰下候、同分國中各一段奉加之儀被仰付、使僧早々上洛之事、可爲御懇志候、恐々謹言、

（大永二年）九月廿六日　　重親（庭田）

嶋津殿（勝久）

1972

「見于本田兼親譜」

一大永二年兼親年六十一、壬午八月五日、　忠兼主賜兼親誓書、

其所以然者、永正十六年己卯十一月廿七日、伊集院尾張守背　忠兼主、楯籠曽於郡城、同十二月八日、新納近江守忠武合意於尾張守、遣士卒於曽於郡城、同十七年庚辰八月廿一日、　忠兼主着陳、攻之無功、　忠兼公自幼與兼親爲親子約、故兼親年五十九、怒不利戰、定死於一途、堅我清水、數謀數戰敢不退、終城兵勞、同十一月廿七日降參矣、大概擧此功、將來不變約也、

1973

けいやくしやうの事

一ようせうよりしん〳〵のけいやくいまにあいかハらす候、しかれハすきしゆミやにそのこほりの事、すてにてきしやうになり候をも、それの一人ふミこたへられ候ゆへに、ほとなくてにいり候、そのほかちう〳〵ちうせつの事、ゆくすゑはうきやくあるましき事、

一みかハふしいよ〳〵とうかんあるましき事、

一ふしんのしさい候するときは、たかひにかたりひらくへき事、

みき、このてう〳〵よきなくほうゑんをひるかへし候、

右條々一言一句僞申候者、

奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神地祇冥道、

惣而日本國中大小神祇、別者正八幡大菩薩　當所鎮守
諏訪上下大明神　春日大明神可蒙御罰者也、
仍起請文之趣如件、
大永二年壬午八月五日　修理太夫忠兼(花押)
本田因幡(兼親)守殿
「勝久公御譜中、正文在本田作左衛門宣親トアリ」

1974 御文書之事、少見出し候間參候、御一門之事に候間、尚〻見出し候ハヽ、まいらせへく候、隙之時ハたま〳〵見申へく候、肥前守殿も御悦喜可有之哉、万吉、恐〻謹言、
大永三年ミつのとのひつし五月　日
高城重興(花押)
山口九郎右衛門尉殿　御宿所
「勝久公御譜中」
「寫在巻本」
(本文書ハ一九七一号文書ト同文ニツキ省略ス)

1975

1976 「豊州家忠朝譜中」
「案文在都城衆野邊惣右衛門」
雖未申通候、連〻御床敷存候、殊御親父様於京都、吳于他申承候之間、不相替得御意度心中候之条、乍次令啓候、遼遠事候共、自然相應之儀蒙仰可致馳走候、於向後者無指題目候共、細〻可申承候事本望候、猶此仁令申候之条、省略候、恐〻謹言、
「大永三年」一二月廿六日　賴興
「裏付」吉見大藏大輔
嶋津豊(忠朝)後守殿　參御宿所

1977 「仝上」
其後連〻可申入候之處、依弓矢執亂罷過候、頗失本意候、抑就隠謀之族御成敗、貴國聊御忿劇候由、舊冬縣傳風聞候、誠無御心元奉存候、雖然早速御平均千秋万歳候、猶當時之儀爲可承飛脚幸藏司進之候、將又庄内弓矢之事、未相止候、爰元之儀委曲彼僧申含候、弥御入魂所仰候、恐〻謹言、
「大永三年」二月廿八日　忠朝
本庄伊賀(右述)守殿　御宿所

1978

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

就舊冬爰許之時宜其聞候、示預候、祝着候、逆心之族一兩輩加成敗、聊無吳儀之趣、猶本庄伊賀守可申候、恐々謹言、

「大永三年」三月廿八日　　親敦（大友）

嶋津豊後守（忠朝）殿

1979

「仝」

誠依遼遠連々不通之至、背本意候、抑就舊冬爰元之時宜、委細示預候、内々申聞候、祝着之段以直書被申候、今春以來當國弥靜謐候、可御心安候、其方角御弓矢之事、于今無一途之由承候、無御心元候、時宜必追而可申談之由候条、先令省略候、恐々謹言、

「大永三年」三月晦日　　右述

長景

「裏付」臼杵民部少輔「大友殿家子也」

嶋津豊後守（忠朝）殿

本庄伊賀守

1980

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

去春之比進飛脚僧申入候處、雖不始儀候、御懇之御執合、殊以御直書蒙仰候、寔忝存候、抑毎度如申候、庄内弓矢伊東尹祐弥其結構候、先年爲御助言、定惠院御下向之時、尹祐被申事者、山田・野々美谷本主江返付候て、不然者從守護知行候者、鉾楯可相措之由候き、然處山田城近來北原入手候、野々美谷先年守護格護之様候、已前尹祐被申候辻成行候、此節御調法併奉憑候、北郷左衛門尉已及難儀候、以御憐愍御入魂所仰候、委曲從鹿兒嶋可被申候間、不能詳候、恐々謹言、

「大永三年」六月廿日　　忠朝

臼杵民部少輔（長景）殿

北原四郎左衛門尉殿

本庄伊賀守（右述）殿　御宿所

1981

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

將又雖左道之儀、打疊百枚・毛錐子卅對令進入候、表祝言計候、

如仰愚父上洛之砌、甚深得御意候由承及候、連〻御床敷
令存候處、御珎書之旨拜見、怡悦誠不浅候、并打疊百枚
・毛錐子卅對贈給候、賞翫之至候、殊於向後者、其方相
當儀可得御扶助之由蒙仰候、令祝着候、至此増亦琉球邊
御用等示給候者、可致奔走候哉、心緒幸福太夫申含候之
条、閣筆候、恐惶謹言、

「大永三年」七月廿一日　　忠朝

吉見大藏太輔殿　御返報

1982

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

雖些(ママ)子之儀候、沈香十兩・唐扇二本進入候、表不空
計候、

林鐘十日御札委細令拜見候、到肥後國依在陳之儀、御報
延引爲恐千万候、抑其堺弓箭之事、伊東尹祐猶以結構候
欤、無是非候、當方覺悟之躰、先年以定惠院被申述候之
趣、今以同前候、當時就中國干戈、大内殿爲合力、諸勢
發足之刻候之条、被取亂無合期様候、雖然必其面靜謐之
調法、可令入魂之由、猶期後音候、令省略候、恐〻謹言、

「大永三年」八月十一日　　右述　長景

「裏付」臼杵民部少輔

嶋津豊後守(忠朝)殿　参貴報　　本庄伊賀守

1983

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

雖未申通候、以事次令啓候、就御家門御由緒、連〻匠作
被仰通候、御無案内之条、于今御無音被背御本意候、仍
以御書仰候、并五明三本得其心可申旨候、抑近年依都鄙
忿劇、御家門領一向有名無実候、公私零落過賢察候、以
舊奴匠作御助成之事被仰懸候、同艘馳走申候也、可爲御
祝着候、併御賴之由仰候、猶使節青色山伏可令申候間、
令省略候、恐〻謹言、

九月二日　　進藤筑後守
　　長并

嶋津豊後守(忠朝)殿

1984

「仝上」

御札具令披閲候旱、抑就修理大夫蒙尊儀候、至私被成御

書候、誠過分之至候条誠忝、并五明三本拜受、畏頂戴賞翫吴于他候、兼又都鄙之忿劇御領等御□意之儀承候、定忠兼可致馳走候哉、可準彼儀候、此方干戈之轉變、又御使節可有奏述候欤、雖些子之至、墨一丁（円形鱗文）、香一斤令進上候、萬可然様御執申憑存候、恐々謹言、

九月四日　　忠朝

進藤筑後守（長井）殿　御返報

1985

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

先度鹿兒島使僧之使宜令啓候、御返札慥披見祝着不少候、其後連々雖可申通候、依遠路相似如在候、非本意候、仍尹祐父子去月初莊内越山候、然者新納忠勝一味之現形候間、北郷方爲与力從守護隅州薩州之人衆被差遣、庄内互之鉾楯最中候、已前從豊州老中承候趣者、尹祐へ先可有無爲之御助言之由候き、無承引次第歴然候、於爰者一途之御計議憑存候由、今度具申入候、彼方被慰御裁許、其堺目御武略所仰候、庄内落去候者、我等亦難儀必然覺候、忠勝回變以來串良防敵路候、旁氣遣可有御察候、雖遼遠候、毎事被添御心者可爲本望候、猶此僧申含候間、閑筆候、恐々謹言、

「大永三年」十一月六日　　忠朝

土持右馬頭殿　進之候

1986

「仝上」

去秋就薩州使僧之使宜申入候、御返事御懇之至祝着仕候、抑至伊東尹祐可被加無爲之御助言之由承候間、得其心候處、首尾如何候哉、去月初旬已來、尹祐父子庄内令越山、競望弥奔走候、然者新納四郎一味候之条、當國之忿劇倍増無是非候、先札如承候、以無爲之御調法、屬其儀候欤、於無承引者、土持親采被添御力、一途之儀偏奉憑候、北郷左衛門尉不運相窮分候、彼堺没落候者、我等難儀亦可爲當日候、御累代仰御扶持事勿論候、庄内之御調併可爲御助成候、以御入魂早速預御裁断候様、御執申可畏入候、委曲猶彼僧可申述候哉、恐々謹言、

「大永三年」十一月六日　　忠朝

臼杵民部少輔（長景）殿

本庄伊賀守（右述）殿

1987

「仝上」

衆徒評議之狀逐一令披閲早、抑犬神事當家風專之、著于書中其然乎、凡狐犬神呪咀惡靈之祟、洛夷古今往々人普所謁之、何限此境之俗、縱雖曰卑劣盗賊之輩、功言構虚以有可宥比丘之心乎、況又於即事而眞之宗旨措、即以成佛之觀念、可想衆生之惱亂乎、倩加凡慮堆忘法衣住慳貪欲心、爲人發憾一念屈執以被此非者乎、又依過去之因償夙債者乎、一行阿闍梨、遇於菓菰之難肇、法師係於獄中之鬩思之、則幸与不幸道俗豈可知乎、所詮、平曰於不修行戒比丘豫可有擯出者也、被許容破戒之故、終逮衆中之瑕瑾矣、向後屓邪心之僧侶、於神前可遂起請之明決事專一也、然而怨靈惡鬼借巫祝之口、妄誑言在可稱證人其身耶、若又有欲證人者糺明可爲勿論、其時爭有偏頗嘗不構疎略堕慢之機、後來亦不可變易、然則裟門弥守嚴密清淨之意、檀那增事信心堅固之思至祝々々、

爰阿多源次郎號第々敵殺客威德院非所及是非、就之門徒中停止彼祈禱云々、當然之理也、雖然還可準擬調伏人者乎、濟迷妄之輩可爲慈悲廣大之本然、必後日所可訴申也、次門中五戒愼之兩条、尤以神妙也、毎年理繆不断之勤行、併郡郷之繁榮、軍容勝運之基也、仍可勵敬心之狀如件、

「大永三」　霜月十五日　　忠朝

衆徒中

1988

「北郷讃岐守忠相譜中」

野之三谷城者樺山氏代代爲住城、移小濱之後忠相領之、大永三年癸未十一月、伊東・北原率數千騎、繞攻于野之三谷城、城兵防戰討伊東之一族、城主北郷右衞門尉尚久遂戰死、然城兵猶雖保之、糧盡終降、爲伊東之有、

1989

「庄内平治記」

一野々三谷ハ椛山氏代々の住城也、然といへ共安藝守長久小濱ニ移られける後ハ、隣方なれハ彼處を忠相の領地として一族北郷右衞門尉尚久ヲ城主とし、彼處ヲ守らしむ、しかりし處ニ大永三年十一月八日、伊東・北原襲來て數千騎ニて責ニける、右衞門尉尚久諸卒を勇て防けるに、伊東尹祐手勢を卒し大谷の北ニ招て軍の下知し居たりしか、城中の兵ニ只中ヲ射通され、馬より落て死す、是を始て城中ゟ差つめ曳詰射たりける、兩陣より射違る矢、恰も急雨の如くなれハ、城の大將右衞門尉尚久流矢ニ當て死す、城兵弥牙を嚙防戰數日

を送るといへ共、城中已ニ粮盡て勢氣自然ニ疲れ果、此城終に落去せしかハ、弥伊東・北原か雅威を振ふの便となる、

1990

「勝久公御譜中」

一大永三年癸未十二月七日、使伊地知氏・吉田氏爲將、發於麗島向月野、人體戰死七百卅八人也、

1991

「見于新納譜」

一粤去大永三年癸未不圖兵革懿起、然則守護方當方既逮義絶、然處敵方卒猛兵、此家欲爲對治於恩領槻野之条、家來之士卒少々懸合、相當之禦矢射處仁、守護方運命聊傾乎、打死虜數百人、得忽軍利之勇於戰場、播既名譽之勢於萬方云々、

「前後省文」

大永七年丁亥十二月二日　藤原朝臣忠勝判

1992

「殉國名藪中」

大永三年癸未

十一月八日、北郷右衞門尉尚久　伊東氏・北原氏兵を合せ、野々美谷城を攻るを拒き、城守して戰死也、　樺山七郎久秋・宮丸次郎太郎久形　以上二人此城にて戰死とあれは、此日の事歟、

十二月二日、伊地知縫殿介重周　秩父氏の祖なり、大翁公の命をもて、本田若狭守と新納江州忠茂　異本ニハ忠武トモ、を月野に討て利あらす、五日梅淵に戰ひ死す、年三十六歳、一族家臣十六人死之、　伊地知新四郎左衞門子なり、五日の列ニもミゆ、前田源右衞門尉・前田安房守　法名永觀、前田彦左衞門尉　法名月江、

五日、弟子丸備前守　月野にて戰死とあれは、重周と同時ならん、

此年、伊地知左衞門尉　高城にて戰死とあり、十左衞門祖なり、

1993

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衞門」

串良院之事、安千代殿讓進候之通申出候ヽ、已忠勝御領常之上者、寄ゝ人衆早速以御奔走、警固之儀可爲肝要候、聊不可有變違之条勿論候、彼堺番衆已下無吳儀様可送給之事、可爲祝着候、并地下人之儀憑存候之由、志布志へ令申候、同被添御心、被加不便候も本望候、恐ゝ謹言、

「大永四年」九月十三日　忠朝

新納尾張守殿　進之候

1994

「殉國名藪中」

大永四年甲申

九月十九日、島津六郎三郎忠吉　豊州家季久七男備前守安久の二男なり、串良城の戍將たり、肝付兼興に攻られ拒戰、死之、

1995

「相模守連久譜中」

「在田布施常珠寺」

奉掛著長鐘一口大日本國西海道薩摩州田布施村大平山常珠禪寺堂、

本願施主藤原忠幸公寄進、雖然如是依破損、勵再興之志、命工陶之鑄之、加之十方旦越戮扶助之力、以畢功矣、

皆大永四季甲申九月廿日

住持比丘宗麿

大工信在

1996

「新納忠勝譜中」

「寫在新納三河忠徳入道楚弓」

思之外依一亂被申濟候、誠〻失本懐候、抑度〻被進使僧、無爲之儀雖裁許候、御返事半相滞候之條、無心元被存候處、結句近日者被仰放候分ニ候て、如何ニ候、仍雖憚多申事候、本田方之事、從累年代〻被仰合候故候哉、今更御儀絶不可然候、剰當時被對此方御等閑之様ニ候、如今弓箭相支候ハヽ、一定足輕以下餘成敗、於御方亂入民屋及至御寶殿、自然類火出來候ハヽ、無覺悟神敵ニ罷成候者、自他現當二世之可爲惡行候哉、所詮、希者一社被休矛楯、閣諸方之与力、偏被奉敬神慮、天下太平、國家安樂之御祈念、貴賤萬人可爲歡喜候、但無盡期於可被挾御遺恨者、却爲社家非被崩　八幡宮候也、然者不可有方中之咎御存知之前、忝茂遙出本覺之都、和光同塵之御交、大慈大悲之御志眼前之處、豈可屬無篇哉、哀〻此等之趣於御得心者本望候也、恐惶敬白、

「朱カキ」
「大永四五之間欠」

少春廿一日

限江伊勢守
匡久在判

中野安房守
歳信在判

御一社中
貴宿所

1997

「上書」

肝付殿へ串良被進候時之草案　新納忠勝

串良之事、嶋津豊後守忠朝格護之地其様御頼之条申談、指懸弓箭漸至一兩載、然者忠朝彼城對我等雖被去渡之、

一諾依兼約、大永四年甲申臘月三日進之候就「訖イ」、抑代々申承候、「取カイ」兼忠・兼連・兼久・兼興及別而自當家先祖於拙者「於ヲ」今深重々子細、就中兼久未垂髪之比、肝付家風親類并被官等企隠謀、守護方江申合逆乱之故、已兼久離散住所愚領山中經年月、至肝付「イナシ」討本城入部候キ、今又當代飜法印以血判申定之上者、雖無餘儀候、一段抽志候「且イ」上者、後胤「五イ」幸如何様於冤恨出來候、令看讀此一翰、欲仰孝道不可爲義絶者也、仍乍慙愧爲其裏書之、慶事、恐々、

于今大永四年甲申十二月三日　忠勝

謹上　肝付兵部少輔（兼興）殿

散住（サンナウ）是能候也

1998

追日御慶書目出度候、抑任御賀例、先々用賀札候之處ニ、御祝着之旨恐悦候、近日志布志ニ御越、増々忠勝さ「新納」まへ可被仰合之由、此方及も大慶候、舊冬御使者牧瀬「摂津介カ」方へ如申候、御校量可目出度候、

一御方至高山新城御企之由、尤肝要に候、御武運増長、此方及も大慶候、

一祢寢界雑説候らん、雖不申共候、無何事様ニ御調儀專一候、

一鹿兒嶋年頭賀札及祝言申候間、時儀不承付候、今月末以使者、守護御礼可申上當文に候、篇目候ハ、態申入へく候、

「祝答院伊勢守重武」

一嵐浦舊冬被申遣候儀、及年頭承事なく候、御方へも其分候らん、是又不審之時者申通へく候、

一山東弥々申承候、彼方よりも同前に候、須木裏未取、「義祐」肥田木氣合少乱候ッ、雖然伊東殿老中以吳見可爲無事調義最中候、當院ニも同前催促之由候、

一庄内北郷殿界色々申散候間、しハち（志和地）・山田城誘爲可申付、年行少々罷越候、弥々新納殿申合候辻、財部・梅北ニ愚領庄内より可申通由、毎々申付候、御同前ニ忠勝御校量可爲滿足候、心事雖多期來喜候、恐々謹言、

「大永四五年比カ」一二月七日　「十一代北原民部少輔」久兼（花押）

肝付殿（兼興）

御返報

1999

「庄内平治記」

一伊東・北原日州に跋扈し忠相の地を略す、新納ハ一家の好みを忘れ、是も忠相の地を侵す、本田もまたこゝろよからす、斯りしかハ伊東・北原・新納・本田とこ

ゝろを合、忠相を攻んと相儀し、伊東ハ佐土原ニ陳ヲ堅め、川南・川北・三俣の高城・山之口・梶山・勝岡・野ゝ三谷の兵を合て、都合六萬八千余騎より鋭兵八千余騎を催し、忠相を討んとす、北原ハ飯野・加久藤・三之山・志和地・高原・山田・馬関田・栗野・横川の城を構へ、一萬余騎の勢を以て是も忠相を拒ミける、新納ハ志布志・安樂・夏井・櫛間・大崎・松山・恒吉・梅北・岩川・末吉・財部の城を守て、八千の兵を催し、忠相ニ敵對す、本田ハ清水・曽於郡ヲ初其外隅州の城を領して忠相ニ讐をなす、伊東・北原か領凡三十餘所の軍勢二萬六千乃至本田か勢を并八方を圍む、忠相討んとす、忠相武略の勇將なれハ、都城と安永との兩城ヲ相構て、纔ニ八百の小勢ニテ四維（ユイ）の敵ヲ物ともせす、八方相當り一文字ニ破て通り縱横ニ突戰す、敵を味方をくらべハ、大海の一滴、九牛か一毛ニも及ひかたき勢なれとも、窮鼠猫を嚙ならひ、百錬千鍛手を盡し、磬控縱送氣ニ應し、猛勢ヲ掛散し堅陳を衝打して、伊東を山東ニ追退け、北原を眞幸ニ靡け、新納を遠境ニ追散し、本田か勢も敗走して恰も潰へたる瓜のことし、かゝりしかハ忠相の武威三州ニ並なく、名譽ヲ四方ニ振れしかハ、一朝の諺ニ生身の摩利支天ハ忠相也とそ申ける、

2000 「正本在楚弓」

（本文書ハ一九九六号文書ト同文ニツキ省略ス）

2001 「國史 巻十五 大翁公」

五年乙酉、是歳執政本田次郎左衞門尉親尚讃兼親於　公、収曽於郡而己自取之、兼親怒築清水隼人城而據之、親尚又以横瀬・波留毛・餅田、易樺山氏小窪・河北・臼崎・持松等地、亦自取之、樺山太郎左衞門尉信久築城生別府而據之、與兼親共爲首尾相救之備、（據島津支流系圖、樺山玄佐自記、清水隼人城遺墟不詳、國分郷有隼人城遺墟、踊郷中津川村有地、名横瀬、重富郷有春花村、讃曰波留計、即波留毛、餅田村在帖佐郷、已見第六巻延文二年注、國分郷小濱村有生別府城遺墟、在地頭館西南二里許、信久、長久之子、兼親之壻、據島津支流系圖、親尚、兼久之曽孫也、據本田家總譜、本田兼久見第七巻永和三年、）

2002 「殉國名藪中」

大永五年乙酉

田代肥前守清隆（喜入家二代頼久の與力にて、顯娃氏の寇を拒き指宿堺に戰死、姑く此に置て考を俟、）

2003

「相模守運久譜中」

「正文在坊津一乗院」

加春之御慶自是可申上候之處、遮而被仰下、殊ニハ配供令拜見候、抑其方無爲ニ罷成候者、渡海仕、最前可令參入候、恐惶謹言、

「朱カキ」「天文五年」潤正月廿一日　藤原運久（花押）

進上　一乗院御内宿御中

「上包ニ有之」進上　一乗院御内宿御中　藤原運久

「右裏ニ有之」嶋津三郎左衛門尉

2004

誠御慶重疊、仍此前令啓候處、御丁寧之御返事、今又御懇之至、先以畏入候、路次忍得候ハヽ、以使者雖申入度候、不輙候条、先刻眞幸迄細碎申候、其分被相達候由承候、滿足候、

一金吾江「日新公」連ゝ被仰合候由承候、近來可然候、

一初千代殿「島津実久」様へ御音書之通承候、是又肝要存候、

一鹿兒島邊之躰者、當時相聞候分者、其方偏御誘候之由、申散候、新納殿其方御隔心被相成候由可然之由、御校量共候なる、定被聞召及候らん、御心底茂自然彼儀宜被思召候由、追而示給可有御心得候、

一蒲生殿「良清」此方事連ゝ心添申候通被聞召付、御懇承候、今及ハ雖不甲斐敷候、聊無余儀申談候、此故候らん、於于今茂少茂無如在之躰候、

一入來院東郷「隅岐守重朗」彼兩所へ御心中之趣承候、尤候、此方へ被仰合候上ハ、是又不有余儀候哉、早晩可爲同前事ニ候哉、

一頴娃殿「山城守兼心」御舎弟様「小四郎兼洪」を養子之由、初春之比傳説ニ承候、不知案内事候間、直ニ御喜なと不申候儀、御兄弟御事欠、自今以後者常ゝ可申通様ニ有度候、御心得之前候哉、

一此堺之事指寄一途事者、從有方暫与被吳見共候間、先ゝ任彼儀候、何様追而細ゝ可申通候哉、慶事、恐ゝ謹言、

「大永五年ナラン」二月八日　「祁答院伊勢守重武」嵐浦（花押）

肝付殿「兼興」御返報

2005

御吉事萬歳ゝゝ、抑貴國立柄細ゝ示給候、祝着候、益御堅慮專一候、

一於高山新城、以御誘可有御移候由候、目出候、於御近所者相當義可申談事候、此等之趣御同前承候、本望候、

一菊池重治可爲在限部覺悟候、但必定之義難計候、

一御舍弟（「兼興ノ」「兼洪」）・頴娃山城（「兼心」）守方契約（「養子」）之儀候哉、尤肝要候、何様彼方角へ態可令申候、

一女中（「兼興・兼洪ノ妹」）堅固候、滿足候、殊松二郎丸（「兼興甥ナラン」）兄弟是又勇健候、懸御目度候、被添御心御懇之至、誠祝着候、其外當國之義口上申候、恐々謹言、

（「大永五年」）三月十七日　武顯（「伯耆氏」）（花押）

肝付殿（「兼興」）　御報

2006

態令啓入候、仍當時世間之躰措諸事候て、武具不可如用意之儀候、爰元以得心相過其身之分限、物具兵具所持之人數、一段忠節之基不可過之候、先々被相勵家中并以下人衆等、被致用意候者、此夏中何様罷越候て、以一見其喜可申候、委細者老者共可申候之間、閣筆候、恐々謹言、

（「大永五年」）卯月十四日　忠兼（花押）

攝津守（「忠誉也」）殿

2007

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

其後連續可令啓候之處、依執亂無其儀之条、非疎略候、抑年來如申候、當國之忿劇更不穩候、畢竟伊東爲張本如此候、彼方被加御下知候之由、与黨不可有差事候、御代々奉憑候辻、急度被添御力候之由、誠可畏入候、以連署雖申候、別而御入魂所仰候、仍見來之間進之候、猶此僧可申述候、恐々謹言、

（「大永五年」）六月十六日　忠朝

北原伊与守（右並）殿　御宿所

2008

「仝上」

毎々御床敷雖存候、依遼遠無音之儀非本意候、抑此方弓矢之執亂被聞召及候之哉、度々如申入候、貴國之御力奉憑候外無他儀候、就之御老中へ進使僧候、此節被添御心候様、御入魂誠可爲祝着候、諸事可得御意之由、彼僧申含候、御指南所仰候、仍進之候、左道至極候、恐々謹言、

（「大永五」）六月十六日　忠朝

田所勘解由左衛門尉殿　御宿所

2009

「仝右」

以連署雖申候、別而令啓候、抑伊東方武略弥無間断候、一途不預御助成候者、難儀可爲必定、御累代奉憑事候、可然様御取合併憑存候、委曲之旨此使申含候、仍薄板一端進之候、祝儀計候、恐々謹言、

「大永五年」六月十六日　　忠朝

臼杵民部(長景)少輔殿　御宿所

2010

「仝前」

連々可申通之處、依遼遠無音之至、聊非疎意候、御同前候之哉、近來其堺之時宜不承及候、委細示預度候、仍去年以來薩隅干戈之事者、已前令申候欤、鹿兒嶋家督之儀、相州嫡男虎壽丸殿江被相讓、忠兼事者、去卯月中旬之比、薩州伊作院隠居候、其次第早々雖可令注進候、豊州飛脚之僧先日歸國之時、定而可有物語候之間、令油断候キ、抑至爰漸可爲靜謐欤之由存候處、本田因幡守在城清水ニ楯籠、猶以相支候、然者曽於郡衆中對城(マヽ)柱思案相違候欤、新納・北郷方入計略之案裏近日去渡候、依此時之變化、守護譜代之家人等、亦寄々少々新納忠勝隨逐候間、彼弓矢弥事起分候、悉皆我等可歸一身之難儀事暦然候、但無面目乍申事、當家之破滅時至候上者、不及力候、薩摩南方邊者鹿兒嶋雖義絶、互戰防等之事者、當時無之候欤、近所堺目之儀未相替候、如何様武略不可措候、自然之儀御入魂憑存候外無他候、此飛脚豊府路次傳又可爲御煩候、無申事候、恐々謹言、

「大永五年」六月十六日　　忠朝

土持右馬頭殿

2011

「仝前」

先年者態々芳信御懇切之至、于今祝着不少候、其以後尤可令啓候之處、依弓矢之執亂罷過候、非疎略候、抑伊東方計議猶以倍増候条、一途預御助成度之由、御老中へ申入候、此方入部以來奉憑事、其上二號船之時、已爲御瑕瑾之由、度々承候間、勵忠儀候次第歴然候、就其伊東此堺競望候之由、別而可被添御心之由、御約諾与證之御狀等給置候、來秋者又必可蜂起趣候、御入魂併憑存候、向後甚深被懸御意候ハヽ、可爲本望候、仍薄板一端・花瓶一對進之候、心事期後音候、恐々謹言、

「大永五年」六月十六日　　忠朝

佐伯殿　御宿所

2012

「仝上」

其後可申通候之處、當國更以不平均候之条、依執亂疎遠之至非本意候、抑伊東方隠謀之結構弥顕然之儀、不及是非候、毎度如申入候、此節御助成併奉憑候、爰元之安危委曲常春院申含候、可然様御入魂所仰候、恐〻謹言、

「大永五年」六月十六日　忠朝

本庄新左衞門尉殿

木上大炊助殿

臼杵民部少輔殿（長景）

北原伊与守殿（右並）　御宿所

2013

「仝上」

就爰元之儀、御老中迄進使僧候、時宜任先例、預御取合候者、可爲祝着候、抑御親父様御懇切之次第、難忘存候、向後亦不相替可申承事本望候、國中之干戈無止候、被添御心候之様、御馳走所庶幾候、仍進之候、猶此使申含候、恐〻謹言、

「大永五年」六月十六日　忠朝

本庄新左衞門尉殿　御宿所

2014

「仝上」

連〻雖可申上覺悟候、依忿劇不能其儀候、頗失本意存候、任連綿之旨、弥御扶助可畏入候、仍御太刀一腰正眞・鍮銘火鉢一令進取免之候、誠奉表御祝儀候、以此趣、宜預御披露候、恐惶謹言、

「大永五年」六月十六日　豊後守忠朝

謹上　大友殿（義鑑）　人〻御中

2015

「樺山氏七代信久譜中」

國老之中〻有稱本田次郎左衞門尉者、專私欲行暴虐、時人愁焉無不歎者、信久之妻者本田因幡守之女也、是以因幡守之嫡男與三河守爲兄弟、致水魚之交、先是太守　忠兼公賜曽於郡於因幡守、于時雖爲同姓、次郎左衞門尉以妨、未久已被悔返畢、故因幡守止出仕、大永五年九月二日、築清水隼人之城、太郎左衞門尉亦築小濱生別符城者同日也、

2016

「樺山玄佐自記」

一去程に世間騒動す、太郎左衛門尉妻は本田因幡守娘な（兼親）れは、因州嫡男三河守廣久江（親安）以一味、此沙弥十三の年、（玄佐也、永正十年生）

參河守（親安）は清水隼人（今ハ国分）の城（ヲ）、太郎左衛門尉は小濱生別府の城を、大永五年九月（乙酉也）二日同日ニ是を取る、其比溝邊肝付三郎五郎（イニ者）眞實同意之旨也、「下文末ニアリ」

2017

「薩州家四代忠興譜中」

大永五年乙酉十月九日卒、法號隆岳興公、

2018

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城衆野邊惣右衛門」

爲先日御音問御礼、被進使節候、仍其境鉾楯之事、先以至伊東被加助言候、定而境目可爲靜謐候欤、猶以及亂忿候者、追而一途可被申談候、此謂至鹿兒嶋被申候、委曲定惠院可有演説之条、不能一二候、恐々謹言、

閏十一月三日（大永五年）　右並（上之實名右並）

長景（裏付　臼杵民部少輔　北原伊与守）

嶋津豊後守（忠朝）殿　進覧之候

2019

「仝上」

就先日其堺之儀、御使僧祝着候、先以至伊東加助言候之趣爲可申、定惠院進之候、仍太刀一腰・織物一端進之候、猶老共可申候、恐々謹言、

閏十一月三日（大永五年）　義鑑（大友）

嶋津豊後守（忠朝）殿

2020

「國史（巻十五）　大翁公　大中公　梅岳公」

六年丙戌春二月二十日、　公與盟書島津攝津介忠譽、忠譽、賴久之養子也、（據島津支流系圖喜入氏譜、島津頼久見第十巻文明二年、）夏四月、後柏原天皇崩、

後奈良天皇立、（據日本王代一覧）曽於郡人背本田親尚、北郷忠相因之、五月二十日、遣族人左京進、擊曽於郡、城中有内應者、開門納之、忠相遂取曽於郡、使族人次郎右衛門尉久利領之、（據島津支流系圖、原書、北郷知久次子左京亮信久孫曰左京忠眞、久利、北郷持久之庶孫、）初公以島津八郎左衛門尉實久（後更久意、稱薩摩守、）之姉爲夫人、任實久以國政、實久專、遂求爲　公之嗣子、　公叛實久、又去夫人、實久怨　公跋扈益甚、　公患之、乃遣本田親尚、告伊作領主梅岳君曰、願以國事爲託、賜梅岳君南郷、公如伊集院、又遣島津下野守昌久、賜梅岳君日置郷、

據梅岳君舊譜、島津支流系圖薩州家譜、黃奪軍記、　實久、忠興之子、昌久、延久之子、據島津支流系圖、島津忠興・島津延久見第十二卷明應九年、　梅岳君、伊作久逸之孫也、父曰又四郎善久、母新納氏駿河守是久之女、善久早卒、新納氏以梅岳君適島津相模守忠幸、忠幸無男、以梅岳君爲嗣、與之阿多・田布施・高橋、由是梅岳君領伊作及阿多・田布施・高橋、至是又領南郷・日置、食邑合六、忠幸、友久子也、據島津系圖、梅岳君舊譜、島津支流系圖、又四郎善久為家僕所殺、年二十七、新納氏寡居、島津忠幸聘之、不可唱古歌曰、宇幾不之仁之津美毛也良天加和太計乃與仁太女之奈幾奈遠也奈加左牟、強之曰、吾當以菊三郎為嗣、與之阿多・田布施・高橋、於是新納氏再嫁忠幸、忠幸立菊三郎為嗣、與之邑如約、菊三郎、梅岳君之幼字也、　冬十一月六日、梅岳君如伊集院謝恩、明日公還鹿兒島、梅岳君從　公、令本田紀伊守董親、執梅岳君太刀、以寵異之、據梅岳君舊譜、黃奪軍記、本田氏世為公家御太刀役、黃奪軍記、本田氏世為公役猶云執刀職、　董親、親安之子也、據本田家總譜、本田親安見第十三卷永正十一年、為寵異、御太刀公未有継嗣、而梅岳君生子虎壽丸、　公欲以虎壽丸爲嗣、十二日、遣村田越前守武秀・土持伊豆守政綱・梶原備前守景豊、告梅岳君、梅岳君辭、弗許、十八日、召虎壽丸於伊作、二十七日、　公加虎壽丸元服、賜名貴久、稱又三郎、是日遂傳守護職於又三郎、是爲　大中公、據島津系圖、大中公・梅岳君舊譜、黃奪軍記、土持佐左衛門系圖、村田五郎左衛門系圖、村田政綱為大翁公國老、土持佐左衛門系圖、土持政綱日州縣城主土持氏支族也、仕大翁公為國老、而梶原善左衛門系圖、不云景豊為國老、諸家大概記云、梶原景豊歷事節山公・圓室公為國老、蓋至大翁公時、仍為國老、蓋　武秀、經安之孫、景豊、忠純之孫也、據村田五郎左衛門・梶原善左衛門系圖、村田經安見文明六年、梶原忠純見文明五年、並係第十一卷、　大中公生於永正十一年甲戌五月五日、母島津氏、薩摩守成久三郎太郎重久更名成久、稱薩摩守、之女、是歳年十三襲封、據島津系圖、公生月日不載、曷為書之、章俗說之繆也、俗說五月五日生子、女害母、然齊孟嘗君以五月五日生、及長身相齊國、名顯諸侯、男害父、女害母、然齊孟嘗君安在其害父也、若大中公者以五月五日生、而為本藩中興之主、由是觀之、五月生者其必非常人也、但五月五日生、而為本藩中興之主、由是觀之、在其害父也、若大中公者以五月五日生、而為本藩中興之主、由是觀之、五月生者其必非常人也、但五月子說見應劭風俗通、未聞和俗有此言也、　大翁公使梅岳君輔相之、又令百執事臣上盟書曰、恪事又三郎君無有二心、　據梅岳君舊譜、樺山玄佐自記、是年大翁公讓守護職於大中公、明年徙伊作、既而大中公避難如田布施、島津實久迎大翁公、復立為守護職、論者以為、是時大中公未成君、故舊譜云、大翁公奔豊後三州無君、於是島津忠廣・北郷忠相立大中公於伊集院、臣正誼・臣正懿・臣貞良竊謂不然、大翁公既以守護職授大中公矣、雖則實久逆大翁公為君、而大翁公未嘗廢大中公也、然則大中公雖在田布施、而其為守護職者固自若也、且夫三州守護職者源大將軍之所授也、而其為守護職者固自若也、得佛公之所受也、所謂世守也、非身之所能為也、借使大翁公今日授之、而明日奪之、如吾儕小人所謂納諸其懷、而從取之、則後世執筆者直辭書之、將不登其奪矣、況大翁公未嘗奪之、安在大中公未成君也、而曰大翁公奔豊後三州無君、嗚呼祖宗以來綿綿繩繩世守之國、其一日可以無君乎、且大翁公實久居鹿兒島、執國命似君、後世執筆者將使實久攝君位乎、昔者季氏逐昭公矣、而春秋書曰公在乾侯者、是國不可以一日而無君、又不以國與季氏也、武氏廢中宗矣、而綱目書曰帝在房州者、是天下不可以一日而無君、又不以天下與武氏也、況乎若大中公者、不為大翁公所廢、不為實久所逐、而曰忠廣・忠相定策立大中公、然後成君、不學無識甚矣、且非細故、故臣等極論之、以諗後之君子、實久逆大翁公於伊作、事在下卷、大永七年、納諸其懷、而從取之、見左傳襄公三十一年、唐書劉知幾傳、知幾曰史有三長、才學識、世罕兼之、嗚呼史官有三長者為上、有二長者次之、無一長斯為下矣、　大翁公既讓守護職於　大中公、後生修理大夫忠良於鹿兒島、又生三郎左衛門尉久孝於般若寺、又生二子於豊後、曰又四郎、曰宗俊、又四郎闕名、宗俊闕自稱、　忠良

生又三郎良久・久右衛門尉秀久・又兵衛尉忠辰、良久・秀久爲僧、忠辰改爲亀山氏、其後秀久還俗爲藤野氏、久孝・又四郎・宗俊並無後、（據大翁公舊譜、島津支流系圖、大翁公如豊後、見後第十八巻天正元年、般若寺在吉松郷）島津實久益横、稍有反謀、帖佐地頭邊川忠直築本城及新城而據之、以應實久、實久遣島津善左衛門尉安久等、將三百餘騎助之、　大翁公遣梅岳君擊忠直、十二月七日、拔帖佐二城、　大翁公賜梅岳君伊集院・谷山、以賞軍功、（據大翁公・梅岳君舊譜、島津支流系圖、黄蕉軍記、本城即平山城、已見第十巻長禄二年、帖佐郷三十町村、有新城遺墟、在地頭館北十町餘、邊川忠直為帖佐地頭、見第十一巻明應四年、）安久、忠經之孫也、（據島津支流系圖、島津忠經見第十巻文明二年、）初島津延久領川邊、傳至昌久、　圓室公時、昌久獻川邊、而身居田布施、至是因梅岳君求帖佐、　大翁公許之、以爲帖佐地頭、（據大翁公・梅岳君舊譜、島津支流系圖、黄蕉軍記、）是歳琉球王尚眞卒、（據琉球國王世譜、）

2021

「喜入氏攝津介忠誉譜中」

「正文在當家」

誓狀

一弓矢者儀偏可憑入候事、

一就諸篇可賴入候事、

一就如此申候者、若讒者雜説之時、申分可聞開之事、

一ヶ様ニ者乍申、眞実自其方可被背之時者、不可及力候事、

一於我等一代者、何様等閑疎略有間敷之事、

「牛王」

右條〻有相違事者、

奉始梵天帝釋四大天王三界所有天主地類、惣日本六十餘州大小神祇、別者伊勢天照大神　八幡大菩薩　摩利支天　天滿大自在天神神罰冥罰可罷蒙者也、

仍右如件、

大永六年二月廿日　　忠兼（花押）

（喜入忠誉）
攝津守殿

2022

又番城誘堅被仰付候へと御意候、

來十五可有御動候、五日之可爲誘候、依今一左右可被打出之由、　御意候、御油断有間敷候、又境目ニ敵見え候哉、毎日人衆出、時義を見せられ候へと申せとて候、次自清水音信候、當時無何事候、眞幸之様今日及者、不聞得候、爲御心得候、恐〻謹言、

三月十一日　　歳信（花押）

匡久（花押）

隈江

中野
匡久

（上書）
山田安藝（忠豊）守殿
御宿所

2023

「豊州家忠朝譜中」
「案文在都城衆野邊惣右衛門」

去年閏十一月三日之御札今月十七到來、具披見怡悦不少候、抑此堺鉾楯之儀連々令申候、以其辻至伊東御助言之由承候、誠本懐之至候、定而不可有違背候哉、於難澁者一途可被仰談事、是又所庶幾候、就之以御入魂、遠路之御使節、一段畏入存候、弥奉憑計候、爰元之委曲定惠院可被仰述候、猶從鹿兒嶋可被申之条、不能詳候、恐々謹言、

「大永六年」
三月廿七日　　忠朝

北原伊与（右並）守殿
臼杵民部少（長景）輔殿
御返報

2024

「仝上」

御書之旨具拜見、并御太刀一腰・織物一端領之候、誠以畏入令存候、抑至伊東御助言之趣、定惠院細碎被仰含候、本懐之至弥奉憑候外不可有他儀候、仍從是助次一腰・段子一端令進上之候、聊表御祝礼候、此由宜預御披露候、恐惶謹言、

「大永六年」
三月廿七日　　豊後守忠朝

謹上　大友（義鑑）殿
御返報人々御中

2025

又本田紀伊殿伯耆方へ爲礼被越候、被及聞召候哉、
爲御心得候、
其方之人衆少々清水之番ニ御たて候へと御意候、來月三たるへく候、十日番ニ候、巨細之条重而可申候哉、毎事期後音候、恐々謹言、

卯月廿八日　　隈江
『隈江伊勢守』
匡久（花押）

（上書）
山田安藝（忠豊）守殿
御宿所

2026

「玄佐自記」
「大永六年也」

一其年卯月、日新様從鹿兒嶋到生別府、被成御渡海、予千代鍋と云ける、十四歳ニ而召出、髪を御はやし、太

郎与號せられ、忝も御子ニ召なし、虎壽丸殿御弟と可存之由蒙仰、聟にめさるへき之由、美濃守へ被仰下、其恐不少、世間雖爲轉變、御奉公之外他有間敷候旨、深重ニ申定、其時節、鹿兒島かりや付五町、如前々之かりやハがうた藥師堂の下なり、「以下大永七年ノ場ニアリ」

2027

「樺山善久入道玄佐譜中」

大永六年丙戌、島津相模守忠良落飾、稱日新齊、同年四月、渡御于生別符、此時千代鍋十四歳、加首服被任太郎、且教予爲壻可列　貴久公之弟之旨、告父美濃守矣、其後日新齊之次女、　貴久公之姉君、乘于小舟、解纜於伊作浦、至於市來湊、賴路次之指南於川上上野介忠克矣、又入來院者以爲緣坐屬味方、是以乳母一人又一人、上下不分駕痩馬、忍敵路越山野、著御于生別符、日新齊之深情不可勝言、是亦老父數外不違其約、偏歸心於日新齊之所致也、

2028

又今日中ニたるも(い脱カ)、山東(伊東義祐)よりの使僧、從志和知(衍カ)(北原)より使僧、池袋殿よりの使僧、自都城(北郷忠相)之使者、更不得寸隙候、御察之前候哉、其外御話計不及申候、御うらやましく候、

尾州清水ニ可有御立候、十日かハりにて候、今明日此方へ御越有へき事ニ、遲こそ候へ、其かハりに其方之衆ハ可被立にて候、其覺悟肝要ニ候、姫木此方ニ現形候、下大隅邊も現形之由候、待居候、又北郷殿曽於郡ニ番衆御入候(北郷左京亮・加茂民部・有田加賀等コトカ)、如何ニこそ候へ、又我等長在京ニ、はやくたひれてこそ候へ、そと御指出候て、世間之時義被聞召候て可然候、恐々謹言、

(大永六年カ)五月四日　　匡久(花押)

(上書)山田安藝守(忠豊)殿　御返報

くまへ　匡久

2029

「北郷讃岐守忠相譜中」

本田某之領隅州曽於郡士卒叛本田、而應北郷、大永六年丙戌五月二十日、使北郷左京進發向于清水、新納氏亦進兵於曽於郡、時城中有反心者、招入我兵於城中、城終陷矣、家臣賀茂民部・有田加賀有戰功、北郷次郎右衛門久利爲地頭、從安永新城移曽於郡、

2030

「庄内平治記」

本田か領地曽於郡の士卒等、其比主命ヲ背て過半忠相ニ心を通す、故ニ大永六年五月廿日、忠相一族北郷左京亮・加茂民部ヲ清水ニ差遣し、曽於郡ヲ攻取んとす、時ニ至て新納も又同しく曽於郡ニ出張し、彼城ヲ陥れ、我有となさんと計る處ニ、曽於郡の陳中ニ忠相偏頗の者多て、味方の勢ヲ盡く城中ニ招入けるゆへ、城郭容易攻落し、加茂民部・有田加賀勇ゝ敷戰功ヲ抽てける、かくて曽於郡ハ忠相の領と也、北郷二郎右衛門尉久利地頭となつて守護しける、

2031

「伊地知季安考云」

一大永六年、本田臣以曽於郡内應於北郷忠相、五月廿日、忠相使北郷左京亮・加茂民部、如清水攻曽於郡、新納忠勝亦會之將取之、城中應忠相、故民部及有田加賀等奮戰陷之、忠相乃使北郷二郎右衛門尉久利爲地頭戍之、

2032

尚〻北郷殿心替候者、都城へ可取懸候、御油断有間敷候、今明日之間ニ物之躰みえ候へく候、

北郷殿以談合、曽於郡格護可有ニ相定候之間、去廿日、以兩計矢被射初候處ニ、本衆北郷殿人衆ニ城戸をひらき成合候、此方之番衆をハ子細候て、少被相待候へと被申候間、内〻この人衆末吉寄候、万一北郷殿心替候者、都城へ可懸指覺悟ニ候、爲御心得候、十ニ九ハ目出度可成行候哉、万期後音候、恐〻謹言、

「大永六年ナルベシ」
五月廿三日　　匡久(花押)

くまへ

(上書)
山田安藝(忠豊)守殿　　匡久

御返報

2033

又一昨日末吉より罷歸肝付へ罷越候、辛勞中〳〵無申計候、殿さま昨夕御歸候、爲御存知候、三俣雜説火急ニ候間、豊州急度御參會あるへきニて候、面白弓箭之躰にてこそ候へ、

去九伊地知方・梶原方・池袋方以同心、垂水ニ被相動候、彼城幾程有間敷候、自然廻・敷根邊之足輕つゝくへく候哉、其武略として境目邊ニ足輕御出候て可然之由、御意候、御油断あるましく候、恐〻謹言、

(大永六年カ)
六月十一日　　匡久(花押)

限江

2034

（上書）山田安藝守（忠豊）殿　御宿所　　匡久

尚〻堅可被仰付候、又椛山殿・三河殿被越候、
あましたる事にてこそ候へ、返〻御ほんそうあるへく候、
來十三廻へ可有御動候、然者殿・四郎殿御出張候、十五
以前六十以後、出家も不残被立候へと御意候、御油断有
ましく候、恐〻謹言、

（大永六年カ）七月十日　　匡久（花押）

（上書）山田安藝守（忠豊）殿　御宿所　　くまへ　匡久

2035

「日新公御譜中」

一島津陸奥守忠昌者、當家十一代之太守也、有三男、長
曰又三郎忠治、次曰又六郎忠隆、其次曰又八郎忠兼（後改稱勝久）也、忠治爲家督、而後早世、以立忠隆、未久是亦
早世、於茲忠兼継家之正統、而踐太守之位矣、其爲人
也、不學無道而罔上下之分、博奕戯動而失貴賤之道、
疎賢臣如惡惡臭、而斬戮於未罪、親小人如好好色、而
加賞於未忠、事君不厚、國家政道不正、風俗頽敗、于
時島津三郎左衞門尉實久不知天命、不顧國人疑笑、自
大永六年丙戌初秋、圖其實跡請爲継子、而恣行愚癡僣
謀、放僻邪侈無不爲、因茲與忠兼相爲氷炭、（忠兼前妻者實久之姉、後妻者祢寢重堯之女、）丁此之時、忠兼憤且憂之、使本田次郎左衞門
尉語忠良曰、爲我宜致國家安全之政、輙賜南郷之地、（日置郡之内、後改稱永吉、）城主桑波田孫六聞之、則慶賀而屬旗下、即十
月廿六日也、其後忠兼往在于伊集院之際、使島津下野
守昌久（大田元祖、忠良之姉聟也、）重賜日置於忠良、而彌將任國政之
證、故十一月五日往其地領知之、翌日參謁于伊集院、
所以謝禮也、同七日忠兼丁歸麑嶋之時、忠良亦隨高駕
以陪之、忠兼之帶劍者阿多加賀守役之、忠良之劍者本
田紀伊守持之、是乃任國政之堅盟也、同十二日忠兼使
村田越前守・土持伊豆守・梶原備前守等語忠良曰、願
養汝嫡男虎壽丸（時年十三、）以爲我子、忠良頓首辭讓再三、
雖然嚴命不止、故不得已而應君命、同十八日攜虎壽丸
候于麑嶋、同廿七日理髪加冠、稱又三郎貴久、且定於
居處、禪於守護職矣、

2036

「載本田親安傳」

一大永六年丙戌七月廿三日、管領大内義興（三位）遣杉三河守

齎書、令成於　忠兼公、

2037
近年對匠作不安之様其聞候、定而雖可有子細候、以前之筋目無事之儀肝要候、猶委曲杉三河守可申候、恐々謹言、

七月廿三日　義興（大内）（花押）

本田三河守（親安）殿

2038
「日新公御譜中」
「正文有之」

綉花五色之趣、令披見候、如御意未馴申處ニ、預音問候、殊武具之両種芳物、誠以齊太易清濁者也、仍雖輕薄候、北絹十端・素糸十斤進献仕候、只表御礼而已、以此旨披露、恐々謹言、

「朱カキ」
「大永六年欠」八月朔　琉球　國世主（印文「首里之印」）「朱イン」

嶋津相模守（忠良）殿　返報

2039
「正文在坊津一乘院」「日新公御譜中ニ在リ」

田布施之内

十穀薗之門之事、本物返申候て請取可申候、其間者無余儀一乘院之可爲御所領所也、仍狀如件、

大永六年丙戌八月拾八日　忠良（花押）

一乘院　御同宿中

2040
「北郷氏庶流系圖」

讃岐守持久四男圖書助辰久ノ猶子
實家嫡讃岐守敏久之四男
久隆
源左衞門　信濃

2041
就今度弓箭之儀、對此方毎々被副心候由候、祝着之至候、如存知金吾・祐脩無二申合候始末、弥無余儀様、連々入魂憑入候、委細知覧申含候、恐々謹言、

「朱カキ」
「大永六年」九月四日　勝久（花押）

北郷信濃守（久隆）殿

「上包」
北郷信濃守殿　勝久

2042

「日新公御譜中」

「正文在限城衆上村勝吉」

態用一行候、雖無題目候、連〻可申通候之處、無音相過候、心外之至候、於心中者聊不存疎儀候、仍庄内之時宜更ニ無盡期候、我〻若輩之事候、毎〻被加御思案、万端可預御指南事憑存候外無他候、恐〻謹言、

「朱カキ」「大永六年歟」九月廿一日　　忠兼(勝久)(花押)

三郎左衛門尉(忠良)殿

2043

「仝上」

「正文有之」

一北郷殿・新納殿御間爲和平之調儀、去六日到末吉、豊(忠朝カ)州御越、于今逗留候、無爲難成候由風説候、如何候哉と存計候、

一伊東衆廼頃越山候由風聞候、世間何と可成行候哉、

一新納殿此方不相替申承候、此前串良・救仁郷堺目雑説候ヰ、乍去無動轉候之處、案中靜候、滿足候、

一其堺通路輙候者、以使節可申入之条、令省略候、恐惶謹言、

「年間シレス」菊月廿五日　　兼興(肝付)(花押)

相模守(忠良)殿　人〻御中

2044

「仝上」

「正文在坊津一乘院」

今度就虎壽丸登山候、種〻入魂被加御尊意候之通承及候、誠過分之儀大慶不可過之候、何様自身以參上、恐等可申述候之哉、万端期來喜之時候之條、閣筆候、可得御意候、佳事、恐惶謹言、

臘月五日　　忠良

進上　一乘院　御同宿中

「上包」進上　一乘院　御同宿中　　忠良

三郎左衛門尉

2045

「梅北村神柱社司藏」

大日本國海西路日向州南郷益貫村神柱宮再興勸進、夫神祇者天地之精靈而二氣之良能也、陰陽所合散、寒暑所往來、無非神明之至誠、故有其誠則有其神、無其誠則無其神、誠者天之道也、誠之者人之道也、其氣發揚于上下、

而能鎭非常、此百物之精靈也、故曰至誠如神、于茲南鄕益貫村有古廟、扁内宮外宮一宇、金軟尊呈王垂高跡於茲鄕、昔平朝臣平大監末基者、住居於此地矣、傳聞其志、誇神明之至誠、以茲修身、可謂一代之善士也、萬壽三年丙寅歲、參詣伊勢大神宮、謂巫祝曰、兩分彼垂迹、請安置於我國、巫祝許之、終拜受頂戴歸去、創造大廟、巧架高殿、唐高祖始如立周公孔子之廟相似、世人不謂乎日本二柱、是其一社也、以故號神柱妙見大菩薩、其實體天照大神也、擧國歸仰尊信者惟夥矣、則奉稱御莊之宗社、焄蒿悽愴、威光照應、證明蒙護持、春祈秋賽不敢怠焉、不享非禮、季氏如旅於祭泰山耶、所憐有材退之、齊赦於祈衡山耳、諸侯大夫及諸士致美乎黻冕、行膳于其膏香、祭如在、此所謂神明之至誠也、自最初建立以降、已五百有餘年、風霜所侵柱根摧朽、雨露所墜梁棟傾斜、造敗壞凡五六箇度也、永正十三年丙子歲、前近江守新納忠武重肇建立之基、而經之營之、庶民之役、匠人成功、不日而落成矣、奐之美如在目、其如周文經始靈臺者乎、永正辛卯之冬、干戈蜂起於鼎國、而不安社稷、日淹于茲矣、同癸巳二月十又五日、寇讎陷于此境、乱將雲集步卒霞遮、八人放出忽成焦土、恰不異咸陽成原也、鴻業沙崩烏有冰礎石、僅存遺塵荒廢矣、爾來矛戟未收、徒移涼燠而已、戰塵路暗、兵車岐喧、依之借沙門勸進之力、欲興起此宮、無緇素無尊卑、不擇多寡、分與半文錢、善因之慈化、展轉之功德、不可思議、不可稱量、其詞曰、

曩構數十間瑞籬、華麗盡美、　幾重紺殿英靈如威、篤篋徹毛、歌雍欝鬯、灌不回禘、郊社能備上下之禮、昭穆元有左右之倫、今也此地堦除、秋盡黃葉埋霜、廟前日晚碧草偃雨、若無鵝眼展轉、爭成鴛瓦經營、

大永六年丙戌秋九月廿有四日　　勸進沙門

2046

「豊州家忠朝譜中」

「案文在都城來野邊懃右衞門」

貴札令拜見候、如蒙仰候、至伊東方以使節被申候、其返札先日爲御披見、至鹿兒嶋令進覽候、於于今者定而可爲御存知候、曾而不存疎略之趣、始中終之儀候、於事実肝要存候、猶以謀略無止候者、於其上追而一途可被申談候、北原伊与守某事、大内殿爲合力至藝州、可致出張之由被申付候間、今日廿八罷立候、北原事一兩日已前、至豊前境令發足候条、同前不申候、御入魂之旨申聞、從彼陳中

可申述候、諸慶猶期來音候、恐惶謹言、

「大永六年」十月廿八日　　臼杵民部少輔長景

嶋津豊州（忠朝）　　参貴報

2047

「大田氏系圖」

二代
昌久

中務大輔　下野守　入道稱世加

雖居于薩摩重久旗下、獻居城川邊於　太守忠昌、以爲
昵近、居住于南郷、其後居于田布施也、
大永六年丙戌十一月、賜隅州帖佐地頭職於　太守忠兼、
以故移居彼地矣、
島津八郎左衞門尉實久專所貪婪之者、強有守護職而已、
由是須運僞謀、令人企謀叛聲於達彼此者多矣、其中世
加亦得其聲矣、無犯罪、而大永七年丁亥五月七日、
忠兼主使日新齋誅世加畢、法號世加法尊庵主、世加寺、

2048

「本田兼親傳」

一大永六年丙戌、嶋津實久望爲　忠兼主之継子行潛謀、
忠兼主憂之、同年十月、授國家之政事於相模守忠良公、
而被遣南郷城、玄佐自記與世録記少異、不知何是、今所考據世録記、其後　忠兼公往
伊集院重封日置於忠良公、當此時國中未一和、故　忠
兼主欲使兼親押其他豪傑、以有功於一和、而同年十一
月四日、賜曽於郡城於兼親、略見權山自記、故并所賜證状以兼取其理矣、

2049

（本文書ハ二〇五一号文書ト同文ニツキ省略ス）

「此文書、重複ナカラ末ニ寫ノセタリ」

2050

「勝久公御譜中」

「正文在河田與右衞門國度」

就賴入候儀、料所之犬迫十五町之内半分所宛行也、仍可
被抽忠節事專一候、恐〻謹言、

十一月四日　　忠兼（花押）

河田殿

2051

「仝上」

「正本在本田作左衞門宣親」

就賴入候儀、曽於郡之事所宛行也、仍可被抽忠節事專一
候、恐〻謹言、

十一月四日　　忠兼（花押）

本田因幡守殿（兼親）　　河田殿

「上書」本田因幡守殿　　忠兼

2052

「勝久公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

今日五日、一瓢（運久）、虎壽丸殿同道ニて此方へ被越、少茂無心元事有間敷候、殊潁娃小四郎罷出候によて、肝付方可出頭之由候、其方之事涯分堅固之奉公頼入候、恐々謹言、

「朱カキ」「大永六年欠」十一月五日　　忠兼（花押）

肝付三郎五郎殿（兼演）

2053

「勝久公御譜中」

「正文在河田與右衛門國度」

吉田へ敵相支候之由風聞候間、金吾之衆まて引卒、爲可馳續、其方へ可越候通申候處、丁寧之儀喜悦此事候、何様以使者其礼可申、然共無指事引退申候由、注進候間、先々取延候、金吾此方之事ハ明日明後日之間、鹿兒嶋へ同道申候てこそ越候へ、返々懇切之至祝着候、恐々謹言、

十一月六日　　忠兼（花押）

2054

「勝久公御譜中」

「正文肝付伴兵衛兼屋」

前日者早々使者喜悦候、從是茂進狀候ッ、相屆候哉、爰許者金吾申合子細候而、於伊集院參會、鹿兒嶋へ同道申候、今日又嫡子虎壽丸被呼寄候、如此無二申談候間、其外之方角不可有指事候、其堺番之事、堅固頼存候、恐々謹言、

「朱カキ」「大永六年欠」十一月七日　　忠兼（花押）

肝付三郎五郎殿（兼演）

2055

大永六年丙戌

十一月七日、鎌田刑部左衛門尉政辰（梅岳君邊川筑前守か帖佐城を陷給ふ時き戦て死之、年三十九、此時島津實久出水より島津善左衛門尉安久・島津又七郎等を遣はし、邊川氏を援けさせ、安久ハ岩本壽齋か為に撃れ、又七郎等も同しく戦死也、川田五郎兵衛尉義續大翁公の時帖佐に戦死とあれは此時ならん、埃考、岩崎太郎三郎頼清日新公に仕へ帖佐に於て戦死とあり、年月なし、埃考、

2056

「貴久公御譜中」

一大永六年丙戌十一月十二日、　太守忠兼使村田越前守

・土持伊豆守・梶原備前守、語嚴親忠良曰、未有實子之續家統者、汝長男欲虎壽丸爲猶子禪家統云〻、忠良辭讓再三、雖然嚴命不止、是以不得固辭、而同十八日應忠良徵、參越於麗島矣、同廿七日加冠、稱又三郎貴久、且復　忠兼乃禪位於吾矣、

2057 （本文書ハ二〇三八号文書ト同文ニツキ省略ス）

2058 『在正文一乘院』

（本文書ハ二〇三九号文書ト同文ニツキ省略ス）

2059 （本文書ハ二〇三九号文書ト同文ニツキ省略ス）

2060 尚〻蒲生衆・祁答院衆高名無是非候、又壹岐守方一昨日從眞幸被歸候、北郷殿弥急〻被申候、又自豊州も急〻被仰候、今明日之間、遠州爲使者、可有御越候、伊地知方ハ明日可被參候、本田方いまた逗留候、又於内城護摩にて候、又山口神前にてハ、眞讀般若にて候、萬辛勞仕候處ニ、霜女苅にて活計のミ候、御浦山敷候〳〵、

御家景中神水被仰付候案文進之候、今月中可然候欤、但御遠慮ニ不可過候、又御屋形衆蒲生へ三千程被寄候處ニ、祁答院續候て、合戰二度候而、　御屋形衆廿人之上越度候、手負切捨なとハ不知數候之由、自清水注進候、目出度こそ候へ、恐〻謹言、

（大永六年カ）
八月廿一日　　匡久（花押）

（上書）（忠豊）
山田安藝守殿　御宿所　　くまへ　匡久

2061 （本文書ハ二〇四一号文書ト同文ニツキ省略ス）

2062 如仰至廻被得勝利候、目出度候、此節一段御用心肝要ニ候、將又俄ニ山東へ之義被仰出候、迷惑御察之前候哉、就中御鷹鴈取候、旁以被得利候、目出度候、御同前候哉、毎事期後音候、恐〻謹言、

（大永六年カ）
九月七日　　匡久（花押）

（上書）（忠豊）
山田安藝守殿　御返報　　限江　匡久

『貴久御記』

一大永六年丙戌初秋比、勝久与同名實久不會之事有、然處ニ從勝久本田次郎左衞門尉ヲ使者として、同名相模守忠良に被仰出趣者、自今以後別而御奉公可被申、其記とて伊集院之内南郷ヲ被宛行、御判形ヲ被出、即南郷之城守桑波田孫六此由承、同十月廿九日、忠良之御幡下ニ參、其刻勝久伊集院ニ御發足有而、政雅入道ヲ御使ニ而、南郷ニ日置ヲ相添忠良ニ被遣、益御賴之由深重成間、霜月五日ニ日置ヲ知行す、翌日忠良伊集院ニ參上有、同七日、勝久鹿兒嶋へ御歸宅有、忠良モ御供ニ參給、勝久之御劔ハ忠良之内阿多加賀守是ヲ持、忠良之御太刀者御内之本田紀伊守是ヲ持、互向後御契約之儀也、同十二日、村田越前守・土持伊豆守・梶原備前守ヲ使ニ而、相模守忠良之嫡男虎壽丸、生年十三ニ成給ヲ勝久御養子ニ成、守護職ヲ虎壽丸ニ可被禪と被仰出、忠良再三雖及辞退ニ、君命難背故ニ、小春十八日、虎壽丸鹿兒嶋ニ入給、同廿七日、勝久御住所ヲ被渡、其比隅州帖佐之郷之城主、邊河筑前守者守護代々之人成か、如何成恨ニカ本城・新城ヲ取構、實久ニ一味シ謀叛ヲ起由聞得有、相模守是爲討、雪月四日、同國吉田迄發向シテ、同七日卯刻ニ兩城ヲ攻落ス、從和泉之大將嶋津善左衞門尉者、從總禪寺口高尾迄七八度防戰テ、終岩本壽才ニ「イニ永」被討、又七郎ヲ爲始數輩討死ス、新城者其日之酉之刻程ニ落去ス、然者周章テ落行者共、先ハ支タルソト云モナラス、我先にと人馬イヤ重て、二丈餘成さしも深き堀間茂如平地之、或踏殺され、或等具足ニぬかり、或己カ柱シタル續松衣類ニ燼付て、啼叫有様、火盆地獄叫喚等之苦も此哉覽と覺、誠自滅之至也、是逆臣ヲ理給者罰無疑、見人翻舌ヲ、然者帖佐之事、政雅依望申ニ地頭ニ被定、忠良ニハ伊集院ヲ被御補、雪月十二日知行ス、「下文末ニアリ」

「樺山玄佐自記」

一其次年「大永六丙戌也」從伊作金吾様、南郷ヲ桑波田依御奉公彼城御知行、太守忠兼様以之外御驚、伊集院江御發足「十一月カ」、貴久様虎壽丸殿と奉申時、御養子の御契約有而、金吾様以御同道、忠兼様鹿兒嶋へ御歸陣「十一月七日」也、此刻本田へ曽於郡を忠兼様被下、されは因幡守父子「兼親其子三河守親安」無二之御奉公ニ而有し処ニ、彼次郎左衞門尉妨にや、無程召返ス、依其御恨休出仕、扨先帖佐の城邊河筑前守從和泉薩州御人衆申

受、祁答院・蒲生以同前、鹿兒嶋江成御敵之處、金吾「十二月」様爲御大將、一日の中數度之合戰碎手、即時被召取、「十二月七日也」

「下文末ニアリ」

2065

「勝久公御譜中」

一大永六年丙戌初秋以降、島津薩摩守實久背于太守忠兼、爲水火之隔、故使島津相模守忠良司國家安全之政、爰有邊川筑前守者、帖佐城主也、于時屬實久之謀叛、潛構本城・新城、隱謀既露顯矣、使忠良向其地、同年十二月七日、攻本城・新城、出水實久居城、之大將島津善左衞門尉於總禪寺口、爲岩永壽齋被討殺、且島津又七郎已下數輩令戰死、由是新城酉時乃陷矣、彼逆徒周章而欲退去者、所以陷溺于城隍溝壑之男女五百餘人、牛馬之溺死者不知其數云々、

2066

「日新公御譜中」

一十五代修理大夫忠兼丁太守之時、隅州之邊地帖佐之城主邊川筑前守川上又左衞門尉忠通之祖也、者、雖爲當家之裔累代之臣、屬實久之謀叛、潛構本城・新城、大永六年丙戌十一月三日、其陰謀既露顯矣、實久亦使島津善左衞門尉迫水之祖、實久旗下、同姓又七郎爲將帥、領三百餘騎、加勢於帖佐、太守憤怒之餘、令忠良爲治伐、故十二月四日、率薩州旗下之兵、已發於麑嶋、先到於吉田、修其兵器、同七日、攻本城・新城始於卯時、于時善左衞門尉自總禪寺口至高尾、勇進防戰者七八度、而竟爲岩永壽才所屠殺矣、又七郎已下戰死者不遑記也、先陷本城、後陷新城、同日至酉時乃終焉、悲哉凶徒逆儔欲退去者、陷溺于城下之隍池、所以死之人馬不知其數、或貫身於柵木、或焚傷於猛焰、叫呼之聲振動山岳、古文所謂屍塡巨巷之岸、血滿長城之窟、無貴無賤同爲枯骨、此之謂乎、夫自滅之釁(ヅミ)自天攻之、豈有疑乎、其後島津下野守昌久請爲帖佐之地頭、達于太守、應其意而許焉、賜伊集院・谷山之地於忠良、是亦勲功之賞也、十二月十二日、領知其地、明年丁亥二月十八日、移伊作・田布施士於兩地矣、

2067

「川上氏支流系圖」

忠直

初忠眞　鹽太郎　八郎三郎　筑前守

明應四年補隅州帖佐地頭職、領邊川村、因忠眞一世以邊川爲家號、

大永六年十一月三日、忠眞屬島津八郎左衞門尉實久、
據帖佐本城・新城、叛　太守忠兼公、以故使島津相模
守忠良主治伐之、

2068

「正文在肝付氏」

（本文書ハ二〇五二号文書ト同文ニツキ省略ス）

2069

（本文書ハ二〇五四号文書ト同文ニツキ省略ス）

2070

又はり鞍ニ成候する皮御所持候ハヽ、一枚可給候、
不申共にて候へ共、冬毛望ニ候、万事賴存候、衆中
ニ所持候ハヽ、御所望候而可給候、
書狀之趣得其心候、仍初千代殿（「実久」）御下ニ被參候人衆四ヶ所
衆蒲生方（「越前守良清」）・邊河殿（「筑前守」）・佐多殿此等にて候、穎娃方何方共不
見得候、又北郷殿・北原方和融未成候、此節番城誘無油
断様にと御意候、次三夜留之用意諸人ニ可被仰付候、依
一左右御動あるへく候、萬期後音候、恐ゝ謹言、
霜月廿一日（「大永六カ」）　匡久（花押）
（上書）山田安藝守（忠豊）殿　御返報
隈江
匡久

2071

又雪花之事得其意候、急度申付候て可分ヶ申候、
態用一書候、仍其方之儀、以澄眞委敷被申遣候、誠懇意
無比類候条、喜悦之至候、殊當時地頭なともなく候處ニ、
偏此方以一味之心中、無余儀奉公之辻、何様永ゝ不可有
忘却候、中ニも河上十郎左衞門尉・河上山城守・否笠佐
渡守・伊地知七郎三郎・有屋田治部少輔・鹿島中務少輔
入魂之由承及候、一段賴母敷こそ候へ、於弥番用心堅固、
當概油断有間敷事、萬端賴入候、巨細之旨此僧申含候間、
可口達候、恐ゝ謹言、
十一月廿五日　忠兼（花押）
曽於郡衆中　忠兼
「享禄元年ニハ勝久と改玉へれハ、此所ニノセ可然欤」

2072

「樺山玄佐自記」

一大永六年霜月廿八日、宮内御社頭天火にや、不残燒失
す、從其砌數外、新納殿・本田・北原・肝付越前守以同
前、加治木江儀絶す、其比迄横川者新納十郎地頭、曽
於郡は新納殿・北郷殿、吉松・西之城を分而、西之城は
新納殿、吉松は北郷殿拜領共なり、扨横川を北原切取、
みなはをは北原・肝付越州江被遣、其後城二三ヶ名を

付、越州に遣、日置・山名・中野・東之別府は樺山江、西之別府は帖佐江付祁答院江、在川・邊川を高松の栫へ付、北原領す、其地本田社家領皆〻拜領す、堅利西郷名之内社領、其外堅利五十五町本田へ、以相談不残知行、如斯安全之處ニ、

2073

「新納忠元譜中」

忠元五代

幼字安萬丸、稱次郎四郎、中改刑部太輔、後改武藏守、入道削髪更號拙齋、或號爲舟、

大永六年丙戌某月三日生、母同氏周防守久友之女、

2074

「樺山氏七代信久初広久譜中」

「玄佐自書之記ニ有之」

大永六年丙戌、太守　忠兼主以島津三郎左衞門尉忠良之嫡男　虎壽殿、爲猶子讓國家矣、時使左衞門尉任相模守、以此佳節、太郎左衞門尉者任安藝守、肝付三郎五郎者任越前守、此時一族家臣等共以對若君　虎壽殿、無異心可抽忠節之旨、捧誓紙畢、

新納殿・本田・北原以同意、與正宮社家爲氷炭、已及弓箭、大永六年丙戌霜月廿八日、社頭盡回祿、是又天災之所致乎、數外亦與新納殿・本田・北原・肝付越前守俱、與加治木爲不通、其比横川者新納十郎地頭也、曾於郡者新納殿、吉松城者北郷殿[原欠]、同西之城者新納殿領知也、北原陷横川城、而後三納者免于肝付越前守、其後加治木者北原、帖佐者祁答院、同日陷畢、於茲附二三ヶ名於加治木城、而肝付越前守領、日置・山名・中野・東別符者樺山領、附西別符於帖佐之城、祁答院領、附有川・邊川於高松城、北原領知、本田者社家領悉所以領知也、西郷名之内社領、其外堅利五十五町相談于本田、而數外爲領知也、如件各遂本懷之時節、豊後守忠朝越山於飫肥曰、不忍聞太守之難儀、催促於一族已下、欲成三州和平之計、應諾之族、新納近江守忠勝・禰寢孫次郎・肝付三郎・本田紀伊守・樺山助太郎十七歳出頭、一瓢・又六郎殿、自實久者治部太輔・阿多飛彈守各候于麑島、雖爲出仕、無時時之有對面、唯有私之會合而已、故一人二人充在在所所爲歸宿、忠朝亦歸帆也、於茲　太守令驚動、追其後渡海路到于下大隅、雖然忠朝再不立歸、使甥之右衞門大夫爲報謝到于麑島、是亦即歸帆也、

「國史 卷十六」

大中公上 名貴久、相模守忠良之子、為大翁公嗣、幼字虎壽丸、稱菊三郎、又稱又三郎、又稱三郎左衛門尉、歷修理大夫、任陸奥守、叙從五位下、道號伯囿、法名大中良等庵主、南林寺殿、

大永七年丁亥春二月十九日、樺山信久獻梅岳君盟書曰、

繼脩舊好無有二心、有渝斯言、諸神殛之、二十一日、梅岳君與信久盟書亦如之、據島津支流系圖、夏四月九日、梅岳君使肝付兼演領帖佐邊川・加治木中之眇、據梅岳君舊譜、肝付典膳系圖、大翁公求地於梅岳君、梅岳君曰、市來・伊集院・加治木・帖佐惟君所欲、曰、姑舍之、伊作何如、曰、幸甚、十六日、大翁公徙伊作、據大翁公・大中公・梅岳君舊譜、黃套軍記、加治木地頭伊地知周防守重貞、與帖佐地頭島津昌久俱以邑叛、六月五日、梅岳君攻拔加治木城、殺伊地知重貞、重貞子新左衛門尉重兼自殺、又攻拔帖佐城、殺昌久、據梅岳君舊譜、大翁公舊譜作五月六日、黃套軍記云、五月六日、梅岳君如加治木、七日殺重貞・重兼・昌久三人、伊地知越右衛門系圖、伊地知季隨曾孫曰重持、重持四子、長重豊、次左馬助、次因幡守、次重貞、左馬助無男、以重貞為嗣、重貞歷事圓室公・蘭窓公・興岳公・大翁公、為國老、補加治木地頭、按重貞為加治木地頭、蓋代加治木久平、久平去加治木、在第十二卷明應五年、島津昌久為帖佐地頭、見上卷大永六年、島津支流系圖昌久傳云、是時島津實久陰有篡國之志、勸輙流言於國云、某氏反、由是昌久亦坐謀反、伊地知氏系圖重貞傳亦如之、觀下文實久構梅岳君於大翁公、間其如帖佐・加治木、陷伊集院・谷山二城、則昌久・重貞謀反、出於實久反、亦未可知也、島津實久使川上上野守忠克言於 大翁公曰、誰幽君於伊作山谷中爲、臣願奉君爲守護職如故、又間梅岳君之如加治木・帖佐也、間去聲、十一日、引出水・串木野・市來等兵、陷伊集院城、復遣加世田・川邊・加兒・山田之兵、陷谷山城、據大中公・梅岳君舊譜、大翁公舊譜・黃套軍記並作五月十一日、加兒依原文、即鹿籠、伊集院城、即壹宇治城也、已見第五卷曆應三年、忠克、川上氏之支庶也、島津支流系圖、島津兼久第三子曰左近將監忠棄、忠克、忠棄之曾孫也、兼久見第十二卷文明十五年注、梅岳君既克加治木・帖佐、各置戍兵而還、舟中心計曰、當請 老公使居帖佐・加治木之際、則庶乎可以爲鹿兒島之扞蔽矣、既抵戶柱、聞實久構己於 老公、欲親詣伊作陳心曲、從者止之、乃由湯越嶺、歸田布施、據梅岳君舊譜、黃套軍記、自鹿兒島至伊作、而之田布施有二道、右行出伊作城下、是為正路、左行踰湯越嶺、是為間道、湯越嶺在伊作鄉湯之浦村・和田村接界處、實久既取伊集院・谷山、遂使神殿神田寺告於 公、請反守護職於我、不反則吾將以武取之矣、伊集院大和守忠朗等答曰、汝能以武取之乎、則我將以武守之矣、於是群臣會議、或言乘城禦之、或言投寺避之、 公聞之曰、身已爲守護職矣、而乃避惡托寺、不亦遺身後羞乎、只當致死守此城耳、時 公年甫十四、衆皆歎其英達夙成、據黃套軍記、神田寺指其寺主而言、指寺主稱某寺、今世亦然、伊集院有神殿村、無神田寺、川邊神殿村有神殿寺、忠朗、伊集院氏之支庶也、島津支流系圖、伊集院頼久第四子曰大和守倍久、忠朗、倍久之孫也、頼久見第八卷應永四年、於是或言鹿兒島亦有應實久者、漸至三百餘人、園田清左衛門尉實明知之、來告曰、此間恐有倉卒之變、宜速避之、十五日、黃套軍記作五月十五日、夜與山田伊豫守・木脇大炊助祐兄・眞玉民部左衛門尉重實・長井善左衛門

尉・鎌田筑前守政心・井尻九郎次郎祐宗等奉　公、西走小野村、（據大中公・梅岳君舊譜、木脇氏出自伊東氏、川越民部左衛門系圖、村岡良文之裔、曰河越重頼、傳八世至重秋、居豊後號眞玉、傳十二世至重實、子孫復姓川越氏、但據系圖、重實稱紀伊介、稱民部左衛門尉者、其兄重博、伊藤権角系圖、井尻祐宗後稱佐渡守、六世祖曰井尻祐泰、至祐宗孫権右衛門祐保、改為伊藤氏、）政心、政年之孫也、（據鎌田隼人系圖、原書政年生政盛、政盛生政心、而從大中公之難者政盛、與此不同、鎌田政年見第十一巻文明六年、）賊徒果遣五十騎追之、迹且至、乃匿　公於實明宅後聖宮、追兵已至、謂實明曰、出　公、不即且搜汝家、（不讀曰否、）實明曰、　公不在吾家、而汝等妄意之、且使汝等搜我家中、若不獲　公、吾亦不釋汝輩、我有家臣若干人、將與汝等俱靡矣、辭色並勵、追兵乃去、（據大中公・梅岳君舊譜、）　公既免於危難、即如田布施、路過伊作城下、入見　大翁公、　公説、（説讀曰悦、）謂　公曰、實久謀反非我所知也、止　公宿、款待三日、然後送之、十八日、　公至田布施、（同上、舊譜云、款待三日、按十五日夜公去鹿児島、十八日至田布施、則留伊作二日、）舊譜言三日者、蓋併十八日數之、　二十一日、　大翁公復歸鹿児島、實久誘之也、（同上、大翁公舊譜・黄套軍記並作二十六日、）二十五日、　大翁公遣兵、攻蒲生越前守茂清於蒲生城、茂清擊破之、茂清、宣清之孫也、（據蒲生十郎兵衛系圖、蒲生宣清見第十巻長禄三年、蒲生城遺墟在蒲生郷地頭館東南十二町餘、係久米村、）秋七月七日、大翁公遣兵攻生別府、樺山美濃守（太郎左衛門尉改稱美濃守、）信久嬰城自守、十六日、濟師攻之、不克、（據島津支流系圖、樺山玄佐自記、）大翁公使伊地知將監重貞守伊作城、島津實久求伊作於　大翁公、梅岳君聞之、二十三日夜、將兵攻伊作城陷之、殺伊地知重貞、（據梅岳君舊譜、秩父十郎兵衛所藏庶流系圖、伊地知季隨子曰季弘、季弘次子曰左馬助、五世孫曰左近將監重貞、大永七年七月二十三日重貞死於伊作城、與舊譜合、上有伊地知周防守重貞、與此同名異人、）八月三日、　大翁公復遣兵、攻生別府城不能拔、　大翁公如加治木、遣島津備中守忠秋及實久室老松崎丹波守、説信久使來謁、不即遣子來、（不讀曰否、）信久不肯、復遣福昌寺大乗院及備中守・丹波守敦諭、信久乃遣其子太郎幸久入侍、改稱助太郎、十五日、大翁公還鹿児島、忠秋、忠朝之弟也、（據島津支流系圖、樺山玄佐自記、）九月、樺山幸久逃歸、　大翁公召之、卒不復入見、（同上、）是歳琉球王尚清嗣位、（據琉球國王世譜、）

2076

「案文在樺山源三郎久清」

「上書ニ」

「肝付三郎五郎殿への案文」

契約

一三ヶ國如何様雖爲轉變、無二心可申談事、

一御身上之御大事者、某大事与可存之事、

一於被仰合方者、此方不可存隔心之事、

一自然付分限事候者、可爲御同前之事、

一如此申承候處、万一和讒凶害出來候者、互可申披之事、

右此條々僞申候者、

御神名五社

大永七年二月六日　　信久

「此契約、樺山氏七代信久譜中ニ在リ」

2077

猶〻申上候、前日藏人殿へ被參上候、御懇之御意候處ニ、遮而御使僧、御祝着之由候、

御懇之預御狀候、忝奉存候、殊御神判御丁寧之旨、相州御礼申進候へく候、當時者如伊作御歸宅候、拙者供申候て、未祗候候、於已後者、相當之御奉公可申上宛概候、同可蒙仰事可畏入候、万期來信之時候、恐〻謹言、

二月廿壹日　　忠如（花押）

（信久）
椛山殿

御返報人〻御中

「上包」
町田中務少輔

「此書、樺山氏七代信久譜中ニ在リ」

2078

「貴久記」

一大永七年丁亥二月十八日、伊集院・谷山ニ伊作衆ヲ少〻被移、同三月中旬、勝久様以福昌寺大鷹東堂ヲ、虎壽丸に御世達有テ御隱居之由被仰出、忠良御返事ニ、御隱居所ハ市來・伊集院・加治木・帖佐何方ニ而茂可任御好之由ニ雖被申、此間之御領地者無御望、不然者御物詣之由堅承間、伊作者雖爲代〻ノ地、不及力ニ被進勝久、四月十五日、從鹿兒嶋田之浦有御出船テ、谷山ニ着給、忠良モ是迄御供也、次日伊作へ越山シ給、其後有御遁世、忠良モ於鹿兒嶋剃髪シ給、「下文末ニアリ」

2079

「案文在樺山源三郎久清」「此書信久ノ譜中ニ在リ」

契狀

一世上雖如何躰轉變候、無二ニ可申擧支、

一自已前偏奉賴候上者、於弥無二心賴存、又可蒙御助成之事、

一如此申入候之處、自然和讒凶害出來候者、無御覆藏被仰下、可申披之事、

若此條〻僞申候者、

御神名五社　　各可罷蒙御罰也、

于時大永七年二月十九日　　樺山太郎左衞門尉　信久

（忠良）
相州様

進上人〻御中

2080

「正文在樺山源三郎久清」

契狀

一如仰世上雖如何樣轉變候、無二ニ可申擧叉、

一如此申承候上者、於弥無二心賴存、又可蒙御助成之事、

一ヶ樣申候内ニ、自然和讒凶害出來候者、無御覆藏互可申披事、

若此條〻僞申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神宮　正八幡三所大菩薩　稻荷大社大明神　天滿大自在天神　諏訪上下大明神、各可罷蒙御罰也、

于時大永七年二月廿一日　忠良(花押)

桃山太郎左衞門尉殿(信久)　御返報

右此條〻僞申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神宮　熊野三所大權現　八幡三所大菩薩　天滿天神　諏訪上下大明神、各可蒙御罰者也、

大永七年丁亥二月廿六日　兼演(花押)

石坂殿　御報　肝付三郎五郎

進上　石坂殿　御報　兼演

2081

「樺山氏七代信久譜中」

「正文在樺山源三郎久清」

一如蒙仰、三ヶ國如何樣雖爲轉變、申二心不可存之叉、

一自然御付御分限之時者、御校量之由、是亦御同前候、

一如是申合候處、万一和讒凶害出來候者、互可申披之叉、

「此御書、樺山氏七代信久譜中ニ在リ」

2082

「喜入氏忠鑒譜中」

「正文在當家」

又當時此方殺生禁断之間、にへ之事欠申候、大望にて候ハ、諸事可申承候時者、相互ニ可申通候、追而書候、

誠仲陽之御慶賀重疊雖申舊候、尚以不可有盡限候、多幸候、抑如此之御祝言承候、御滿足至候、以御同前候、其堺御左右承候、大慶候、此方茂無相違候、從以前之以筋目承候、是又御同前候、何樣篇目之時者可申承候、万吉、

恐〻謹言、

「大永七年欠」　二月廿一日　　日新（花押）

謹上　攝津守殿（喜入忠善）　御返報

2083

「玄佐自記」

一從其於鹿兒嶋虎壽丸殿江御國讓之被成御祝言、金吾様爰ゟ相模守と奉申、此次日樺山太郎左衞門尉号美濃守、肝付三郎五郎（兼演也）被号越前守抽忠節、其刻忠兼様ゟ御代虎壽丸殿様江御讓渡給ふ、同諸侍御内衆無残若君様へ御奉公別儀有間敷之旨、被致御袖判之由被仰含、御法躰在之、如伊作御隠居候也、相州様茂有御法躰、日新と号せらる、「下文次ニ大永六年ノ場ニ載ス」

2084

「日新公御譜中」

一大永七年丁亥三月中旬、忠兼遣福昌寺現住大鷹和尚、語忠良云、又三郎雖爲年少、祖宗神器將必有歸、宜爲國家之樞機人物之父母、然則民之歸之、猶水之就下、予豈役形勞心、而釀疾催老乎、不如遯世安身以忘老矣、忠良聞之則曰、菟裘之地不可不擇、市來・伊集院・加治木・帖佐四地何如、請任君意、忠兼曰、此四地皆非我之所以好也、忠良曰、高橋・田布施・阿多（三所養祖父相模守友久累代之地也）伊作（實祖父河内守久逸累代地也）者、我嗣相模守忠幸之統、領件四地、（合善久・忠幸両主之地、忠良継其統者也）故雖爲先祖累代之地、可獻伊作、於茲忠兼欣々然有喜色、而四月十五日、發船於麑島田浦、繫纜於溪山海濱、忠良亦雖扈從、自此地歸麑島、忠兼明日到于伊作、同廿九日、忠兼爲髠、忠良亦剃髪於麑嶋、而稱齋於日新、實三十六歳也、

2085

『調所氏譜恒房傳』

大永七年丁亥三月、　公賜恒房畠壹町貳段於國衙領内、於是二十二日、國老平田右馬助職宗・肝付越前守兼演・梶原備前守景豊・土持伊豆守政綱・池袋越後守宗政・村田越前守經董承　旨、爲坪付以授之、

2086

『仝文書』

國衙領之内

一ヶ所　恒見屋敷

畠地六反　さとひその

一ヶ所　土器屋敷

畠地二反　みやの前

一ヶ所　鍛冶薗

畠地四反　かちその

已上

大永七年
三月廿二日

（村田）經董
（池袋）宗政
（土持）政綱
（梶原）景豊
（肝付）兼演
（平田）職宗

（恒房）調所殿

2087

「日新公御譜中」

「正文在肝付伴兵衛兼屋」

帖佐之院之内

邊河

賀治木之内

中之眇

大永七年丁亥卯月九日

肝付三郎（兼演）五郎殿　忠良

2088

「殉國名藪中」

大永七年丁亥

四月九日、山野助次郎井手籠駿河守重之と山野平泉の地に戰ひ死之、湯田仁右衛門同時に戰て死之、

六月五日、上井筑前守方秋加治木にて戰死、年月知れず、此日梅岳君加治木地頭伊地知周防守重貞及ひ子新左衛門重兼を加治木に討れしとあり、此時欤、田代新左衛門文清大翁公の時加治木に戰死、廿八歳とあり、此時欤、嵙考、村田五郎右衛門武秀大翁公執事、上に同し、田代新右衛門清平帖佐にて戰死、年四十七とありて年月なし、此日梅岳君島津下野守昌久入道世雅を帖佐に討玉ふ、此時欤、嵙考、

七月廿三日、伊地知左近將監重貞島津實久に黨し伊作東城に戰死、年四十二、公室の敵ゆへ除くへきか、

2089

「大中公御譜中」

一大永七年丁亥四月十五日、　忠兼去麑嶋赴隱所、解纜於田浦、著船於谷山、而翌日到于伊作隱所、同月廿九日爲髣矣、

2090

「正文在野村氏云」

當弓箭從最前一段被抽忠勤候事、神妙大慶之至候、至向後茂尚以可賴存候事実也、聊互不可有狂心候、縱自然雖有讒臣、具可遂相談候、爰以貴久同篇候、若此儀於違背者、任天道所也、仍如件、

「大永七年丁亥カ」五月十三日　　日新

冨松左京亮殿

野村兵部少輔殿

「島津實久、勝久公ヲ欺キ、日新公ニ進セ置レシ伊集院ヲ攻取リシヲ、戸柱ノ神ニテ開玉ヒシ時ヨリ起リシ弓箭ナルヘシ」

2091

「貴久記」

一去程に其梅月之比「大永七年」、政雅再伊地知周防介父子謀叛之企アリト披露ス、忠良入道者此儘山林ニ居へき心中なりしかとも、武勇之道難遁而、五月六日、加治木ニ進發シ給、同七日、彼三人ヲ被誅、勝久此人ゝ逆心ニヨリ恐給へ、如今者何之御怖畏カ有ん、加治木・帖佐兩所ヲ御隠居所ニ奉成とて、同十一日、伊作へ爲參カ、從加治木出船して、鹿兒島戸柱着岸之時分、舟共餘多漕カフ、問せ給けれハ、勝久者實久ニ与シ、御心替有也、伊集院・日置今宵落ぬと云、忠良入道者是ニ付ても如伊作可參之由有シカトモ、供奉之人數無詮之由依諫申ニ、從夜闇爲湯越ヲ、如田布施之越山シ給之間、虎壽殿ハ同十五日鹿兒島ヲ立て、如田布施之越給、乍幼稚之御心、我者是一言有契約とて、則如伊作被參、勝久御對面有て、父子之儀ヲ被存候条、神妙成とて感涙ヲ流給、三日餘押留有而、十八日、如田布施送給、同六月廿六日、實久奔走を以、勝久様鹿兒嶋御入部有、去程伊作可有御返シ事ハ不及沙汰、剰實久望被申之由聞得しかハ、爲雪會稽之恥、同七月廿三日、田布施之城ヲ暮程ニ打立て、忍軍路之事ナレハ、火ヲ不炷闇クシテ行ヤラス、『「阿多永泉庵右者大野村へ有之、日新公伊作へ御一戦ニ御打立之時、此寺へ御馬立被成、衆たまり有之、然処ニ廿三夜之月出候而、伊作へ御掛被成筈ニ御座候処ニ、月宵ニ出ノ當リ、ほの〳〵と出給社忝けれ、カクテ石牟礼妙見之月は五更之曉ヲ社待ニ、未二更ニシテ金峰山從小野永泉庵ノ下ニ駒ヲ引エテ居給處ニ、廿三夜候故、此寺を御立候而御掛、御吉凶好候而、永泉之改二字、宵戦庵と書候而可然ヲ伏拜、於彼神前放旛之手、夜半計東之城内城ヲ攻落旨御意候由申伝候』ス、西之城ニハ市來衆楯籠シカトモ、是モ卯刻計攻平、

「以下末ニアリ」

2092

「玄佐自記」

一去程に從和泉實久伊作江何与御申候哉、忠兼様御心替、鹿兒嶋へ御入部与也、實久ハい集院を責取、鹿兒嶋へ「大永七五月十一日カ」

指御通、忠兼様を請し入給ふ（「六月廿六日カ」）、又〳〵國の亂不及言語、然者肝付越前守・樺山美濃守、別而相州御味方ニ而、其年七月七日（「大永七年也」）、從鹿兒島以兵船、生別府江御手形なれ共、無何事、扨人の心時〻に移安き世なれは、廻・敷根・上井・宮内・曽於郡・加治木・帖佐其外虎壽丸殿江之御神判、奉忠兼様を始皆古ほくに（「反古」）とそ見得にける、虎壽様茂田布施・阿多・高橋三ヶ所に引、御籠鳥のことし、此刻伊作をは相州様召返之由風聞なれ共、依遠方かひなし、其比本田ハ曽於郡之御恨ゟ、新納殿を頼ミ、忠兼様江者不致出仕、因州（本田兼親）ハ美濃守（ママ）娘なれハ、同心なれ共、隔所を不通なり、溝邊は隔加治木、生別府は前之年（「大永六年カ」）九月ゟの新城岸とも見得ぬを、七月十六日（「大永七年カ」）、以多勢御責（「イさ」）なれ共、御神慮にや、無何事、忠兼御入部以後被改勝久、御還俗也、「以下ニアリ」

2093

虎壽丸様小野より加世田江御通筋覺

貴久様御年少ニ者、虎壽丸と爲申上之由候、左候而　勝久様と御不和之儀有之、鹿兒島御退被遊候時、小野之薗田殿之居屋敷江被遊御入候處ニ、跡より追手掛候付、薗田との屋敷のひしりの宮江被隠上置、左候而薗田殿ゟ、祖父長谷場讃岐（後名孫右衛門）、夜中ニ遮而之用事候間、可差越と引合有之候、御方行司之儀ニ候得者、右之儀ニ付山中邊途路御案内可被申上と承候付、則御供申上、桑木か迫、小野尾立、かしきの渡、かつしやうき、とゝろ松、長さこ、しゆう川内被遊御通、このわらひ村江夜半過ニ被遊御着候、左候而祖父讃岐御めしを上候而、此村ヲ御急キ被遊御立、石がはなはちのす、夫ゟ庵の宇都くしけの谷之頭かげの木場住床原御通、伊集院の内春山直林寺の野くひ江御出、直林寺下之脇より森薗之前御通、せうしのぼりはちのむれより柳が谷大道を横通りニ、野とせの峠に被遊御着候、左候時、夜明候故、彼所ニ石有之候ニ御腰被成御掛、御ぐしよせ上サセ被申ニ、御鬢水無之所ニ、彼之所の石ニくぼり有之候ニ水有之候付、其水を以御鬢水ニなし、御ぐし相濟候、左候而御辨用ニ讃御めし致持參候付、差上候而、被遊御立候、夫より彼所之石ヲびん石と云傳候、左候而伊作之内今木場よりうしの小路、御牧内金峯山のうしと（後）ひら（平）御通、和田小路江御出、田布施無口能被遊御着候、左候而讃岐儀者田布施迄御供申上候故、田布施ゟ御暇被下、相歸候由候事、

右御通路之節、ひをち永谷讃岐邊途路節、山中之御案

内申上、田布施迄御供爲申上儀、親彦兵衞より細〻被申聞せ置候、左候而其後鹿兒嶋貫久様御屋形ニ成候而ゟいよ〳〵此内之通り、長谷・讃岐・五ヶ別府庄屋、并寺山・きそ・うすき迄ヲ行司役可相勤旨被仰付、爲御心付高六石拜領いたし候、尤御判紙いたゞき、右兩役相勤居候處ニ、祖父讃岐代ニ身上必迫候故、早〻之出物上納米之内數年致未進、未進米過分ニ成、上納方皆濟不得致候付、右六石之高御公義江御召上、左候而無扶持ニ而役儀相勤被來候得共、其已後行司役儀者御断申上御免ニ而、庄屋迄ヲ相勤來候、左候而右六石之高目錄御判紙いたゞき持來り、親より我迄被相渡候處ニ、我代ニ見失候而、今ニ無之候、右之趣者覺之通書付渡置なり、

寛文七年未八月十九日　　長谷大藏判

長谷長兵衞殿

2094

「勝久公御譜中」

一大永七年丁亥四月十五日、讓補守護職於忠良之長子虎壽丸、而忠兼占隱所於伊作、移居其地、同廿九日爲髣矣、

2095

「仝」

一帖佐城没落之後、以島津下野守昌久、定彼城主、未經三年、與加治木城主伊地知周防介父子俱有謀叛之聞、忠良已雖爲遁世之身、不得已、大永七年丁亥五月六日、往其地誅昌久及周防介父子畢、

2096

「仝」

一島津薩摩守實久流涎於守護職、以僞言與忠兼合體、令忠兼變虎壽丸父子之堅約、而大永七年五月十一日、遣軍兵攻忠良之領地日置・伊集院之城、今夜乃陷畢、

2097

「仝」

一同年六月廿六日、依實久之奔走、忠兼再所以入部麑島也、

2098

「仝」

一同年七月廿三夜、島津相模入道日新齋陷伊作城畢、是又所以雪會稽之恥也、

2099

「大中公御譜中」

一大永七年六月廿一日、依實久之僞謀、忠兼再入麑嶋爲守護、無歸伊作之意矣、

2100

「勝久公御譜中」

「正文在隈之城衆上村勝吉」

敬白　立願文之事

新田正八幡宮御寶前

奉寄進水田參町

右、意趣者、奉爲三州太守嶋津修理大夫藤原朝臣忠兼御息災延命、武運長久、國家治齊、諸願成就、皆令滿足之故也、仍寄進狀如件、

修理大夫忠兼（花押）

大永七年丁亥六月十七日敬白

2101

「日新公御譜中」

一帖佐城主島津下野守昌久法師世加・加治木城主伊地知周防介・同新左衞門尉共企叛逆、丁亥五月、有將發軍兵之聞、日新遯世、雖爲但惜無常道之身、而不堪忍宿、六月五日、到于加治木、誅於伊地知父子、到于帖佐戮於世加、兩城共以入警衞之兵、百事無所闕、而後解纜於帖佐松原、欲到于麑島之間、日新熟以爲、加治木・帖佐兩地之內、以一所爲忠兼之隱處、則可爲麑島之藩籬而無憂、以是意佗日可告忠兼矣、漸近于麑島、欲著于戸柱之岸之際、左右浮海之船續紛往來、問其故、則曰、實久有使河上上野守上達於忠兼之旨、不計伊作山裏籠居愚臣所以寒心也、實久運籌策、再將歸入于麑島、不及聞固辭許諾、催於出水及串木野・市來已下十有一箇所軍衆、同十一日、攻伊集院城、必定今夜陷之乎、聞此言日新潛思我心素無異謀、宜聞於忠兼乃欲往伊作、陪臣有諫止者、故臨夜中踰湯越嶺、直歸田布施矣、谷山城者加世田・川邊・加兒・山田軍衆同日襲至攻責孔急也、不計大敵忽來攻、以無防禦之道、而請降去城、同十二日、伊集院・谷山騎步遁死者到于田布施也、同十五日之夜、又三郎貴久主潛去麑島、赴田布施、（園田清左衞門尉來有內通、故如斯也、委曲記于貴久主之譜中、是以略于此矣、）先入小野村園田清左衞門尉之屋、于時實久之兵追而雖欲到于此捕貴久、因園田之知計、遁其難矣、扈從之士山田伊豫守・木脇大炊助祐兄・川越民部左衞門尉重實・長井善左衞門尉・鎌田筑前守政心・井尻九郎二郎・其母宇多氏（高橋之士宇多次郎左衞門尉貞次之女也、）園田清左衞門尉（從途中歸私宅、若騎步之兵再襲來有搜求於宅中、則以已前之謀略為使渠退去也、）

只共七人而已、求偏路經小徑、過伊作後平、貴久謂陪臣等曰、我與忠兼曾有父子之契、今豈背之乎、至伊作與忠兼遂對面矣、忠兼云、深思父子之義、高證孝行之道、決意來于此焉、我無秋毫之誤、唯實久乘勢作亂於國中、令臣民盡爲仇讎、故教我違父子之情、大息拭涙、而後設宴、抑留三日、崇慰甚厚、同十八日、餞送于田布施焉、實久濫踐操莽之權、劫挾忠兼之柔弱、而陽尊忠兼、陰專私欲、請再當歸入于麑島、乃以同廿一日、忠兼再入麑嶋所以居住也、實久請得伊作之聲遍觸衆耳、丁此之時、日新思雪會稽之恥、而待七月廿三日、乘夜暗發於田布施、向於伊作、禁言語潛銜枚、到永泉庵之下、則未迄二更、月已出於金峯山小野之嶺上、祥瑞之明輝宛如白晝、君臣共偕揚眉欣然以前、乃敬於石牟禮妙見、遂揚旗於神前、而夜半攻伊作東城克之、屠殺本丸守兵伊地知將監、西城者市來之士卒守焉堅固、雖然及卯時悉斬獲、所以入手裏、入父祖之堂室、領相續文書重器、不亦快乎、是亦非私慾之兵革、先是帖佐城主邊川筑前守叛逆之時、往加治伐、稱其勲功之賞、賜伊集院・谷山兩地、不經幾程被攻歸矣、息男貴久爲親子之堅約、未終二个年、匪翅亡三綱之其二、君臣、父子、抱恥辱於不罪、次伊作者元祖久長以降、累代之領地也、雖然獻之於隱處、假令非久遠和悅、而不可爲讎敵及攻責、忽與實久謀逼于我者、私慾妄行匹夫之所爲也、爲退匹夫之惡黨、任天之與如此、非一毫人欲之私也、

2102

「貴久公御譜中」

一忠兼主信島津八郎左衞門尉實久之僞謀、忽變心矣、因茲大永七年丁亥六月十一日、實久發軍衆、以今夜陷日新齋之領地伊集院・日置兩城矣、丁此時、麑島勇士三百餘人有屬實久之疑、然則爲衆敵所襲逼者、非所可疑、速不可不去居處、待夜暗密進發、於茲乎、只山田伊豫守綾之土山本勘解由曾祖父也、祖父代改山田以号山本云云、木脇大炊助祐兄後任左衞門尉、伊東二右衞門尉、祐昌曾祖父也、眞玉民部左衞門尉重實後任紀伊守、三右衞門重能曾祖父也、長井善左衞門尉・鎌田筑前守政心又七郎政昭六代以前祖、井尻九郎次郎祐宗伊藤權右衞門尉祐保之祖父也、其母宇多氏宇多新左衞門尉貞次女、園田清左衞門尉筑後守實正曾祖父也、扈從矣、先入于小野村園田清左衞門尉之宅、微服徒行之爲支度之際、實久方之兵殆乎五十騎馳至曰、今夜貴久入于此宅、速可出畀、若有固辭、則各入室中可擒焉、園田氏潛入吾於宅後小社中、而所來之勇士等曰、貴久之去留吾不復夢見之、各襲來而吐虛誕之詞、

爲不正之事、是所以予之不快乎心也、早可搜求予之屋室、若不有乎宅中、則使家臣等爲後圍、忽可雪恥辱、聞此言各曰、貴久未有到于此地之間、早去此地搜求麗島中、悉以引退矣、依園田氏智略遁虎口難、而後木脇大炊助爲指南、發於小野、經樵夫之徑路、越於山嶽、欲到田布施之舊里、園田氏自已從途中歸私宅、再有兵之至、則廻謀略爲計、而欲貴久途中之無障碍也、且教家臣一兩輩從指南、貴久於途中有言扈從之臣曰、我與忠兼公嘗有父子之約者堅矣、今也豈背之乎、遂往伊作遂對面於忠兼、忠兼曰、重父子約、輕其自身、而來于此者可謂至孝也、吾無秋毫之有違意、而實久乘勢作亂於國中、令臣庶盡爲讎敵、且父子之情亦將向疎遠(ナンヽヽトス)、拭涙垂愛、而設宴所以抑留者三日、崇慰甚厚矣、同十八日、餞送于田布施也、

2103

「町田氏系圖」

石谷高久——左京亮頼本——伊賀守梅吉——
梅久——忠榮「天文五年ニアリ」
八郎左衛門尉　伊賀守　法名心傳

大永七年丁亥六月中旬、島津八郎左衛門尉實久發陰謀、掠取伊集院・日置兩城、加之奉襲　太守貴久公、失防禦之術、退去於麗島、實久奉迎　前太守勝久公、自執權恣振威、國人不服、

2104

尚〻三日より御動有へく候、又去廿三夜「日新公」相州伊作城へ被切乘、究竟之人多〻被打取候、南郷も知行候、爲御心得候、

來月三日到廻・敷根、打つゝき三日御動あるへく候、其方之人數奔走候へと御意候、御油断有間敷候、御油断有間敷候、恐〻謹言、

「大永七年」七月卅日　　匡久(花押)

くまへ

山田安藝守(忠豊)殿　　匡久
御宿所

2105

「樺山氏七代信久譜中」

「玄佐自書之記有之」

太守　忠兼主隠伊作、而後島津八郎左衛門尉實久以僞言與　忠兼爲合躰、已雖讓國家於　又三郎貴久、教　忠兼變其約、再入部于麗島、時改　忠兼爲　勝久、肝付越前守

・樺山美濃守者日新之爲味方、因茲大永七年丁亥七月七日、發兵船於麑島、雖寄于生別符、即防返畢、生別符者去年九月已來、所築之新城岸堀未全、又同十六日、以多勢責吾者太以不緩、雖然運命未至也無悉、同年八月三日、以雲霞之勢、改手易品雖所相攻、防禦盡筋力、故不得陷徒開陣也、其後　勝久主渡御于加治木、於茲樺山有可出頭之命、若美濃守有難伺候者、太郎參候之旨、遣豊後守之舍弟備中守并實久之執事松崎丹波守告焉、然而不應命、其後福昌寺大乘院相加于件之兩輩、爲催促者數度、且末弘伯耆守爲加治木地頭、以小人之心巧言令色獲乎上、讒佞超人、國家招亂逆之基已顯然、以之觀焉、不如遁今日之急難、全身以俟後來之治世、愚息太郎十五歲八月十三日、候于加治木、謁　太守、此時以執事村田越前守、改太郎被任助太郎、同十五夜盛朗明月、解纜發櫓聲歸于麑島也、助太郎亦應供奉之命、乘太守之船、迄曉天到麑島、其後請身之暇者雖及度度、不能免許、而曰、今年諏方之祭祀延七月期九月、祭祀終而後可免云云、兼有此約、則九月廿八日俟祭終、而再不爲上達、廿九日之夜乘小舟、所以歸帆也、美濃守者落飾名數外、太守　勝久雖有數度之召、敢不應貴命者也、

「樺山玄佐自記」

一扨又八月三日、生別府城責様々の御手立なれ共、最前相州様江廣久奉進上御神判、正直天道に相叶故にや、其日を取延、扨到加治木、勝久様被成御座、樺山可致出頭、美濃守於無其儀者、太郎可罷出之由、豊州御舍弟備中守、實久御奉行松崎丹波守、從後々福昌寺談儀所御加り、數度被仰懸つれ共、生別府下輩の者迄被廻御手、末弘伯耆守与云人加治木地頭ニ而、種々武略の条、惡事出來一定与見得たり、廣久兎角可抛身上なりと而、太郎拾五歲、八月十三日ニ加治木江出頭す、其時村田越前守御老中なるをも而、助太郎与号せられ、十五夜月朗なるに御座船に召列、曉近く御着岸、其年鹿兒島御諏方御祭七月事延、九月にと有り、其内度々御暇之由雖申上、御祭礼迄可致堪忍之儀被仰下、此折ニ茂鹿兒島かりや〳〵付五町、鶴垣内榎田と云門三ツ、むかしの様にと承候得共、それをも打捨、九月廿八日、御祭禮事終ぬれは、廿九日夜、以小船不及御暇退出す、其後種々可罷出之旨雖承、兎角申延、美濃守は法躰仕、自号數外、終勝久様へ不出頭、如此之處ニ、新納殿・本田・北原以同前、正宮社家ニ被成御弓箭、生別府加治

木堺をも不成不通、新納殿・本田へ内心を通之刻、「以下大永六年ニ載ス」

2107

『調所氏譜恒房傳』

大永七年十一月、清水城主本田紀伊守董親及志布志城主新納近江守忠勝等、合師來伐宮内神官等、神官留守・桑幡・崎田・最勝寺等皆據社壇八幡寶殿、構之兵備、号曰御壇、恒房亦自國衙趨偕以拒之、二十八日兵火罹社壇、社壇蕩燼、留守等潰走、桑幡乃奔于櫛間、崎田奔于山東、而恒房及最勝寺奔于麑府、寓居久矣、於是董親乃掠神領、自清水掌祀事者二十餘年、如守君神、亦渠族人本田刑部少輔親貞入道一恕自姫木領祀事云、凡調所氏自初恒親就職國衙迄恒房、時十有八世五百三十餘年、而遭此亂、亦可謂時運矣、

2108

『樺山玄佐自記』

其後種々可罷出之旨雖承、兎角申延、美濃守は法躰仕、自号數外、終勝久様江不出頭、如此之處に、新納殿・本田・北原以同前、正宮社家ニ被成御弓箭、生別府加治木堺を茂可成不通、新納殿・本田江内心を通之刻、大永六年霜月廿八日、宮内御社頭天火にや、不残焼失す、從其砌數外新納殿・本田・北原・肝付越前守以同前、加治木江儀絶す、其比迄横川者新納十郎地頭、曽於郡は新納殿・北郷殿、吉松・西之城を別而、西之城は新納殿、吉松は北郷殿拜領共也、

2109

『貴久公記』

此紀伊守者、去大永七年丁亥、背先君命ヲ、清水楯籠作御敵ヲ、于時八幡宮衆徒所司ノ神官等各構御寶前、号御檀國中之人民同籠居ス、本田・新納江州衆ヲ引卒攻來ル事及度々、佛在靈山時、第六天魔王引無數之夜刃羅刹來テ作佛敵ヲ、至和光垂跡今更如此也、有時從小家火起魔風忽吹天、神社一時焼失す、其後本田宮中ヲ一分ニ領、徒ニ勞人民、造作己私宅畢、

2110

「新納忠勝譜中」

「寫在清水臺明寺」

「字欠欠」慎敬白

正八幡宮依炎上　藤原朝臣忠勝

奉寄進鵝眼一万疋其願文曰

夫以神者依人之敬增威、人者依神之徳添運矣、先蹤指掌者乎、抑正八幡宮者、非日域神祇廟三神之苗裔矣、異朝陳之、大王之息女、禀日天子之陽氣妊胎誕育大王、有叡覧是斯異形異相、而非可續天子之位者乎、奉乗虚船放捨空海、居諸數趨轉、仁王四十三代元明天王之御宇、和同元年着岸之广須隅州桑原之庄、則來下八流之幡、圍繞前後、号曰八幡、而後出現天弃石、於此鑛不思議之肝文、其頌文云、昔於靈鷲山説妙法華經、今在正宮中示現大菩薩乎、依此文奉名正宮云云、粤去大永三年癸未不圖兵革懿起、然則守護方當方既逮義絶、然處敵方卒猛兵、此家欲爲對治於愚領槻野之条、家來之士卒少々懸合、相當之禦矢射處仁、守護方運命聊傾乎、打死虜數百人、得忽軍利之勇於戰場、播既名譽之勢於萬方、從然來諸篇任心衆人開悦眉事、是併冥見加被之瑞、家運倍增之瑞矣、然處迄于大永七年丁亥十一月廿八日、正八幡宮之炎上觸傳聞處、即驚愕仰天、嗚呼言語道断以外之大災矣、所詮、社家籌策之先札、弓箭長支者、足輕以下亂入壇所、神殿出火欤、然者至其時者、爲社家非被崩寶殿乎、文章掲焉也、退倩思之、神職神官之身而、義兵爲宗鉾楯、爲業計知、是背神慮欤、所以者何、或寄田代欲爲崇敬菩薩、或於有大望自訴者、假令爲何雖爲義爲敍用之欲、爲自他安全之的據、數ヶ度雖致裁許、終無承引、剩捽儛敵之心、書札不能返答、凡神明佛陀者於豕光(ママ)自樂之於眞都趣、凌得大悲之化、心不倦忍苦堪勞、接強剛難化之機、欲至一實中道之覺臺(ヒカ)、兼國家安寧万人快樂之擁護、無懈掛忘至誓自由之非道、豈不令刑罰乎、就中八幡大菩薩之御詫、或咄銅焰、或雖爲食鐵丸、心汗心濁之族可捨給見、是世流布之神勅眼前之境、於此豈可不驚乎、可不慎乎、然處被官群兵等社家亂入、終日闘戰之時、聲震大地、兵火之煙雲覆半天、雖然社頭堅固無横災之条、万吉々々、幸甚々々而已、掛處經數日、從壇處之民屋起猛火、鉾焰遷玉殿刹那破滅之成灰燼、言表意外之災蘖、以凡慮難測、以愚言難述、予寶社之歎滅亡、神慮之慨虚無、雖爲輕薄微少志、所之用却(都)一万疋致寄進、偏抽丹心者欤、所詮、於向後從何家再興有企者、可爲一分之助成、萬一於我家今度一亂、尚々得勝利於官禄増進者、必可勵造社之功、是所謂微塵成泰山、涓滴滿巨海濫觴欤、仰願者神慮廣大之廻於眸丹、祈渇仰之哀、於志武運、於及子孫万葉安全、於蒙國家万品給、再拜々々敬白、

願書之大躰如件、

藤原朝臣忠勝判

2111

大永七年丁亥十二月二日

慎敬白

正八幡宮依炎上、藤原朝臣忠勝奉寄進鵝眼一萬上、(足カ)其

願文曰、

夫以神者依人之敬増威、人者依神之徳添運云々、然處迄于大永七年丁亥十一月廿八日、正八幡宮之炎上觸傳聞處、即驚愕仰天、嗚呼言語道断以外之大災矣、所詮、社家籌策之先札、弓箭長支者、足輕以下亂入壇所、神殿出火欤、然者至其時者、爲社家非崩寶殿乎、文章掲焉也、退倩思之、神職神官之身而、義兵爲宗鉾楯、爲業計知、是背神慮欤云々、敬白、

願書之大躰如件、

大永七年丁亥十二月二日　　藤原朝臣忠勝判

2112

一兼親之代こたんと清水きぜつ之時、社等ニ天火出來りて燒くつれ候へハ、留守殿ハ逃失候て、廿五六ねんも宮内ニあしを入なく候、勝久様の御たいてんの以後、あまり〳〵わひ候間、ミやうゆうの内をほん候分五町五段被進直ニ被申候、此度本田殿落城の弓矢に、ミやう十二町三半候うのかうめ木のふさハ、三町曽於郡之内にて候へ共、こゝもかしこも闕所仕候て、水をくませ候する人そくなく候、弓矢道行候ハ、返し可申由被仰候へ共、今まて覺悟候はし、さ候に火のほのめくかとおもへハ、正興寺高寺にもとひうつり、又たなとにもうつり、一時にやきくつれ候、桑幡の政所殿ハくしまのことく、最勝寺殿ハかこしまのことく、崎田殿ハ山東のことく被逃候、種〻わひ事にて被直候、

一同代調所殿も同弓矢に、こうの御神のふんをうちすてゝ、ミや内のことく被逃候てのちハ、かこしまに被參、伊作にうつり打死候、神役ハ一如のつかまつられ候、

一留守殿たいてんの時ハ、社役等清水よりさせられ候、